

ハリボテの指揮官

sincerity

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初手で対応を間違えた無職の転生者が、何だかんだ重桜転覆を狙う切れ者指揮官と勘違いされて主人公っぽくなる話です。

基本ダメダメですが、偶にがんばる予定。

テンション高めに誤魔化しながら綱渡りする彼の明日はどっちだ。

※匿名が機能してなさすぎたので辞めました。

ついでに現在校正入れているので更新は暫しお待ちを……。

目次

一章	一話	1
	二話	10
	三話	22
	四話	35
	五話	46
幕間	ツギハギの主人公	64
	もう一人の主人公	79
二章	ヴァイオレンスアワー①	91
	ヴァイオレンスアワー②	105
	七話	118
	八話	129
	九話	142
	十話	155
	十一話	174
	十二話	190
	十三話	202
Ich liebe dich.		216

一章

一話

「おはようございます、今日もキレイな顔ですね」

朝の母親へのご機嫌取り。露骨だが、しないといよいよほっぴりだされるぜ。

ロクデナシは辛いなあ全く！ 仕事しろよ俺え！

——で、こういう時は俺の身辺紹介をするべきだろう。

簡潔に言おう、25歳、無職、男、特技はタイピング、苦手なことは10分以上考えることだ。悩む能力を失った、バカっていうのはこういうのを言うんだって自虐的なのが悩み。

後転生者だ。多分此処はアズレンのワールドじゃないか？ はつきり確認してないけど。

終わり。俺に特徴はあんまりない。姉曰く「真面目にすればイケメンじゃね？」とは言われたが俺は真面目にしないから意味ないよねっていう。

「世辞は良いから朝飯食べな」

今日は——トーストとヨーグルト。しかもスクランブルエッグ！

この日本人が好きな朝食の形態は英国のイングリッシュ・ブレックファストって言うらしい。

アッチは真似すると量とカロリーがヤバすぎて運動不足のやつは太るから気をつけろ、俺との約束だぞ。

まあ言うほど多くないのでなんやかんや食える量。早速俺は座って牛乳をぐいっと一気飲み。

「相変わらず牛乳好きやねえ、アンタ」

「牛乳は最強だぞ母上、なんせバストサイズだって改善する最強アイテムだからな」

まああれ本当が疑惑が有るけど、こうやって全世界で刷り込んで俺はプラーシーボ効果を期待していききたい所存だ。

母上は完璧に俺のこの手のタワゴトに慣れてしまっていて

「変なこと言っていないでさっさと食っちまいな」

と言うだけ。優しいんだ、何か無職なのが申し訳ないね。

——無職な理由は、まああんまりキャラじゃないんだが「会社にキレた」。

だって残業二時間以上当たり前だったし、サービス残業と来た。意味がわからないから、残業は良いから金くださいよって三回くらい言っただけであちら方は無視。

とうとうガチギレした俺はあっさり退職という流れである。うん、キャラだねこれ結構アレな人のアレだわ。何か努めてる同僚には評価されたけど、ソイツは金くれなわけで問題は解決しない。

事情は汲めても金は増えぬ。実家が快く受け入れてくれたのは嬉しいが、申し訳無さも消えずに残っている。

「アンタさー、何社落ちたって言ってたっけ？」

「300ぐらい」

絶望。コミュ力低いのが仇となったというか、俺は大人として立ち回るのが致命的に下手だった。

冴えない普通の男だったと思うのだが、この世界に来てからの俺はこうだ。

まあ景色が常に二次元っぽいような気がするし、俺もその手のキャラにでもなったのかもしれない。転生者って皆ぶっ飛んでるもんな、俺もぶっ飛ばなきやダメなんだろうか。

まあ若干ネジ外れてるはずだ、この脳内で出力する地の文的な何か
が十分な証拠。

「何時になったら定職についてくれるんだか……」

「いやー、返す言葉もないですよ母上」

仕事をする意欲は有るし、エネルギーも有るのだが雇ってもらえなきや意味なし。

これは俺の面接態度にも問題があるんだろうが、もっと言えば現在の重桜の情勢に問題が有る。

此処はアズールレーンの世界観だと俺が気づいたのは、この重桜と

かいう名前で動いている日本のせいだ。そしてアレのメインストーリー……もう分かるね？

戦争になる。クソツタレな理由でな。ああ、ホント碌でもないよこの国は。

——うーん、定職につける予感がしない。一航戦がたが無茶してな
い内に職に就かないとヤバイよね、何か結構追い詰められてたし。

っていうかセイレーンだっけ、あの深海棲艦ポジの。アツチに本気
になれよな、何で身内揉めしようとしてるんだ？

「それで、今日は予定ないんだっけ？」

「無いな」

「今日、軍の人がアンタに話有るって」

「は？」

「いやだから話有るんだって、軍の人じゃ私だって断れないよ」

「軽すぎるよオフクロ!!」

急いでパンを齧る。その姿は木を齧るビーバーに似ていたと後で
聞いたが、そんな悠長なこと言ってる暇ないと思う。

「おいおい、俺はまだ寝巻きだぜ!! 何時来るって!？」

「確か9時ぐらいだから——あと5分だね」

WTF!?! 何でうちの家はこう軽いんだ！

軍の人って俺だって流石に怖いよ、せめて髭とか切ってマトモな服
着ないと。今着てる俺のシャツとか前に思いつき「仕事より趣
味」ってでかでかとか書かれてるんだぞ殺されるぞ!?!

「何で言わなかったわけ!?!」

「昨日珍しくアンタが9時ぐらいに寝たじゃない？ あの後の電話だ
し、何だか優しそうな人だったから大丈夫かなって」

「母よ、多分大丈夫だが俺にだって最低限の常識は有る」

別に一度限り出会う軍の人にどう思われても——うん？

この流れどっかで見たな。というか思い出した、艦〇れの二次創作
で腐るほど見た。

——言われるんだよな、「貴方には司令官の適性があります」とか。
この場合……指揮官だな。

で、大体その手のやつは逃げれない。

「母さん。一生の頼みが有る」

「何さ」

「その人が来ても、息子は昨日から失踪していると伝えてくれ」

「私に嘘がつけるように見える？」

そうだった、この人嘘がとんでもなく苦手だった。

詰んでる、不味い俺は指揮官にされるぞ!?

——チクシヨウミスった、死んでもなりたくねえ!?

もつと深く考えるべきだった。漠然と転生するだけで終わるはずないよねそりゃあ。この手の流れで一般市民の提督——とか死ぬ程俺読んだよね。

もつとちゃんと二次創作の内容覚えておくんだった。

「何か、何か逃げ道はないか——」

考え始めた矢先、地獄の鐘が鳴り響く。

ピンポーン。インターホンに廊下飛び出し、玄関のすりガラスを見るとデカイ人影ぞろぞろと。これはそろそろ辞世の一句のお時間がやってくるのかもしれない。

佐藤 弘ひろし、日本では一番多いシリーズの組み合わせの名前だった筈の俺は、一世一代の勝負に出る羽目となった。

「すみません、前日の夜に電話して押しかけなんて」

櫻井ボイス。コイツは裏切る方だイヤだ帰りたい、つてここ家だわもう良い子宮へ帰らせろ。

エネミーの顔付きはとてもいい。程々にきりりとしたダークブラウンの瞳に、男の匂いを消しきらないながら整った目鼻立ち。男の俺でもメロメロだがしかし櫻井ボイスだ。

後ろのガタイの良いカイジの黒い人みたいなのには入ってもらわずに、取り敢えずこの人だけリビングへご案内。この人から下がらせしてくれたのはさすが櫻井。でもお前は裏切る匂いがするんだ怖いんだ、無駄に人心掌握うまいとかそういう人だよね多分。

「そ、そそそそれでお話というのはあ!?　　っていかお名前はなんですかあ!？」

ガツタガタである。笑うな、俺は櫻井ボイスの軍関係者ってだけで嫌な予感しかしてないんだ。

すみませんでした、と男がはにかむ。わおイケメン、男じゃなければ即死だった。実際我が母君が顔を逸らしてらっしやる、乙女だなあ。

「名前は櫻井といいます」

ほら櫻井!?　え、マジで櫻井なんだ生粋の櫻井って普通に凄い。

しかしあつちは軍服。俺はまさかの「仕事より趣味」って書いてあるTシャツでの対応。

——うーん、もうこのまま呆れて帰ってくれねえかな。

しかし櫻井さんは何だか寛大らしい、俺がちらちら自分の服装を見ているのに気づいたのか

「服装が気になるのでしたら着替えてからでも構いませんよ」

イケメンだな、仕事が出来そう。

しかし俺は今から狂人になる、ああ狂人になるぞ俺は。

「いや、これが正装だから」

きりりと表情を引き締めて言い切ると後ろから殺気。母上待って、俺が指揮官になっても良いというのか。

しかしエネミーは大きな声で笑い出す。

「面白い冗談を言う方ですね」

違う違う、俺はマジモンのおかしい人なんだって!?

くそ、こうなりやヤケだ。話を急かして適当に蹴ってダイナミック二度寝をキメてみせるぞ俺は。

「それで要件って何、早く話せよ」

後ろからゲイボルグでも飛んでくるレベルの殺気。俺の心臓はもう色んなもんで刺し穿たれてるから勘弁してくれ、パンク寸前なんだよ。

心臓の音を止めながら馬鹿げた態度で対応するのだが、櫻井さん全く動じない。アイアンハートか？

「そうですね、本題に入ってしまったでしょう」

「すみませんが、指揮官になって頂けませんか」

ほら来た。俺は知ってるぞ、このまま俺は地獄へ走らされる。

「却下だ。このゴミみたいな国の為は何で俺がご奉仕せにやならんだ」

もう手が後ろから伸びてきている錯覚を起こす、実際の距離は5メートルはあるはずなんだが。妄想心音かな？

でも実際、この国に奉仕はしたくねえ。

メインストーリーをやってる頃から思ってたんだよ、重桜はそんな無茶な作戦に付き合わされる国民の気持ちがあつちやいない。

それこそ第二次世界大戦と同じ。それに付き合つて死んでいかなくちやならない艦が不憫でならない。

「アンタラが国民のことを考えて、守るつもりで戦っているように見えない」

「俺は一般市民だ。その中では外れものだが、でもアンタラとは違う」「つまりだな、俺はアンタラと同類なんて思われたくはない」

最近重桜の上の方が不祥事やら何やらを揉み消そうとしてるって話も風の噂でよく聞く。

それがホントか嘘かは知らないが、嘘なら「それがばら撒かれる程度の信用」だし、本当なら「信用に値しない組織」だと俺は判断できる。

俺は別に何か出来る男でもなけりや、きつと立派にもならない。

だが、本物のバカの一員にはなりたくない。そんな無茶で振り回す側であるくらいなら、振り回される側のほうがマシだ。

「そういうわけだ、帰ってくれ。大体俺にそんな仕事ができるとは思えないしな」

会社に文句つけて退職、300の会社から蹴られた。

俺には指揮官をやる能力も、責任感も、動機も無い。

多分俺には適正みたいなのが有るんだろうが、宝の持ち腐れで、そして重桜の腐敗に手は突っ込みたくない。

バカだが潔癖症なんだよ。

「貴方のような方を、探していました」

「……………は？」

櫻井さんががちりと俺の手を握る。

——待て、どういう流れだこれ。

櫻井さんの眼はマジだ。俺に何かを見出した、そう言わんばかりに輝き、何だかよく分からない使命感で燃えたぎっている。

「私は最初、貴方が『彼女達』に指揮官と呼ばれる——その適正の為だけに尋ねました」

「ですが、今の言葉でこの勧誘の意味が変わりました」

櫻井さんが手を離して、綺麗に姿勢を整えた後に深く礼をする。

「そういう貴方だから、私は指揮官になってほしい」

「ど、どういうことだよ？」

待て、待てよこれ。

——勘違い物の流れじゃねえか!?

櫻井さんは顔を上げた後に俺の眼をじっと見て話し始める。

「仰る通り、現在の重桜はとも国民を見て、地に足の着いた方針を取っているとは私も思っていないせん」

「そ、そうなのか」

ヤベえ、コイツの眼が真っ赤に燃えてる。これは俺の話をもう都合良く捉えちゃうアレだ。

——コイツは単純に導入から出てくるサブキャラタイプの櫻井だ！
主人公に優しいしなんか色々知ってるお助けタイプだ！

変な火を付けたらしい！

「私はこれから、重桜の上——大本営の権威を崩すための手はずを整えています」

「貴方のような方にこそ、この計画に手を貸して戴きたかった」

「今の重桜の軍人に対して、貴方のように物怖じもせず正しさを語る方は少ない」

うん、うん。俺もやったらいいと思うよ。革命とかカツコイじやん良いぞ。俺もさつき多分、ちよつとだけカツコよかったな。主人公っぽかったな。

でも俺は巻き込まないでくれるか。

つてかもしかして普通の軍人に言つてたらこれ処罰モノ？ 普通に気づかなかつただけなんだが!?

しかし俺の抵抗の意志を汲み取つてくれない櫻井さんは続ける。

「もう準備は進んでいます。後はそれに武力が必要だった」

「例えば——『彼女達』に匹敵する、もしくはそれ自体」

「つまり俺に艦で謀反しろつて？」

もうチビリそう。何で電話からたかだか12時間ぐらいのやり取りで俺は国家転覆に付き合わされてるんだ？

勘弁してくれ。俺はマジで頭がそこまで良くないし、正義感も精々会社辞めるので精一杯なんだ。

国崩しに付き合えるほど度胸がない。

「それやったら、姉貴とかに迷惑かかるだろ」

櫻井さん微笑み。辞めろ、何を言う気だ。

「もしも、もしも失敗するようなことが有つても——貴方と、貴方の家族の安全は保証します」

いやすごいいね、やるメリットしか無いように見えるよ。俺がやりたくないということを除けば。

「俺は政治は出来ない」

「相応の報酬はご用意いたしますが、無理に新たな体制の一員になれなどとは言いません」

「俺が艦と上手くいく保証はない」

「私に続く者で出来る限りの援助をしましょう」

「俺にはそこまでの事をする能力なんかない——」

後ろの母親をちらりと見る。止めろ、この暴走櫻井を止めろ。

——しかし駄目だった。

母親の眼からは決意の匂い。

「出来るか出来ないかじゃないでしょ。アンタはやりたいの？ やり

たくないの?」

何だこれは。待ってくれ、まるで俺がやりたいけど物怖じしてるみたいな空気は。

——絶対やらん、やらんぞ。

もう作ったキャラなんか構わずに言っただろうと思った矢先、櫻井が小さく息をついて

「良かった……この勧誘を断る事は不可能でした」

「軍に無辜の民が無理やりなどと……そんな事は、私はしたくなかったのです」

俺もされたくねえよ。

「俺もされなくなかったよ!?!」

夢から覚めて第一声。声は鎮守府内を響き渡っていた。

はい、そういうオチです。色々有ってもう指揮官だよ、胃に穴が空く日も近い。

二話

さてさて、俺はユニオン派だ。ヨークタウン級とクリーブランド兄貴姉貴が好きだよ、エンタープライズかつこいいよね。でもアイツ主人公過ぎて会うのはちよつと怖い、怒られそうだよな。

会えるのかね、しかも俺って美少女受けするキャラじゃないと思うんだけどホント大丈夫？

「っていうか、いきなり連行？」

「すみません、正直な所逃げるなら武力行使も問わないとすら命令されていまして」

おつかねえ機関だ。多分「国のためだぞ」とかお馬鹿な上の人は思うんだろうなあ——反吐が出る。

俺は高級車っぽい車の中で、櫻井と隣合わせで座っていた。今もある「仕事より趣味」シャツ着てるぞ、ちゃんと書いてある通りに実行しないとな！——冗談だよ。

つてか周りにさっきの黒いおっさん居る。カイジかよ、俺は連帯保証人になってないし高級車に傷を付けて回る趣味もねえぞ？

「ああ、彼らは貴方に危害を加えることはありませんのでご安心を」
ご安心できません。何だよこの圧迫、精神的にもリアルでも圧迫されてんだけど。

まあ俺が見たらニコニコしてくれる辺り悪い奴らとは思わない。つてか子供扱いかよ？

「それでは、乗って頂いてからで申し訳ありませんが、聞きたいことはありませんか？」

「結構ある」

山程あるね、積み上げたら月に行けるかな。

車の走行音に何となくピリピリとしてくるのを抑える。何か状況が不安煽ってくるんだよ、誘拐見てえだよ。

「まず適正ってなんなの」

「おっと、大事なことを忘れていました」

抜けてるアピールか？ 悪いが此処はコバ〇ト文庫じゃないから

興味ないと思う。っていうか俺にスキ見せてもBLだよ勘弁してくれ。

きりつと顔を引き締め直した櫻井が説明に入る。

「簡単に言うと、艦が言うことを聞くか否かというものです」

「適正無いと聞かないの？」

「はい、恋愛関係でも不可能です」

すげえ。徹底されてる世界の秩序だね、こういうの嫌いだわ。

「適正があれば、憎悪を抱いていようが命令に逆らえませぬ」

「成る程、ポケモンのジムバッジだな!？」

「それは分かりませんが……」

そうじゃん。俺はバッジが揃ってて、普通の人は揃ってないんだろ

? 簡単な話だ。

——でも、言うことに絶対服従ってことか。

「じゃあ俺が死ねって言ったら?」

「恐らく死にます」

何だそりゃ、馬鹿げたルールだな。

——ふと、脳裏に浮かんだ言葉が口から漏れる。

「チェスの、プレイヤーと駒……」

「そうですね、その関係なら分かります。貴方はプレイヤーとなる権利があるのです」

チェスだったら、敢えて取られる位置に駒を置ける。

——そうだったな。この世界の艦は『駒』だった。丁度いい比喻つか、気分があんまりよくないが。

量産できる兵器。心ある量産品。伽藍堂。覚醒するまでは、スペアパーツが有る。

胸がグツと重くなる。他人事だが、他人事じゃない。俺はそういう娘達と関わっていくってことだから。

——何か、適当にやっついていこうって感じにもならないよな。

出来れば自立するぐらいの給料で負けるまでやり過ぎしたい所なんだが、何かそういうわけにも行かなそう。

昔っから生きるのに必要ない正義感みたいなのはあるからなあ。

俺の性分とは言えバカバカしくもある、こんな時まで何を考えてるんだってトコだ。

「ですので、もし愛国心が邪魔して動かない場合は貴方に無理矢理……………」

「しねえよ」

ちよつと自分で驚くほどの即答だったが、理由はすぐ分かった。

「それは、俺を辞めさせた会社と同じことだ」

——金が欲しけりや言うことを聞け。

言われた。俺は無視をして反抗して、そんな奴だから捨てられた。捨ててもらえるだけマシだった。艦は、そこで金を頼るツテがないのと同じ。それに心を軋ませて、歯車にすらなりきれなくなるかもしれない。

「ポリシーに反する」

それ以上説明できない。

でも世界なんて理不尽だ。なのに、上司さえ理不尽だったらアイツラに申し訳が立たない。

——それは、フェアじゃないことだ。

櫻井も俺も、重桜の気に食わない所は多分そこのはずだ。同じことをしちやダメだろ。

「……………もし貴方以外に代わりがいる、と言うなら？」

櫻井の冷静な目つきに俺は多分、ちよつと怒った。

狭苦しい中で腕を組んで、足を組む。

「アンタは重桜と同じだ。何かを変えても配役が変わって、悪役がアンタになって同じことが起きるよ」

「自惚れちゃいけないぜ櫻井さんよ。『アンタだから』重桜を倒そうと思うんじゃない、『アンタの立場だから』重桜を倒そうと思うんだ」

そこは弁えるべきところだ。

俺達個人なんて大したもんじゃない。少なくとも大きな事が起きる場合は、配役によって事が起きている。

配役は変わりようがあるし、どうなるかは分からない。

「変えたいんだろ？ じゃあアンタが上に立つ時、台本を書き換えた

いんじゃないのか？」

「同じ台本で始めたら、悪役が別にキャスティングされるだけだ。問題が全然解決しない」

まあ、本当は俺なんか偉そうに言うべきじゃないのかもしれないが。

でもそうじゃないか？ 支配する人間が変わっても、やること一緒なら同じことが起きるもんだ。

そんなもん、世界史で吐くほど習ってる。そしてドラ○ンボールでも死ぬほど見た。アイツラ何でいっつも戦闘力の桁が違うんだよ。

為政者がただ変わるだけで国は変わらない。変えるなら、為政者の本質が変わる必要がある。

「……………失言でしたね。心に留めておきます」

「いや、偉そうな口聞いて悪かった」

真に受けるな櫻井さん。大丈夫だ、そう思えるならアンタ良いお偉いさんになると思うから、うん。ほんとほんと。

いろいろ考えてみたが、ぶつちやけ無職の人の言葉を真に受けてたらストレスで倒れるぞ。

という訳で、その後変な施設で俺は色々した。

心理テストみたいなのをした。質問は「貴方は赤の扉と青の扉があつたらどっちに行きますか」とか「古き良さと新しき挑戦、どちらが好きですか」とか。ぶつちやけアズールレーンとレッドアクシスのどっちが好きかみたいな質問だったような気もする。大体はアズールレーン寄りの答えだったね俺。

新体力テストみたいなのもした。最近運動してないからクソザコナメクジも良い所。だって俺求職で忙しいからさ、レジャーとかも出来ないし。

学力テストも勿論ダメ。海戦術はからっきしだったが、まあ漢字は結構読めた。

二次創作読んでたし、普通の本も読んでたからだと思う。好きなの

はK A E Oマ文庫だ、硬派だろ。意外だねって美少女に言ってもらいてえ。

まあそれから服をもらったり、何やかんや有って髪とか髭とかを整えたら後は夜中で、そのまま鎮守府にブチこまれることになった。やることもないから寝た。

そして、ナウ。さつき¹話に戻る。

着替えて何か俺ってイケメンじゃね？ とか鏡を見て思いながら、ふうと一息ついて執務机に座った所で眠りこけていたらしい。

だって忙しかったんだもん。夜中まで色々されたんだぜ？ 25歳ってもう体の健康のピークは過ぎてるっていうじゃないか。

机は暇だ。書類もないし。櫻井さん曰く

『秘書艦は明日の朝には執務室を訪れるでしょうから、まずは二人で会ってみてください』

とのことだった。それは朝チュンしていいってことか——最近、発想が中年っぽいやらしさにまみれていかんな。

ってか誰が来るかな………。俺的には何というか、まあ気の合う奴なら誰でも良い。翔鶴とか一緒にイタズラしてくれそうだよな、いやどうなんだろう？

ああ、でも誘惑された時に負けちゃう悪い大人なんだよな俺。そこだけ頑張る必要が有るよね。

——考えている内に、突然扉が開く。思わず背筋が伸びる、気分は面接官だが先日まで立場は逆だったんだよなあ、泣けてくる。

最初に映ったのは白い羽織——勝った。

俺はもう何だか勝ったつもりで名乗りを上げるのを待っていた。

結論を言うと、負けた。

「重桜航空戦隊所属、かつての大戦最後の精鋭空母………瑞鶴よ！」

俺は顔が固まってしまった。

——裏主人公枠じゃねえか!?

「えーと、マニュアルマニュアル……………」

俺は櫻井さんから貰いたてホヤホヤ——ではない「しきかんのはじめかたっ！」という本を取り出して読んでいた。タイトルラノベかよ、あの人はヤバイ趣味してたりする？

っていうかこれは不味いな。瑞鶴イベは実質メインストーリーだ、巻き込まれたくねえ。

——そんな情けない俺の様子は、瑞鶴の瞳にどう写ったのだろうか。溜息が聞こえてくる。

「あのさあ、挨拶にマニュアルって要らないと思うんだけど」

額に手を当てて呆れている。そうだな、確かにそうだ。

正直ページをめくるといいう作業で精神を落ち着かせてた所も有る、予想外すぎるんだよ。

面接並の緊張のまま、がたんと勢いよく立ち上がる。あ、ダメだこれキョドリそう。

「だ、大本営に無理矢理指揮官にさせられた佐藤弘です！ よろしくお願いしまーすっ！」

サ〇ーウオーズかよみたいな文句と共に直角の礼、着席。これ謝罪の時の角度だわもう色々終わってる。

急いで顔を上げて何か喋ってみようと思うが、手がもたもたと動くだけででんでダメ。俺ってコミュ障とかそういう次元超えてるな、これは何とかしたい。

「よ、よろしくおねがいします……………」

瑞鶴まで俺につられて変な顔で敬語の挨拶。これは死にてえ。

——まあ、でも何か安心する感じだな。瑞鶴って性格に癖がないしな、グレイゴーストさえ居なければ。グレイゴーストさえ居なければな。

フラグじゃねえ、逆フラグみたいなもんだ忘れろ。

「ふう——いや、ごめんな」

カチリ。スイッチみたいなのがようやくオンになった。

こうなれば大丈夫だ、喋れる。こうなるのに時間が掛かるから面接

落ちるんだよね、俺。

「ぶっちゃけトーシロも良い所でさ、艦って美人さんばっかだつて言うし俺も困ってるんだ」

ゲームをやってる時はあまり深く考えなかったが、目の前で動く超高性能MMDである彼女はたしかに美しい。

琥珀色の大きくて丸い瞳に、目鼻立ちは櫻井さんなんか比べ物にならないくらい（あの人もすげえけど）くつきり度合い。睫毛なが。

朱い縁起物みたいなんで括られた栗毛色の髪は作り物みたいなのツヤが見える。

何より羽織の中に着込んだキャミソールから見える谷間。いや大ききさもだけど形すげえな、ボールかなんかか？

ミニスカートのせいで否応なく目に入る太もも、こちらは大変健康的でよろしい。ガリガリだと普通に心配だしな。

「すげえ、人形みたいだな」

感心したように口を開けていると、瑞鶴が照れくさそうに髪をいじって

「その………褒めてくれるのは良いんだけど、そう凝視されると恥ずかしいと言うか」

と言い始める。

——破壊力がヤバイ。眼の前で種田梨沙ボイスで喋られることの破壊力はヤバイ。死んでしまう。

「すげえ………悪いんだけど、『先輩』って言うてみてくれると嬉しい」

「え、別に良いけど………先輩？」

「栗山さんは俺が守るぜ！ 特にそのメガネ！」

今なら不死身の半妖になれるかもしれない、右手に令呪は出てこない。今は担当違うからねマ○ユ。

誰か俺をKENNボイスにしろ、早く！

——さて、冗談は置いておこう。好感度上げて色んなものまねしてもらいたいな、いや本気で。

背筋を伸ばして伸びた鼻を引き戻す。真面目にすればイケメンら

しいからな、姉貴の言葉だと胡散臭いが。

「さて、早速仕事——」

「するの？」

「教えてくれる？」

瑞鶴が滑ったかのように頭をがくと急落下させる。あ、この娘反応面白いタイプ？

「教えてって言われても」

「そうだな、着任したら俺何すんだろね。掃除する？」

「掃除は……いや、確かに汚いけど」

瑞鶴は周りを見渡す。朝陽で埃がキラキラしてるのは瑞鶴の美少女力アップ描写で大変よろしいのだが、実際これは埃なので汚い。

——瑞鶴も分かんないのね。

仕方なく「はじめてのしきかんっ！」を取り出す。誰か略称考えてくれよコレ、愛用するしラノベっぽいから欲しい。感想ついででいいから。

にしてもページが多い。推定300ページ、文庫サイズとかご丁寧過ぎる。

「ちよつと待ってくれよ、最初の指揮官の仕事はだな……」

「これだこれ。何々……？」

『まずは自分に害を加えられないように命令しようっ！ 万が一のためだよ☆』

いやしねえよ。

いきなり出てきた物騒な文面に困惑してる俺が気になるのか、

「何が書いてあるの？」

と顔を寄せてくる。やめろ、肌柔らけえ……じゃなくて！

「近い近い近い！」

「ちよつと待ってってば、読めないじゃない」

顔を手で押しやるが座ったまま押しつけるには瑞鶴の力が強いなんの。ってかほっぺたやわらけえ、すげえ……ナニコレ中毒性有るんだだけ。

段々と変なスイッチが入り始めた所で、緩んだ俺の手付きのせいで

内容が読めてしまったらしい。

「……………ふーん」

途端に冷めた目つき。すつと俺から離れていく。

——まあ、嫌な内容だよなこれ。

だつて信用してないって言ってるようなもんだし。アツチは命令に逆らえない時点でアウエーなのにな。

ページを変えもせずに眺めている俺が不満だったのか、瑞鶴は淡々とするように努めて

「命令すればいいじゃない」

と素っ気なく言う。

「は?」

「そりゃあ命優先でしょ。私は何するかなんてアンタに分かるの?」

「いや知らんよ、翔鶴にテン普拉食わせまくったりするの?」

「勿論するわよ!……………じゃなくて!」

なんかデジャブな反応。気が合いそうだな。瑞鶴もバカのようにだ、うん。凄く良いぞ、好き。

「初対面で、身体能力は間違いなく私が上。そのマニュアルが正しいんじゃないの?」

まあそうだな。実際殺されかねない事をする指揮官が居るんだろう。

——でもなあ? 今までの俺を踏まえるなら、知らん。

「命令しない」

「え?」

「何? もしかして今すぐ俺を殺す気だつたりするの!? 軍人サーン助けて!」

「い、いやそんなことしないわよ!」

あはは、かわいいなあ。超ハッピーだけど、後で殴られそうだから此処らへんにしよう。

俺の脳内の美少女ってル〇ズ辺りの暴力系で止まってる気がしてきたが、実際あんまりからかうと嫌われちゃうからな。そうなる和我がづらい、とてもづらい。

「俺、嫌われたくないからそういう事しない」

「そういう問題？」

「嫌われなきや寝首はかかれなくて」

「なんかやむを得ずって言うなら仕方ない。俺の運の尽きか、余程行いが悪かったんだらう。」

「変なことしてないなら、意味もなく殺されなくていいよ。」

「あ、でも葬式代とか親に掛けさせるのやだな。これからライフが危険でデンジャーなわけだし金貯めて俺が死んだあとの処理とかはつきりさせときたいね。遺書書くか。」

「大体この文面だとき——」

「俺が間違ったときに、瑞鶴ちゃんが俺の顔をビンタもできないじゃん」

「なあ？俺も一回ぐらい暴走して美少女にビンタされて「何やってんだよ団長お！」とか言われたいよ。混ざりすぎだなこれ。ってかこの場合俺は蜂の巣だな、死にたくないってそれ何回も。」

「まあ、間違った事はしないつもりだけど、俺は有能じゃない。」

「幾ら言っても間違えるし、それが正しいと思いきもきつと有る。これから俺の横に居てくれるやつが、顔面の一発も殴れない縛りが有るんじゃないだろう。」

「……………変な人」

「瑞鶴は呆れて声も出ないという様子だ。まあ、これが正解の反応だろうな。」

「でも俺はしない。」

「もう一回立ち上がって、今度は机の前で瑞鶴と向き合う。」

「ええつとな……………うーん、ちよつと恥ずかしいこと言うぞ？」
「つつい頭を掻いてしまう。年をとるところこういう物言いをするのは恥ずかしくなるからな。」

「息を吐いて、ひーひーふー。これ出産だった、またやらかしちゃったよ。」

——ともかく、息を整えた。

「瑞鶴ちゃん、というか艦と『上司と部下』とか『指揮官と艦』みたいな関係を築きたくない」

「俺は指揮官らしくないから、俺の前で他の所みたいにする必要はないよ」

「えーと、だからな。つまりだな……………」

ああこっ恥ずかしい。

瑞鶴固まってるよ、絶対自己陶醉野郎とか疑われてるよ。嫌だなあ、でも。

——大事なことは言葉にしなきゃ伝わらない。

行動をしなくては、言葉で伝えなくては。

放つといてたらなんにも伝わってくれない不便な世の中なんだから。自分でなんとかするしか無い。

「俺は指揮官としてじゃなくて、人間として君達と向き合いたい」

「ムカついたら口答えすればいいし、間違ったことをしてる時はボコボコにしても止めていい」

「俺だけじゃ答えがわかんないから、一緒に考えて欲しい」

「こっちも一生懸命お前らに反論したり、止めたりするのも同じように受け止めて欲しい」

それで初めてイーブン。命令じゃなくて、心持つ者同士のあるべき形。

——軍人的には甘っちょろい。

知ってる、そんなの見れば分かる。俺が言ってるのは理想的関係で、簡単に築けないものだって知ってる。

命令した方がさっくりと物事が進むし、悩まなくていいし揉め事も少ないのは知ってる。

でも嫌だ。俺はだから、指揮官になりたくなかった。

俺達のために頑張ってるやつに、上からなんてしたくない。

「だから命令じゃなくて、頼み事を最初に一つ」

「俺をこれから助けてくれるかな？ 瑞鶴ちゃん」

これが俺の精一杯。重桜の今の体勢で、これ以上譲歩が出来ない。

ホントはもつと対等な場を用意してやりたいけど、俺じゃ無理だから。頼むしか無い。

——瑞鶴は呆気にとられたと言うか、俺の腑抜けな言動が余程バカしかつたのだろうか。何かちらちらと睨むようにこつちを見ている。

ちよつと悲しいけど取り敢えず手を差し出す。

「なにこれ」

「握手、よろしく。瑞鶴ちゃん」

最初は俺の手を見て戸惑っている様子を見せたが、さつきと打って変わってしおらしい仕草でおずおずと手を差し出してくる。

「ちゃん付けは辞めてよ」

ガツツリ掴んで握る。おお、すべてやね。

「分かった。よろしく、瑞鶴」

何だか恥ずかしそうでは有るが、これは俺の譲れない線だ。手をしっかりと振って友好の目印。

——知ってるか？ シェイクハンドって、武器を隠し持っていないって教えてやるために手を振るんだ。

俺は武器を持ってないし、瑞鶴も武器を持たない。

これが最初の一步だ。命令から始まる関係だから、拗れるんじゃないか？

「まあでも、出来るだけサボるつもりだからそのつもりで」

「え、ちよ!？」

いやだから民間指揮官だからね俺。瑞鶴とかが怪我しないように配慮するけど、功績とか称賛とか要らない。

当面の目標は俺が死んだ時の葬式代の確保と正しい遺書の書き方の勉強だ、あーあ忙し。

三話

「んじや掃除するか!」

「え、ホントにするの!?!」

当たり前だ、最近の子は分かってないなあ。

25歳が何をもって言うかもしれないが俺転生者だからな。中身は実質中年だぞ。

「これから来る娘が鎮守府見てキタネエ、とか思ってたら嫌だろ?」

「私は思わなかったわよ」

「それは瑞鶴がおバカナ子だからだ」

「何よ其れ!」

叩けば響くなあ、これは飽きない。ぷんぷんって上に擬音出てるぞ。

まあおバカというより単純に気にしない性格なんだろうな。目に映ったものを信用するのが優先って感じなのは良いと思う。

「まあ今のは冗談としても、こういう所から相手を凶る性格も有るからな」

「そりやそうだけど……」

「面倒なら俺一人でやっても良いし」

掃除っていい運動だしな、目指せスリム中年。

指揮官らしい仕事をする自信が全く無いので雑用に逃げようとしているフシも有ったが、どうやら気を遣っていると勘違いされたらしい。

「指揮官がやるなら私もやるわよ」

と何だかつっけんどんに返される。

——何か、相棒と言うか。娘みたいな感じ。

思春期の娘ってアレだろ、パパと服を一緒に選択するなっていうんだろ? 極端な例だって思いたいけど言われたら傷つく。俺はインフルエンザ菌かよってなる。

何やかんや手伝ってくれる辺り、育成難易度最低の初心者向けの娘だね。

「ありがとう」

頭を撫でてやろう。上から目線にムカついたら殴っても良いぞ。

「やめてよ、もう」

あれ？ まんざらでもない？ 待て待て、俺は初対面の変なお兄さんだぞ？

頼むぜ、程々の関係で行こう。主人公補正的なアレで落ちるなよ、俺は責任が取れない。無職だったんだしな。

「オラオラ競争するぞ！ 瑞鶴、お前そっちの廊下の端から行け！」

「競争って子供じゃないんだから！」

「おいおい。窓を拭く時は雑巾をこう、手をいっぱい広げて持つてだな……」

「ええ、細かいなあ」

「細かいことをしてるんだから細かくやるの、ほらさつさとやる！」
「手伝うって言った瞬間コレかあ……」

「うわバケツの水汚すぎ。瑞鶴入れ替えてきて」

「人使い荒いなあ。この場合艦使いなのかな？」

「変な所気にするのな」

「しんどっ!! もう小生やだ！」

もうお昼かよ。そういや今日から母上のマジウマ飯無いんだな……。

くそっ、ちよつと寂しいのが悔しいぜ。執務室がなんか広く感じるよ結構マジで寂しい助けて。

瑞鶴は————っておいおい。ピンピンしてるじゃねえか。

「やるって言った割にすぐへたれ込むのね」

「俺無職だったからな、求職に忙しかったんだよ」

元々割と運動も好きだったし、カラオケとかも行ってたから運動自体は意外としてた。

掃除も好き。部屋とか無職とは思えんぐらいしつかり掃除してたんだぜ？ 俺はエリート無職だ、誇れないけど。

「へえ、無職ねえ——無職？」

「残業代出せって言ったらクビにされた」

うげ、と瑞鶴は苦々しげな顔をする。分かるよその気持ち。

艦って給料とかじゃないんだろうし、重桜の現状ってよく分かんないもんな。これ割とよくあることなんだぜ？

「指揮官、大変だったんだね」

「初対面の時の挨拶とかアレだから、再就職もしきれずに300社落ちた」

「……………もしかして指揮官って」

「おう、俺はアレな人だ」

「だよね…………」

今のうちに溜息ついとけ。好感度爆上げしてやるからな覚悟しろ——って好かれすぎてもダメじゃん。程々に、程々にだ。

——うーん、実は俺って不憫な人？

いや違うか、みんなこれぐらいのこと有るだろ。辛いのは一人って思い込んだら不味いよな。

やりたいことをしようとする、大抵最初はこうなるもんだ。悲劇のヒロイン気質になったらいかん。

「ってか、経歴聞いても言うほど引かないんだな」

「過去より今でしょ。喋ってみて、別に危険な感じしないし」

「お前ホストに引っかけかりそうだな」

「そういう事言わなければ完璧なだけどね！」

危険かどうかって、三日はかけないと分かんないもんだと思うけどな。実際、俺は瑞鶴の印象よりはずっと利己主義だろうし。

——裏切りはしないさ。正しいことはしないけど。

俺は結果が欲しい人間だから。

「んじゃあ飯にしよう、オジサンもうしんどいから」

「食堂行くの?」

「え、もしかして指揮官って別に食うやつ?」

やだよ俺。ぼっち飯は辛いからな、実体的な問題で。

「じゃあ俺が食堂で作るしかねえよなあ!」

お前バカだろって? ありがとう、もっと罵ってくれ。

まあ上手くはないよ、それは超人だ。大体母上に飯作ってもらった時点でね?

——衛宮君程じゃないけど一応やってたよ。転がり込んだだけで元々は一人暮らししてたんだよね、自炊はした。

レ○パレスは辞めとけ。アレはインドア趣味が有るやつと料理を凝ってやるやつに向いてる物件じゃねえ。そうじゃねえなら良いけど。

「指揮官がわざわざ炊事するって……」

瑞鶴の溜息ご最もである! だが俺は真つ当な指揮官などする気がない! 断言しとくぞ!

食堂のばあちゃんにも言われたもんな、「それはひよつとしてギャグで言っているのか!」って………。中年なのにマジとか言ってるしキャラ崩壊させちやってて申し訳なかった。

「別に、美味くしてしまっても構わんのだろう?」

はいゲロマズフラグを自力でおっ立てましたー。

「……………美味しい」

「嘘でしょ」

瑞鶴の顔に嘘の文字は見えない。マジらしい。

ただの炒飯なんだけどね? まあ男飯だからな。大量に作ったから、余りは食うなりジツ○ロックなり好きにしてくれと頼んでおいたけど。

バリエーションは少ないから増やしたいね。これから女子ウケするのも作っていこう、指揮官も胃袋を掴んでいく時代にしてやる。

「まあ美味しいなら何より」

これでエンタープライズとも友好関係が結べる。飯で釣れない奴なんて居ないぞ、マジで。

旨いものは心が落ち着き、腹が満たされ、非常に攻略難度を下げるものだと思う。これで俺がアレな言動をしても行けるぜ、俺はギリギリ良い人のラインを気合で生き抜く。

「七面鳥も作れるぜ」

「それ、分かかって言ってる?」

「まあいつか作るから食ってみろって、言葉に惑わされちゃダメだぞ」
まあトラウマだっていうのは分かるけどな。

過去より今でしょ。

「……………別に、食べるのは良いけど」

「おう」

言質取った。これで勝つる。

それから俺は食いながら瑞鶴を見ていたが、本当に美味そうに食ってくれるなあ。オジサン嬉しいから幾らでも作っちゃおうよ?」

あ、でもそれしたら目立つし食堂の人の仕事なくなるな。やる気ある時だけにしよ。後は懐柔する時。

——結局この日は執務室周りの掃除で日が暮れた。

でもキレイになったし満足。途中から暇な従業員さんも手伝ってくれたし何か、こう——良いよな。

晩飯は食堂の人に任せた。そして寝て、次の日に時系列はスライドする。

「よしじゃあ今日も掃除——はしない」

「えっ?」

いや何で瑞鶴が不思議そうな顔をするんだ。これどう見ても俺らの仕事ではないから。

やる気が失せたんじゃない。俺達には役割がある。後疲れた、ヤム

チャしすぎた。

「清掃するのは別に仕事の人が居るしな。俺は俺が気になる所だけ手を出して終わりだ」

「このまま鎮守府全部とか……」

「時間が足りねえよ、やっても良いけど仕事を取るし」

「分不相応だ。執務室が綺麗で、俺達は業務に取り掛かりやすい。これで十分。」

確かに綺麗かを気にする奴も居るけど、全部俺達がやつちやキリがない。それに先にやる事が有る。

「優先度が有るからな。まずは身の回りだけにして、後は頭数が増えだからにしようぜ？」

「………なんか消化不良だけど、そうかな。うん、そうかもしれない」

「ちよつと納得が行かなそうだな、まあ結果の見える仕事の喜びって中毒性有るしな。」

「そのうち何かあげよう。頑張ってたし。」

「——さて、何故俺が突然掃除を辞めたのか。もちろん今の正論っぽい屁理屈だけが理由じゃない。」

「朝見たらさ、机に何か書類タワー有るのよね。キマシタワーなら良いんだけどこれは要らん。」

「つてか体が重い。力仕事できそうにないね。」

「これを減らしたい。何なのこの書類の摩天楼」

「エレメンタルヒーローの与えるダメージ上がるんじゃないかこの部屋。スカイスクレイパーは当時は中毒性の有るカードでしたね……………」

「試しに上から一枚。文字だらけだな、訳わからん。」

「民間指揮官にいきなりこの量を押し付けるとはオノレサクライ……………」

「サクライ？」

「やべーやつの名前、忘れていい」

「国家転覆狙ってたから実際やべーやつ。俺もやべーやつ仲間だ」

と思われてるがそんな事は今はユニオンの果てまで置いとけ。エンタープライズが多分「終わりだ!」って言って処理してくれる、マジでしてくれないかなあ……………」

取り敢えず例のマニュアルを取り出す。タイトルを脳内出力するのも恥ずかしいよ、つてか表紙よく見たら松〇提督そつくりの美人指揮官さんだ。やっぱラノベじゃねえか。

「……………」分らんことが分かったぞ瑞鶴!」

細かすぎて書いてないやつ。お問い合わせ案件かな?

「はいはい、手伝えばいいいでしょ?」

「そういうことですね、お手柔らかにお願いしまーす」

「調子いいなあ……………」

昨日は掃除の仕方教えたからね、今日は俺が教えてもらおう。

掃除とか艦がする必要なくねとか突っ込んではいけない。つてかちよつとぐらいはこれからもしてもらいたいし、俺もするからな。ちよろつとは。

「(書類仕事の手を) 止めるんじゃねえぞ……………」

「私一人じゃ無理だつて、指揮官」

突っ伏して例のポーズ。多すぎだ、何やってんだよ重桜!

二割片付いた。三時間掛けて二割とか地獄か? 死にかけの虫みたいに体が痙攣するんだけど。あつつい、夏だから当然なのか?

——瑞鶴もさすがに疲れている。ゲームの頃からそういう柄じゃ無さそうだしな、仕方ない。

「バカなのか? せめて昨日から置いとくべきだろナニコレ多いつて……………」

「でも何でわざわざポーズを取りながら倒れたの?」

「これが義務だと思って」

溜息が聞こえてくる。やっぱすげえよ転生者は、体が勝手にギャグに走っちゃう。

不幸だ。ああもう認めるしかねえよ不幸だ。

「ってか俺は自分がバカだと思つて生きてきたが皆バカだった。なんなんだこれ、世の中の理不尽が大体襲いかかつてきてる不憫すぎワロタ………ワロエねえよ！」

「ほら、元気だして。このままじゃ終わらないよ」

「ああ〜。耳元から種田梨沙ボイスで元気百倍アンパンマンになつちやう〜。」

「でも体は動かん、しんどいよ？ いやしんどいのは療養明けの種田梨沙の方か？ ってかこれ収録なのかな、っていうか今ここつて二次元なの？ 俺って主人公扱いなの？」

「——ああやばいねこれ、本格的に疲れてるわ。メタいとかじゃなくて考えちゃいけないこと考えてる気がする。」

「ってか俺って誰の声？ 中村悠一？ 大塚明夫？ 櫻井？ 最後はないわ、役かぶってる。」

「お尻触らせてくれたら頑張る」

「仕方ないわね、指揮官のことは忘れないと思う。三日ぐらい」

「ごめんなさい冗談ですマジで体が重いんです」

「見捨てないでくれー！」

「——俺は逃げられかけの夫か？」

「瑞鶴は優しいから何だかんだこつちに寄ってきてくれる。俺まだ」

「止まるんじゃないぞ」ポーズだけど。

「何、もしかしてほんとに熱とか有るの？」

「おでこ合わせて測って」

「はいはい、ちよつと静かに」

「おててが俺の額にシユウウウウウウウト！ 超ツ、エキサイティンツ！」

「意外と温かいな、冷たいって聞いたこと有るんだけど。」

「——という俺の感想とは裏腹な反応。」

「瑞鶴はちよつと手を引いて震えた声が出る。」

「ちよつと待って、これ結構な高熱じゃない!？」

「マジかよ死ぬ前に別れのキスを」

「変なこと言っていないで静かにして！ ベッドに連れてくから！」

凄い形相の瑞鶴の横顔が一瞬写った後、俺は背負われたらしい。急にふわっと体が浮く。

結構ヤバイんだな、恥ずかしいんだが抵抗する力があんまり出ない………。良い匂いするな……。

「……………38. 2度、だつて」

「知恵熱だ」

絶対そうだよ、俺普段頭使わないし。

ベッドの上には、知らない天井。

保健室？ 医務室？ 名前見てないから分からないがそんな感じの所。

「ちゃんと寝たの？」

「寝た寝た、4時間ぐらい」

それは寝てないのと一緒だよ、と心配そうな声で言われる。急な環境の変化に弱いもんだから寝れないんだよな、退職したときも結構体調崩した。

ってかつい最近までこれぐらいは無理利いたんだけどな、運動不足で老化が早いみたいだ。

——うーん、景色がちよつとボヤつとしてる。

「ダメえな、二日目で倒れる指揮官とか」

自分の体の調子もわからないなんて、社会人失格だぜ全く。

そーいや会社でもあつたな、同僚のやつは優しかった。普通に家まで送ってくれたもん、あとで怒られたって聞いた時は色々申し訳なかったけど。

「本当にダメな時はしつかり言ってくれないと分かんないよ」

瑞鶴、マジで心配してるなあ。会って二日目のお兄さんによくそんな心配してくれるもんだ。

「悪いな、心配掛けてる」

「ホントよ」

「つていうかさ、艦って予定では今の所お前一人なの？」

「今は良いから」

起き上がろうとしたら軽い力でまたベッドに寝かされる。肩を押されただけなのに……………これ不味いな。

いやだがしかしな……………。工廠も見えてないしこれから来る艦の為の用意も足りてない。

止まるわけには行かないのは事実なんだよ。

——俺は逃げなくちゃいけない。

義務から、危険から、天命から。もう世界の殆どが今は正直敵だ。今は瑞鶴一人だけど、それでもコイツをほっぽり出すのはしたくない。

いつ逃げてても、俺が無責任なことがはつきりしても大丈夫なように、出来るだけ早めに行動しなくちゃいけない。

「サボるつもりなんでしょ、こんなのサボるのサの字にも入ってないじゃない」

「でもダメだ、今動いておけば後で楽に——」

「先より今でしょ！」

瑞鶴が必死に叫んでくる。思わず眼が丸くなってしまった。

眼は少しだけ潤んでいるように見える、だから何で俺のためにそんな本気になるんだよ。

いつか見捨てるような男なのに。今だって櫻井に言われたあの言葉が怖くて仕方ない。

『……………もし貴方以外に代わりがいる、と言うなら？』

代わりがいるんだ、逃げたら代わりがやってくる。

代わりのやつは俺の意図なんか汲み取りやしないだろう。きっと普通の指揮官みたいに命令して、当たり前前みたいにバカス力撃ち合わせる。

きっと今の俺より、瑞鶴達はよっぽど辛い目に遭う。

俺は他人が勝手にそうなることはどうでも良いが、俺のせいである前に出来ることはしておきたい。

「もうちよつとだけだ、そんなに仕事はしない」

「ダメ」

「何でだ」

「何でも」

「何でダメなんだ」

優しくするな、慈悲を掛けるな、俺を信用するな。

俺はこの流れから逃げ切れない、多分主人公だ。主人公は嫌だから、俺は全力で逃げるつもりでいるんだ。

最後には瑞鶴だってあつさり見限るだろう、そんな奴を信用してはならない。

「また置いて行かれるのは、嫌だから」

瑞鶴の声は、酷く落ちて着いていた。震えていたわけでもなく、ただ当然のようにそう告げた。

——史実か。

ふと、瑞鶴という名前を思い出す。

MI作戦には参加できず、幸運は味方に傷を押し付ける形でしか成されず。

なのに状況は好転せず。とても後ろ向きな、幸運艦。どうしようもない理不尽で、彼女は周りを傷つけているような構図だった。

一人だけ安全な道を歩いていて、崖に落ちそうになると味方が庇っていくような、そういう幸運。

犠牲で成り立つ世界の特異点。

「今は休んで。明日から動いても、まだ時間は有るじゃない」

「ちゃんと相談してくれたら、一緒に考えるから」

——所詮、利用してるんだな。

弱みとか、そんなのを俺は利用してる。俺は命令してないだけだ。だから主人公なんか嫌いなんだ。こうやって俺は今正論ヅラしてたけどさ、土台が間違っちゃまってる。

「……………ごめん、事を急ぎ過ぎたな」

「うん」

「ちよつと休むから、何か有ったら頼むよ」

「分かった」

もう俺が動きはしないと想ったのだろう、瑞鶴はスタスタと扉へと歩いていった。

瑞鶴が出ていった後、何となしに空を見ると、ムカつくぐらい蒼かった。

「……………もつと上手く立ち回んねえとなあ」

そう、立ち回る。

——最後にはきつと置いていくであろう俺が、仲良くなんて無理な話だ。

端から裏切ることが既定路線の友好関係なんて、俺がちよつと耐えられない。

空は、晴れ渡りて晴天。蒼く続き、それはまるで彼女らへの祝福だった。

「もうすぐだな、指揮官」

「ぶっっちゃけ疲れた」

海上を走る女は苦笑いをした。通信の相手は後ろを疾走る船の男らしい。

女は美しい。髪は白銀の銀世界の如く。瞳は紫水晶で、髪の靡くさまは異世界の流星がごとき。

漆黒のコートがはためく度に裏地の鮮血が覗いては妙な気迫を帯びて、しかし黒のミニスカートとニーソックスの狭間の肌色は眼を吸い寄せる魅力を持つ。

「ええつと、停まるのは……………此処の鎮守府か」

「指揮官の名前は何だ？」

「佐藤弘さんね……………重桜の人か、まあ俺もそうだけど」

男は少し興奮気味である。久しぶりの帰郷ということだろうか。

「早く行こうぜ——エンタープライズ」

「勿論だ、早くて損はないからな」

エンタープライズの水を切る音が、一際大きくなった。

近づくは亡霊。見えるは嫌悪する将来。擦れ違うは運命で、そして始まる物語は当然にして毅然。

——彼が如何に逃げようとも現実是不変ならない。朝日が東から昇り、天を通って西に落ちていくのと同じ事。

月夜は必ずやってくるのと同義。

故に。

それでも男は、主人公になる。

四話

「ねえ、指揮官ってば」

おっと種田梨沙の声。俺、最初に好きになったのは境界の○方だけどヴァイ○レット・エヴァーガーデンも最高に好きだからさ、出来れば石川由依が良いな。

まだ間に合う。皆ヴァイオレット・エヴァーガーデンをだな……………。 って伏せ字さん仕事して？

「……………どうしたんだ？」

ありや？ 石川由依の声？ マジ？

「うるさいわね、仕方ないじゃない。執務室辺りを必死で掃除してたら体壊しちゃったのよ」

「自分で掃除をしたのか、彼に負けず劣らずの奇特な人だな……………」
待てよ？ これってなんかおかしくない？

「つてか——起きてるよな、アンタ」

何だこのイケメンボイス。俺の声優センサーに引っ掛からない、何奴。

「——つ?! ようこそ石川由依さん!？」

「……………誰？」

ガバリと布団をどけて起きると、瑞鶴の怪訝な顔付きが目の前に映る。あれ、石川由依は？ 握手してもらいたかったんだけど。

てつきり京アニダブル主人公が俺の夢で喋ってるのかと。

思わず見回す。映ったのは見慣れない緑の軍服を着た日本人顔のイケメンと……………はい？

おかしいな、俺の目の錯覚か？ 重桜なのにエンタープライズが見える。

「なあ、俺は重桜に居るよな」

「もちろん」

瑞鶴がコクリと頷く。そうだよな。

「エンタープライズが見えてるって言ったら、俺精神科？」

「佐藤さん、残念ながらそれが現実だ。居るぜ、エンタープライズ」

イケメンがニヤつきながら俺の顔を見る。かけえなアンタ、俺の理想の顔付きだ。

——幻覚が動いて、俺に向かって微笑んでくる。神か？

「私と会ったことが有っただろうか……………すまない、覚えがない」

「マジで居るじゃねえか!？」

熱は37.2度。ギリギリ動けるようになった所で訳の分からない状況に俺は巻き込まれていた。

——なあ、フラグじゃねえって言ったよな？

何でエンタープライズ大先輩がここに居るんですかね……………。

「ええつと、という訳で俺はユニオン所属の指揮官。名前は——

小野也人^{やひと}」

そう名乗って帽子を被り直す男は、同い年かな。めっちゃかっこいい。

程々に凛々しい黒鉄みたいに真つ黒な瞳に、同じく射千玉のような艶やかな黒髪。長いのが鬱陶しいのか肩までもないくらい髪を雑にうなじで括っている。

緑の軍服はネクタイは緩いし袖は捲くついで凄くフラック。おおう、何か切れ者って感じだな。ってかなんか昔の作品でこの人居たような……………。

ま、いいや。

「ヤヒト？ 漢字がわからない、すまん」

「漢文で出てくる也に普通の人で、也人」

あ、何かそんなの居たな。アレは確か重桜所属の設定だった気がするけど——まあ、あの世界とは関係ないんだろうな。他人の空似みたいなもんだろ。

さて、也人さんとやらがなんでここにいるんだよ。俺は今主人公にならない為の手を打ってる最中に高熱でうなされてた訳だけど。

「何でユニオンの……………しかもグレイゴーストさんが居るようすげえ指揮官が、こんなクソツタレな鎮守府に？」

「あれ？ 話を通ってないのか……………でも多分アンタの責任じゃないんだろ？」

小野が頭を掻いて困ったように笑う。何だコイツは、何か同類の臭いがするぞ。

つてか瑞鶴がさつきエンタープライズを連れて飛び出してっただ大丈夫かな。一応お客様なんだし失礼しすぎてないと良いけど。

「俺達がちよつとの間だけ滞在するって話聞いてないか？」

「ああ、書類のどつかに有るのかも…」

でもあの量は処理しきれないから俺は悪くないね。俺は聖徳太子でもナポレオンでもねえんだから無理だよ、アレ。

つてか黒が似合いそうな見た目だな、ホント。キリト君顔負けだわ。

つてかアイツは背伸び感がたまーにするけど、この見た目で黒づくめならむしろそれが自然に見えそう。

「つていうか俺は着任して実質二日の民間指揮官だからさ、アンタみたいなお偉いさんと喋るご身分ですら無いよ」

「ははは！ 俺が偉い？ いやいや、所詮軍の道具だよ」

何だか寂しい目つきで海を眺める。ヤベえな、俺の脳内がお見せできないくらい常にシリアスなタイプかもしれない。

俺なんか種田梨沙ボイスうひょーとか石川由依さんコツチ見てーみたいな事しか考えてないしな。うん、やっぱ俺は最後の最後でバカだろうね。

「プライズちゃんは本人の希望でついてきたんだが、まさか瑞鶴が居るとはな……………」

「瑞鶴はグレイゴースト馬鹿だからな、迷惑かけるよ……………」

「其処は気にしなくて大丈夫だと思う、あの娘も何だかんだ面倒見は良いし」

面倒見は良いって言うけど瑞鶴の場合しつこいからなあ。俺も適度に止めないと俺までエンタープライズに嫌われちゃう。

アカン、マジの推しが客人で来るとかどういいう状況やねん。もう何でもかんでも嫌われたくないに直結しちゃうぜ、なんて浅はかな男なんだ俺ってやつは。

「しっかし佐藤さんも災難だなあ、着任二日でしかも民間から？ 何だその二次創作みたいな感じ」

「そうそう、もう思いつきり勘違いモノの展開を——今なんつった？」

言い忘れてた、と小野が帽子を脱ぐ。

「俺も転生者ってやつだ」

「ナニコレ超展開すぎひん？」

「俺もそう思うけど、物事何でも理論立ててって訳でもないだろ」

それは仰る通りですがね？ 何でもかんでも上手く理屈がくつつくわけじゃないですけども。

——っていか何時勘付いたんだ。いや、パロディばかり喋ってるのは自覚有るけどそれでも確証を得るのが早すぎる。

超推理？ 江戸川乱歩なのか？

「いや、石川由依とか絶対オタクしか分かんないから」

「心を読んでくる転生者とか何ですかチートですか？」

「チートは貰えなかったなあ、有ったらどれだけアイツラが楽できることやら」

困ったように笑う。

——何だ何だ、小野と喋っていると脳内地の文がちよびつと硬くなる。作風か、コイツも主人公か!?

くっそ、予想外すぎる。俺はマ○ユは種田時代からやってるからボイスは別に種田版も収録して欲しいとかそんな事をずっと考えてるタイプだつてのに。

アレだ、俺と違って真っ当に頑張ってるタイプだ。俺はCC濃すぎなんだよとか叫びながらL○Lがしてえだけのお兄さんもどきオジサンだからな。

「つていうと……アンタも命令とかするの？」

「アレ？　しない。趣味悪くないか？」

「同志よ」

「ごちらこそ」

ハンドシエイク。アンタはフレンドオブザハート。

——でも待てよ。メインストリーで思いつき敵対するよね、ヨークタウン級って。

「アンタ重桜絶対潰す指揮官なの？」

「まあ、メインストリーを汲むならそうなる予定だが——手は打つぞ」

すげえな、ちゃんと何かする気が有るんだ。俺は諦めるね、天命つて割と逃げられないし。

「大体俺も重桜出身だしな、何か能力を買われたらしくてユニオンに居るけど」

「へえ、有能なんだな」

「それ程でも有る」

あ、コイツも俺と同類だな。うん、敬う必要ゼロ！

つていうか俺と同じ年ぐらいなのに能力を買われたつて。つてことは今みたいに険悪になる前にユニオンに行ったつてことだろ。確か空気が悪くなったのは……はつきりとは分かんが、一年前つてことはない。

大学生とかで行つてることになるな、もう天才留学生の域だ。実際凄いのでは？　実は俺怖気づくべきでは？

「まあトランプ大会とか皆でするし、何だかんだ上には怒られるよなあ」

「意味分かんねえよ、何でトランプ大会をする流れに？」

「忘れたけど、結局色々有ってサンタープライズさんのお手伝いしたよ」

「なにそれ羨ましい、席変われ」

「やだ」

くそ、お前何時かデインみたいな情けない声出させてやるからな。

アレはホント情けないし卑怯なので死んでください。

っていうかコミュ力たけえな。俺さつきもエンタープライズと一言も喋れてないわ。身構えてないとめっちゃキョドる自信がある。

「何めっちゃリア充指揮官してるんだよお前は敵だ」

「大丈夫だ、俺もエンタープライズの手に触るのだってキツイ」

「やっぱり仲間だわハグしないか」

分かる。ほっぺただけで俺はダメだった。

「何であんなヒョイヒョイ避けられるのよ〜ッ!」

さて、小野と同盟の握手を交わして夕暮れ。結局へとへとになって帰ってきた瑞鶴。

一方エンタープライズは全く息切れすらしていない。さすがエンタープライズ様。略してさすエン。

「何お前勝手に演習してるんだよ!？」

「だって指揮官から「何か有ったら頼む」って言質——じゃなくて許可もらってたし!」

「ちよっと素直に休んでみたら職権乱用されるの俺はさあ!？」

いや、俺は怒らないけど周りの偉い人に俺が怒られちゃうから辞めてほしいなあ。

大体エンタープライズも迷惑じゃないかな。

「いやあ、うちの娘ちよつとグレイゴースト絡みだとおバカになっちゃうもんで。すんません」

「良い経験になったよ。明日も相手をさせてもらいたいぐらいだ」

この呼吸の乱れの差から一体何を学んだんだ。さすエン？ さすがエンタープライズ様なのか？

「何よその上から目線は!」

ああもう暴れるんじゃないやねえ! 俺もイチャイチャさせろお!

今にも飛びかかりそうな瑞鶴を後ろから抱きつく形で押さえつける。一応言つとくがやましい所は触ってねえぞ。お腹周り細すぎて抱きつきにくいんですがこれ。ラッキースケベなのかねこれ、俺ラッ

キーな気分じゃない。

ってというか普通に失礼だぞ、マジで。まあ俺も小野とめっちゃフラックだったし、こんなもんなのかもしれないが。

「ってかうちの施設つてぶっちゃけ無いに等しいけど、艦載機とか大丈夫か!? 工廠も今日は見に行けて無くてな!」

「あ、それならちゃんと見てきたよ指揮官」

急に素に戻るな。二重人格かよ。

「普通に作業してる人も居たし大丈夫そうだった」

「そうかそうか、よしじゃあ二人共艦載機をしまつてだね……………」

「ワン! モア! タイム!」

「瑞鶴う!」

アカン、急に物分りが悪くなった。夜中に艦載機とか使えるわけ無いでしょうが。さっきまでめっちゃ良い娘だったのになあ、グレイゴースト馬鹿だなほんとに。

翔鶴の爪の垢でも煎じて吞ませてやりたいよ。

——って進む力が強いって!? 手も上げる!

「瑞鶴落ち着け、もう暗いから明日! な!? 明日なら良いだろエンタープライズ!」

「今からでも最悪私は動けるが」

「待て待て待て、瑞鶴に都合の良い情報を与えないで!」

確かに史実のエンタープライズは夜の発艦も経験アリだけでも!アレなんかエロい、いや違う違う!

何でも夜のつてつけたらエロく聞こえる俺の脳味噌を誰か何とかしてくれ! じゃなくて先に瑞鶴を何とかして!

「おい瑞鶴、ステイ! 俺に良い作戦が有る!」

「何よ指揮官!」

「今戦つてもお前が不利だ! 有利な状況か、イーブンで俺はやるべきだと思うぞ!」

あ、とうとう手が抜けてしまわれた。

ええいこうなればままよ。

耳に息を吹きかけてやる! 俺は最低だ、それでいいから取り敢え

ず止まれ！

「ひゃっ!?」

「おら止まれ小娘!」

完璧に意表を付けたらしく、瑞鶴がへぶしと顔から転んだ。ミツシヨコンコンプリート、第四話完!

ホイールオブフォーチュンというか、キャリアーオブフォーチュンな瑞鶴さんがこちらを恨めしそうに見てらっしやる。いいよその屈みながらの目を潤ませて上目遣いで睨む感じ! もっとやってくれ!

マニアックな構図説明をするとアニメSAOのデート前のラツキースケベされた時のアスナの顔してる! 超イイよ、一枚百円で売れるかもしれん!

戸松遥もすき。いやそれはどうでもええわ。

「このヘンタイ!」

「ありがとうございますー!」

——さて、お遊びは終わりだ。

「ドウドウドウ」

オーケー、まだヘイトが俺に向いてる。このままthanksgivingしてエンタープライズから引き剥がそう。tankの仕事はちゃんとヘイト取って後衛のadcを殴ることです………つて今日の俺101ネタ使いすぎだろ皆知らねえよ。

じりじりと後ろに下がる俺を見ながらエンタープライズが

「……………仲が良いんだな」

と微笑んだ気がしたが絶対気のせいだ。俺の気分は闘牛士だぞ?

もしくはミツシヨン・インポッシブルとも言う。

「ふう……………疲れたよ、もう死にそう」

「今日は大変だったね、指揮官」

「俺の疲れの半分はお前のせいだ瑞鶴」

暴れてくれやがってこの野郎。熱ぶり返すわ。

——取り敢えず適当に食堂で食事をとった後、お二人は適当なお部屋をご案内。俺達は夜の執務室でぼんやり話し込んでいた。夜のつてつけると何か【自主規制】。

面白かったのは二人共同部屋で寝たい？ って聞いたなら

『絶対嫌だ』

と熱い同室拒否が返ってきたこと。ちよつとからかっただけなんだが、ぶっちゃけ面白いねあの二人。

オジサンお節介だからああいう二人はくつつきたい。ニヤニヤしたい趣味なんだよ、何か文句あります？

「クソ、やっぱりグレイゴーストは強いなあ」

「まあエンタープライズに遊んでもらうのも程々にな。アツチにも仕事有るんだろうし」

誰が遊んでもらってるだって？ みたいな顔してるけど完璧遊んでもらってるぞ。いや、付き合い良くて助かる。

まあ俺って若い女の子の遊び方知らないしな。発散方法が演習で相手をブチのめすつてのもアレな話だが、瑞鶴の場合は多分スポーツマン的なアレだし問題ないだろう。

そう思っておこう。アレばっかりうるせえな俺？

「っていうか工廠見てきたって言ったけど、どれくらい仕事したのよ」

「大体片付けたわよ。ただ——」

「ただ？」

瑞鶴が処理済みの摩天楼から一枚適当に引き抜く。

——いや、見せられても分かんねえよ。

肩を竦めると何だか溜息をつかれてしまった。仕方ねえじゃん、俺ほぼ書類触ってないようなもんだし勝手がわからない。

「此処のじゃない書類も何か混じってる気がする」

「そういうの全部抜いたら、指揮官が居た時に7割方終わってたんだよね」

やっぱ多すぎると思った……。櫻井さんにまた明日にでも事情を聞いてみよう。

——しかし変だよな。何で俺の所の書類に混じるんだろう。

「つてか勝手に置かれてたのよく考えるとこええ」

「まあ、それは鎮守府の人じゃないのかな？」

「だと良いけどさ……」

怪盗キツドの予告状挟まっていたりして。まあ無いか、つてかあつてほしくないね。

まあ明日やるべきことは明日まで忘れよう、今日は頭脳が疲れていらっしやられるのでね。

——俺がイスにもたれてぐるぐると回っても、瑞鶴は特に気にしない。何か、変な価値観を歪めちまったのかなあ俺。

これつて多分おかしなことしてるんだけどなあ。

「まあ、今日は助かったよ。ありがとう」

「秘書艦の仕事だしね、一応」

そっか、一隻しか居ないから瑞鶴が秘書艦なんだな。

——けど、どっちにしろ面倒事を処理してくれたのは変わらないだろう。

「何か欲しいものつて有る？」

「え？ 何よ急に」

「ほらほら、何か有るだろ。化粧道具でも良いぞ」

「化粧なんてしないわよ」

うわ、さすが美少女。すっぴんでそれかよ気持ちわりい。でも可愛いから許す。

睫毛なげえ、と何となしに眺めていると瑞鶴の顔がふいっと逸らされる。オジサン傷つくんだけど、センチメンタルなんだけど。

「……………まあ、スポーツ用品が欲しいかな」

「よし、明日の午後はそれに漬すそうかな。身構えといて」

「ちよつと!?! ええ!?!」

これから世話になる奴の欲しいものがスポーツ用品なんて可愛いもんだ。

てつきり貴金属だと思ってた。俺の想像力ってなんか狭いんだな。

「ここは誰が回すの!?!」

「どうせ回らなくても良い場所だ。ユニオンのお二人方を監視しても

らう必要はあるけどな、機密とか盗まれたら俺のクビが飛ぶし」

「っていうか櫻井さんにやってもらおう。そうだな、別に艦は居ないから回せるだろ」

「そのサクライって誰なのよ!？」

だからやべーやつだって。後、俺よりよっぽど有能な可能性のある出来る櫻井ボイス。

——ってかそんな長い間外出しないしな。まあ一応付き合っってはやるけどスポーツ用品ってそんな時間かからないだろ。

何買うのかね。

「これ、デートじゃね?」

朝、仕事は趣味Tシャツでガバリとベッドから起き上がり一言。

——うん、何とかというか弁明できないな。

「オーマイゴット」

ヤベえな、エンタープライズとか小野とかに相談してみるか？

でも俺が居なくなるって情報を先取りできるのって不味いのかもしれないな。機密情報抜きやすそう。

——知らん!

重桜がぶつ潰れようが給料、艦、家族が保障されりや何でもいい!

ああでもクビ飛ぶの怖いから出来れば俺のところから盗まないで欲しいねうん。

五話

「はあ、デートするんだ。良かったね佐藤さん」

朝一番に尋ねたら、扉を開けて一言目はこうだった。

良かったねじゃないんだよどうすりや良いんだよと言おうとしたら現れたのがエンタープライズ。隣が騒がしいから起きたのか、それとも小野が起きたから起きたのか。

どっちでも面白いね。

「ああ、艦と絆が深い場合は戦闘力も上がると統計も出ている。良いことだ」

「プライズちゃん、俺が言ったのはそういうことではない」

エンタープライズさん軍人気質すぎませんか？ 小野、ちゃんという時の喜び方を教えろ。

——じゃなくて。老婆心を利かせてる場合じゃねえ。

「俺デート初めてなんだけど!?!」

「知らんがな、好きにやりやいいでしょ。おやすみ」
「待って下さい小野様あ!」

扉を閉められまいとしがみつくと、顔付きが露骨に面倒そうに変わる。エンタープライズからは引かれたと思ったが、どうやらコイツもそういう事するらしい。まるで動じていなかった。

っていうか指揮官が午前八時に二度寝をかますな。マイペース過ぎるぜお前。

「ダイジョブダイジョブ、美少女は相手が好きなら大体許してくれる」

「多分俺そんな好感度高くないです!?!」

「アレで……………? 指揮官、彼は冗談を言っているのか?」

お前らも大概やぞ。いや俺は違うけど!

「っていうか俺だつてデート経験ないし」

「エンタープライズは!?!」

「有ったら傷つくぜプライズちゃん!? 俺に一言言ってくれよ!」

「居るとは誰も言っていないのだが!」

ちよつと顔赤い。その手の話題はエンタープライズはダメなんだ、

ふーん。

ふーん?????

まあそれは置いておいて。

「エンタープライズ様！ 何か俺にアドバイスを一言女子目線で！」

「様付けするのはちよつとやばいぜ佐藤さん」

さっきのお前のうろたえ方も相当だったの。

エンタープライズは朝から面倒事だと思っっているのだろうか、溜息を付いて俺に呆れたように細めた目を向ける。

ぶつちやけ面倒なのは分かるよ。でも瑞鶴の中での俺の位置が残念だけど一応出来るオジサンか、常に残念なオジサンかになる分かれ目なんだよ！

「女性目線と言われてもな……………」

「取り敢えず、誠実に相手と向き合えばそれで良いのではないのだろうか？」

「失敗は誰にでも有る。瑞鶴も気にはしないだろう」

圧倒的正論。

仰る通りです何かすいませんでした。何か評価とか気にしすぎた俺がバカですなはい。自然体じゃないとね。

「じゃ、寝る。 Good Luck.」

「私は発着艦訓練をしよう」

この二人これでオツケーなの？ 指揮官起きようぜ？ 何でその異常事態に馴染んでるのエンタープライズさん？

——何というか、これでいいのかね？

俺は無人になっていく廊下に取り残された。

「私服もクソダサしかねえまま昼じゃねえか！」

「貸すよ。プライズちゃんとのデート用だったんだけどな」

「有りもしない事実を言うのはやめてくれるか、指揮官」

この人達、俺と瑞鶴以上にボケとツツコミが完成してるんだけど。書いてる人この二人を以前にも書いた経験がお有りで？

あ、ZIKK君は現在艦載機整備中だゾ。また懲りずにエンタープライズに喧嘩売ってたみたいだけど不調が有ったのに気づいたらしい。

一応冷静に喧嘩売ってるらしい。もうそれはただのチンピラだと思うが本人に言ったら怒られそう。

「えつとな、チェツクの上とジーンズだけど良いか？」

「無いよりマシ」

「何が無いよりマシだよ、言葉に気をつけないと貸さないぞ？」

「ああすみませんすみません！ 小野様あ」

でも無難すぎるぜ。なにそれ没個性って思っちゃった俺は普通じゃないか？

——もしかして私の服、なさすぎ？

その没個性に勝てる服がねえ。スーツばかり持ってるがそれすらマイハウスに放置してるぞ。

「そういうえば、指揮——あなたは何と呼べばいいだろうか？」
「豚で」

「プライズちゃんの口を汚すな痴れ者め」

——尤もで。でも呼ばれたさ有る、ネタ的な意味で。

「ヒロシで」

「クレ○ンしんちゃんかよ」

「了解した」

でも了解されたから俺はヒロシ、ざまあみろイケメン。っていうか俺は何に勝ったんだ全然意味分からんなこれ。

——待って、美少女に名前を呼び捨てされる!? 責任とって結婚しなくちやならんくなるな!?

「では、ヒロ」

「やっぱりサトーで良いよー!」

「ヘタレめ」

「うるせえー!」

あつぶな。笑ってんじゃねえぞ小野お!

——ゴタゴタしてる内にエンタープライズが早く要件を喋らせて

欲しい、と静かにオーラを発している。何かすみません、俺達絡むと更に馬鹿になるみたいです。

バカ×バカでカオス。ギャグ作品の基本構図だよな、でも俺はギャグキャラじゃねえよ!?

「それでサトー、昨日瑞鶴と何かあったか?」

「俺何もやましい事シテナイデスヨ?」

「マジでしてないだろうから怪しい言い方しないでくれよ」

まあしてないよ。

だろうな、とエンタープライズが顎に指を当てて考え込む。知的?

いえいえビューティフォー。

瑞鶴は可愛いなあ、って感想になるけどエンタープライズはお美し
いんだよ。分かるかこの微妙な美少女判定ラインセンサーの細かさ。

細かすぎて伝わらないネタ選手権に出れるぞ。

「今日の彼女は何だか焦っていた」

「しきりに執務室の方を見ていたから、てつきりサトーが何かしたのかと」

「何でだろ」

「俺も分からん」

分からんな。

——うん。何か分かった、アイツも初デート奴だ。

「恋愛クソザコ幸運空母瑞鶴」

「プライズちゃんもそうだぞ」

「なっ!? 何で私まで巻き込まれるんだ!」

突然矢面に立たされたエンタープライズは何だか躍起になって小
野に訂正を求める。

なあ気づいてやれよ、それ多分好感度がラブの手前だと思うんだけ
ど………………。エンタープライズ可哀相………………。

「という訳で買い物だ」

「うん」

しおらしい、辞めろ俺まで緊張する。25歳で初デートとかもう動きが気持ち悪い予感しかない。

予算一杯、やること少ない。ちゃちゃつと済ませたらつままないだろうから何かして帰りたい、でもデートしたくないなあ……………。

瑞鶴は羽織を薄いフード付きの半袖に変えただけで配色も一緒。まあそれで余所行きになる、かな……。二次元のファッションワカンネ。

「ねえ、外出の許可はもらった？」

「もらったもらった、櫻井さんめっちゃ喜んでた。仕事ニツコリして引き受けてくれたしアイツマゾだわ」

「怖い人なの？」

まあ俺が瑞鶴とそこそこ上手く行ってるのが嬉しいんだろ。櫻井さん的には直結で「瑞鶴を利用できる可能性」ってわけだから。

まさか俺自体が方針に逆らう気満々とは思わないよね。

——もしかしたら単純に喜んでるのかもしれないが、あの人は俺の最後の敵なのが見えてるからな。あの人だけにはそういう意味で甘い見通しは立てない。

甘さは害のない人間に向けるものであって、ラスボスに向けるものじゃねえ。

「ちちゃんと食堂の人にも言ってる？」

「オカンかよ。大丈夫だって」

「そ、そう」

緊張するな俺が緊張するだろお!?

さて、電車に乗ってそこから辺の都市へ。今は海沿いの街なんて成立してないからね、すぐ砲撃飛んでくるなんてのが在り得るから。

電車に乗るのに若干ドキドキしてる瑞鶴は良かったぞ。全部初体験ですもんね、和む。

『え、これで良いの!?! 通れるの!?!』

とか改札前でめっちゃ涙目で聞いてくるし、電車の中でも人が多

いわけでもないのにしがみついてくるし。しがみついてくるのはね、正直オジサンドキドキして困ってた。そこはホントだよ。

お前ら覚えとけ、転生者はそのハッピーな状況を味わう余裕がないくらいの臨場感を伴ってることがかなり多いんだ。

ぶつちやけ、そんな楽しめない。心臓バツバクで倒れるかと思っ
た。

「よっしゃまずは遺書の書き方を先に買うぞ！」

「はい!？」

いやだつて通販とか使えなかつたしさ。タイミング的に今なんだよね。

真面目な話、俺あつさり死ぬるギリギリラインで生きてるから早めに書きたい。

——にしても。

街中で遺書の書き方とか言い出しても誰も振り向かないの、やっぱり無関心の気味悪さが滲んでるよなあ。

俺こういうのに振り向いて「何だアイツ!？」とか知り合いに喋るタイプだったから逆に変な感じ。

「ああ、本嫌い?　じゃあ俺がぱぱつと行って適当に買ってくるけど」

本が好きって感じしないしな。スポーツ用品買いに来てる時点で見えてることだが。

別に書き方が分かれば良いんだよ。遺族が遺書の解釈違い起こして金がメチャクチャになったり、遺産で荒れたりするみたいなのが怖いだけだし。

腐女子界隈の受け責めの話みたいになってるけどアレよりはもっと慈悲がない進行だからね、遺産争いとかそこらへんって。

遺産は姉貴に渡す予定。あの人ちゃんと使い方を知ってる人だし、俺より正しい人だからな。

「い、いや本屋と言うか遺書書くの!？」

「そりゃ(条件重なって)こつちだつて(内輪揉め巻き込まれそうだし)命懸けのお仕事ですよ」

「言いたいことは分かるけどちよつと私信用なさすぎ無い!?」

いやいや、グレイゴーストさえ絡まなければ良い娘だと思ってますよ。絡んでるから良い娘じゃないね。

実力も相手が公式主人公だからちよつと苦戦するだけだろうし、これから成長してくれると信じてるよ。いざとなったら櫻井さんから俺を守ってほしいという下心も有る願望だが。

「俺は所詮人間、瑞鶴も所詮一隻の艦。保証なんて無いからね」

櫻井さんにも言った気がするが、大きな事では台本と配役が有る。

配役が有るって事は代わりが居るってこと、代わりが居るってことは代われる程度の役割ってこと。

俺もそう、瑞鶴もそう、櫻井さんだってそう。多分エンタープライズや小野だって一緒。

——だから代わられる前に、思いつくことはどんどんやってくべきなんだよ。

後、代わりが居るようなキャストだからこそ大事にするべき。あつさり居なくなるのに、その本人はたった一人しか居ないんだから。

ピンとこない？ エ〇アのレイちゃん思い出せ。代わりはいるものってな。

「世の中何が起きるか分かんないし、取り敢えず行動は前倒しでするもんだ」

転生したりしたら大変だぞ？ 前の両親の顔が思い出せない夜は、正直ちよつと泣きそうになる。

そんなもんなんだよ。

「……………その遺書、数年以内に開かれなと良いけど」

「バカやろう俺は生き残るぞお前、ってかお前が守るんだよ」

「もちろん頑張るけどさ」

「頼もしいこつた」

「さて、小野也人さん」

櫻井ボイスの胡散臭い声が執務室に木霊した。帰りてえ……。

お二人さんがデートでイチャイチャしてる中、俺は例のやべーやつと会う羽目になっていた。

——マジで帰らせるかプライズちゃんどデートさせろ。私服見たい、お洒落なんだろうなあ……。

「今回はわざわざユニオンよりお越しいただき有難うございます」

「……そっか、俺も客人だな」

つまんねえの。一応生まれ育ちは殆ど重桜なのに、今は敵になりかねない状況なのか。

まあ国に情は無い。人殺しをするはめになるのはご勘弁願いたい所だが、別に倒閣とかその程度ならどうでも良い。上の人間は勝手に潰し合ってれば良いのだ。

——しかしだな、コイツは違う。

「手違いでこの様な所に滞在する流れとなってしまうましたが、私は貴方がたを歓迎しています」

「それは彼も同じことでしょうからご安心を。危害を加えようなどという気もございません」

胡散臭いけど危害加えられたら即戦争だからな。俺自身、慎重に行動しなきゃならない。

佐藤さんも不憫だよなあ、コイツの差し金つてわけか。話は聞いてたが本当に黒幕櫻井なボイスを発してるし胃に穴が空いちまうぜ。察してプライズちゃん帰ってきてくれないかな。

「俺の目的分かってます？ 櫻井さん」

「勿論。この国の研究を調査しに来たのでしよう？」

うげっ、速攻でバレてる。やっぱ黒幕櫻井だ、一応「艦隊運動の視察による指揮官の認識改善」みたいな理由のお膳立て有ったのに。

しかもコイツ、他の国とも妙なコネクト持つてるしよく分からんだ。

——若造って感じはするんだが、能力は有る。問題はその過剰搭載された能力という兵器が、一体どこに向けられるかだ。

使い方の分かってない力は、実に厄介だ。

「セイレーンの能力を取り込んでるなんて物騒な噂が出回ってるものでね」

「ははは、まさかまさか」

分かってんだぞ、調査って分かっているからわざわざ瑞鶴しか居ない鎮守府に滞在させてるってこと。バレない今のうちに準備してるんだろうな、それでもってデートは都合がいい。

俺を合法で監視できる、民間なんか幾ら言っても櫻井も信用しきれではないだろうし。

猫耳見たら一発で摘発なんだが、バレバレな避け方されても証拠がないんじゃない。

——俺だって戦争は止めたいが。ドンパチ始めるのは重桜からだし、戦争自体を止めようなんてデカイことは思わない。

構えとけば被害は減るのは間違いないから、取り敢えずそうしたい。

「どうぞ問題が有ればご指摘下さい」

「艦に関して重桜はしっかり管理」しているつもりですので」

胸クソ悪い、俺も同類とは言え何が管理だ。

所詮俺もそうなのかもしれないが、艦は道具だ。殺し、殺され、使われ、使われ。そういうギブアンドテイクオンリーなものだと思われる。

俺は出来るだけそういう態度は避けているが、やっつてゐることは変わらないのは事実だしな。決して否定はできないが、にしたってコイツの言い方は不快感が有る。

——佐藤さんも、コイツにとって多分道具の側面が有る。

だって考えてみる。

今の腐敗政治に反旗を翻す民間から現れた指揮官と、その英雄に続く海の女神達。

シナリオとして良く出来てる。それを見込んで佐藤さんはここにブチ込まれてるんだろう。

まるで偶像の英雄。言うならばハリボテの指揮官ってわけだ。都合のいい道具と言わずして何と何と。

——あの人ちよつと抜けてるから分かってないかもしれないけど。
大丈夫かなあ、俺何かちよびつと手を回してやるべきなのかなあ。
一応今暇だし。

「それは今も変わりませんし、これからも一層引き締めて管理していききたい所存ですからね」

ああマジ胡散くさ。帰らせろ。お前の言葉はさっぱり信用が出来んよ、経験則的に。

「……アンタが管理していきたいのって、ホントに艦だけなの？」

「ええ、何もかもを管理しようなどと烏滸がましいでしょう？」

櫻井が口元に微笑を浮かべる。悪魔の微笑みにしか俺には見えな
い。

「私が管理できるものなど、精々台本が良いところですから」

「ええ、配役はしっかりと選べる自信が有ります」

「何を演出するべきか、誰が演出するべきかなんて事はきつと得意な
事でしょう」

あつそ。まあそのうち何とかしないと、このラスボス。

佐藤さん、俺は他人事なことを思うが許して欲しい。

頑張れ、挫けんよ。

コイツ、アンタが思ってるより面倒くさい怪物モンスターだぞ。

「目標をセンターに入れて——撃ち抜く！」

女ならざる剛の音を立てて金属バットがフルスイング。

吸い込まれるように衝突したボールが、すんばらしい勢いで無限の
彼方へさあ行くぞ。お前はベースボール界のスペースレンジャーだ、
犠牲者ボール第一号（仮）。

「え、何お前バッティングうまつ!？」

「そうなの？ 多分もつと勢い出せるんだけどなあ」

「プロかな？ すっげえ」

まあでも瑞鶴つて運動部の助っ人ポジみたいなキャラの匂いする

よね。突然異能力背負わされる運動できる系の主人公みたいな。

所属がバスケット部でライバルがエンタープライズ。うーん俺でも今なら二次創作が出来そうだ。

「俺なんかまず当ててるのですらって感じなんだが」

「ホント運動不足じゃない?」

「気をつけていききたいね、うん」

はい交代。

「よーし、お父さん頑張っちゃうぞ」

「お父さん?」

——一球目、空振りっていうか三球目まで全部空振りだったダツサ!?

「指揮官、嘘でしょ!?!」

めっちゃ笑われた。なんでい、現代社会に必要なのはバッティングの腕じゃねえんだっての。

コミュ力とか顔とか仕事処理能力とか——全部ないわ、顔は有るんだっけ? いやでも自覚ねえし誰も触れねえし無いのと一緒だ。

「教えたげようか?」

「多分そういう問題じゃねえと思うんだけど」

「まずへっぴり腰だし」

「相当俺は運動をしていないようだ」

気づいてすら居なかったんだけど。やっぱり運動って気をつけるポイントをどれだけ気をつけてるかでぜんぜん違うよね。まあ艦と張り合うのは無茶だけど。

仕方ないなあ、と瑞鶴侵入。どうやらマジでご指導するらしい。

「ほら、しっかり構えて」

「お、おう?」

めっちゃ手で固定される。っていうか危ないよ?。

フルスイングで頭ガコーンだぞ? いや絶対振らないけど。

「体ガチガチ、深呼吸」

「ひーひーふー」

「それ出産の時の深呼吸じゃなかった?」

「一周回ってこれで落ち着く」

何いってんの、と凄い引かれた。俺も自分に引いてるから大丈夫だぞ。

——何普通のデートしてるんだ俺。まあこれパパと娘っぽい感じだけど。

いやでも瑞鶴みたいな彼女欲しい時期有ったなあ。最近はず女から遠ざかってたと言うか母上以外会ってなかったと言うかね、色々あつて興味が失せてましたが。

「指揮官、ボールボール！」

「え！ 突然ですか!？」

空振りフルスイング。結局打てたのはたったの一打であつたのでござる。

恥ずかしいね、でも最近羞恥心が薄れてきたんだ。環境のせいかな、元々そうだったのかもしれないが。

ってというか瑞鶴距離感近い。やめろ勘違いするだろ!？」

「ああ、スッキリした〜！」

「すっげえ疲れた」

お肌ツヤツヤの瑞鶴と恐らく三キロぐらい痩せた俺のご帰宅だ。お肌ツヤツヤは元々じゃね？

買ってきたのは案の定バスケットボールとかバットとか。ついていうかスポーツを一人でする気なのか、よっぽど動くのが好きと見た。執務室にげっそりしたまま帰ってくると、櫻井さんは不在だった。先に電話欲しいとは言つてたけど、先に帰っちゃうのね。瑞鶴にも胡散臭い面を拝ませたかつたのに。

代わりに小野が机に座ってる。お前はいらん。

「お、お疲れさん。デートは上手く行きましたかね佐藤殿？」

「デ、デート!?! どういうことよ指揮官!？」

ほらビツクリしちゃったよ。お前ニヤついてるしわざとだろ。

「あんまり瑞鶴をからかうなよ」

「面白いからつい」

「オツケー俺もエンタープライズとお前を全力でイジるとしよう」

それは勘弁して欲しいと本気で怯えられる。え、何お前あの後エンタープライズに何かされたのか？ 怖すぎるぜおいおい。

「つてか何で俺の軍服着てんだよ、型崩れするだろ」

ボタンは空けるわ袖は捲くるわ。何してんだよ、つてか人の服着るなよ。

「カッコよくね？」

「正直コツチのほうが指揮官っぽい」

「瑞鶴、俺を安易に見捨てるな泣くぞ？」

パパ悲しいよ。

まあ小野が着たら何でもかっこいいじゃん？ あんまり勝負にならないよね。それってアレだぞ、ダルと鳳凰院凶真を比べる感じだぞ？ 何となく凶真さん勝っちゃうよね、主人公だし。

ダルも好きだけどね。

「ともかく脱げ」

「へいへい、佐藤さんはお硬いんだー」

俺でお硬いとかユニオンの規律ガバガスギイ！ 自分宣戦布告いいすか？

ユニオンだけモヒカン世紀末なんだろうか、人の服は勝手に着ないって常識過ぎて逆に困るんだけど。

「よし、脱がすぞ」

「What, s!?!」

「やるぞ瑞鶴！」

「了解」

小野とその後には追いかけてっこしてた。何か俺のことをめっちゃ見ながら逃げてたけど何だ、お前もホモか？

もう櫻井さんでパンク寸前なのに。

「ひえ、容赦ねえよこの民間指揮官」

無理やり着替えさせた矢先、「働いたら負け」Tシャツを着ている小野がぼやいた。つてか私服で執務室の中を彷徨くな。

「俺はやりたいことをするんだよ」

「最強の俺様キャラなのに何か小物くせえよなあ、佐藤さん……」

ま、言ってるねそれは。小物だわ。

一応弁えてるつもりだ、だからでつかいことを為す気は転生した時から無い。

本当は何となく生きて、まあそれなりに社会人らしいながら快適な人生を過ごしたかったんだしな。俺は大役に向いてない、逃げることにすら出来ないやつにデカイ役目を終えることなんて不可能だ。

——つていうかまた瑞鶴エンタープライズのところに行っちゃった。今日はバスケとかで勝負するのかな、だとしたら鎮守府的にアウトだ。

まあ頑張つてたし自分で仕事しよう、つてか本来の俺の仕事だし。

いざつてときに俺も出来なきや困るのも事実だ。

「あ、佐藤さん。アンタに一個聞きたいこと有ったんだよね」

「何だよ、別に大体の質問は受け付けるが」

つていうか俺のほうが暑いはずなのに、小野はやたらとシャツをはたはたと振って涼もうとする。エンタープライズつてことは真珠湾だから、あそこ年から年中暑いよね？

——彼の口が開いた矢先、突然目つきが変わった。

「今ので思ったけど、アンタは指揮官がどういうもんかピンときてないだろ？」

「——？ そりゃそうだろ」

突然何の前準備もなくなつたんだし。「はじめてのしきかんっ！」は未だに愛読書だぞ、そろそろ何かカバーでも掛けたいぐらい使ってる。

そうじゃねえよ、と俺の顔をじつと見つめてくる。

何というか、蛇に睨まれた蛙みたいに動けない。本当に転生者なの

か疑うような内容物の読めない重圧がかかってくる。

「指揮官の命令の範囲とか、もつと細かく知った方が良い」

「アレは実際は『命令』っていうみたいにはつきりしたものじゃなくて、洗脳に近いんだ」

「嫌いなんだろ？ 命令すんの」

意味が取れない。何というか、クトウルフTRPGやってるみたいだ。何が言いたいのか釈然としない。

「どういうことだよ」

——このパターンは知ってる。

俺が自覚したくないだけってタイプ。もう答えは多分出てるくせに、それからも逃げてるんだと思う。

悪癖だとは思うんだが仕方ない。俺は後先考えない行動が多いから、その後の責任問題からは逃げたくなる心理も一緒に育ってしまつたのだ。

「俺が命令しないって言ったのは要するに「明言しないだけ」だからな」

「指揮官ってのは——アンタみたいな甘い人間には、あんまりメンタル上よくない事実があるんだ」

心臓が嫌に五月蝍い。何だかこれは不味い気がするのだ、宜しくない言葉が次に繋がる。

俺が守ってる下らない何かが、今からあっさり壊される。

「まあもつと分かりやすく行こう、まどろっこしすぎだな」

今日の朝設置されたばかりのソファに腰掛ける。

「例えばアンタが「手伝ってほしいなあ」って内心思っただけ作業をしながら喋るとするだろ？ これで命令は完成してる」

「命令は言葉じゃない、意志の伝達スキルだ」

「思わなかったのか？ いやに都合良く瑞鶴との関係が進むなって」

何かの体内に引きずり込まれて、胃液で溶かされるようなじつとりとした不快感が背中に張り付いた。

——心当たりしか無い。

必死で逃げる。違うはずだ、そうじゃない、きつと偶々だ。けど、目の前の悪魔は言葉を辞めない。

「よく思い出してくれ、瑞鶴は最初から攻略済みってくらい話しやすかっただろ？」

「出会った時点である程度、アンタの理想像にカスタマイズされてんだよ。そういうもん」

体が溶けていく。意味が理解できて謎の解れが無いことに気づいてしまう。

何であの挨拶であっさり打ち解けたのか。

何で都合良く俺の知ってる美少女の振る舞いを、俺という「三次元もどき」のいる世界で瑞鶴が取るのか。

何でサボるなんて言ってる軍人に、普通に接してくるのか。

何で上手くもないはずの飯を、美味いと言って食ったのか。

何で、何で何で何で。突きつけられて頭が破裂しそうになる。

何で櫻井さんが、俺の態度を見ても艦との関係に問題がないという態度だったのか。

もしかしたらどれかは今の話とは関係ないかもしれない。でも、あるかもしれない。疑念は勝手に確証じみた断定に膨れ上がって、どんどんどんどん俺の敵になっていく。

目に見えて顔を悪くしたのだろう、小野は呆れたように首を振る。

「世界はそんな甘かない」

「やっぱアンタはハリボテの指揮官だよ。知るべきことも知らず、結果の過程を見れず、ただ持っている力を無闇に振ってるだけ」

言い返すことすら出来ない。それを許さない、覚悟のようなものが男の後ろに見えたから。

俺にはないという事実を突きつけられたから。

「何で他の指揮官が艦を道具みたいに扱うか——っていうと其処なんだよ」

「佐藤さん。俺はアンタみたいな人は嫌いじゃないし、言うべきじゃないんだらうが——無知は罪だ」

思えば最初からおかしかったのだ。

上手く行き過ぎていた、俺は凡人のはずなのに。

「俺達はどうかやってもアイツラと対等になれない。だから、誰も対等になろうとしない」

「見りや分かる、出来るだけファイフティーファイフティーが良いんだろ？ 俺もそうさ」

そこはすっごい良いと思うんだが。何だかせせら笑いをしたような様子で小野が続けた。

多分せせら笑いだと思ったのは、俺がそうされるような道化だと自覚してしまったから。

事実なんか関係ない。俺は自分がそうであると思うから、周りからもそうであると思われてる———そう思い込みかけているんだ。

「別に綺麗事は万々歳だけど、ちゃんと認識しといてくれ」

「結局俺達は、『艦を利用する』畜生にしかなれないってこと」

「そのために雇われてて、この力はそういうもんだってこと」
後な。

そう言うなり男はため息を付いた。そんな動作すら上手く頭が情報として処理できない。

「問題に向き合った方が良い」

「アンタは意味のないことを今一人でやって、勝手に手応えを感じてる」

「では此処まで前置き、佐藤弘という人間に小野也人は尋ねよう」

「それでもアンタ、今の綺麗事を続けられるか？
分かるかよ、そんなもん。
もう答える気力が湧かなかった。」

ツギハギの主人公

その日の晩飯は、何だか無機物を食っているようで味気なかった。残念ながら俺の精神というのは並なので、事実を突きつけられるとあつさり揺らぐものだった。

言葉が上手く耳に入らない、恐らく瑞鶴の言葉が散らばっていたのだから分らない。

声は黒板のひつかき音で、他の物音はまるで発泡スチロールの擦れる音。何もかもがストレス源に切り替わっているが分かったし、そうである自分が嫌だった。

悲劇のヒロイン基質な主人公は嫌いだった。

不幸だけど頑張つてますみたいなモーションとか、それに何故かついてくる仲間とか、勝手に空回りして周りを傷つけてるのに許容される妙な虚無感とか。

俺はそういう人間に今、まっしぐらで走っていた。

「指揮官、どうしたわけ？ 何か勢い無いけど」

瑞鶴の声がエコーがかかって聞こえる、何だか世の中を信用出来ないやつのが気持ちがわかる。

元々そんな事当たり前なのに、その一挙一投足の全てに疑念を持つのはまさしく下らない俺辛い系主人公で、こうやって自分を卑下することすら愚かしい。

俺は今までもこうすぐ落ち込む性格だった覚えはない、明るく元気澆刺となんてわけではないが。

だが何となく俺は思っていたのだろう。

『俺は上手く立ち回れてきてるんじゃないか』

何か美少女ともそこそこに良い関係で。業務はちよびつとずつだけど着実に覚えてきて、でも普通の指揮官とは俺は違うんだって思おうとしてたんだらう。

だが違う。むしろ、他のヤツのほうがちゃんと足元を見て判断して

るだけ。俺は先延ばしにして、都合良く動いただけ。

それはショックと言うより呆れる。会社を辞めた時から俺の浅はかさは、さっぱり変わっていないのだと。

「ねえってばー」

椅子に脱力して溶け込もうとするのを、彼女は引っ張っていた。

保とうとしていたものが崩れた時つてのは呆気ない。俺は空元気だけは得意だが、それが無い時は正直ネガティブな部類だと思う。

空元気が本当に得意だった。誤魔化すのが大得意。

転生したことも気楽に受け止めて、微妙な寂しさとか両親とのすれ違いをよくあることだと流して、そして今までもそうだった。

気づいていても見ないふりをするっていうのが、今回の場合の俺の空元気のキーだった。

あっさり崩れた。

「いや、すまん。今日は休んどいてくれ」

「俺は疲れた」

ふと、小野の言葉が残響する。

『どこまで有効かはぶっちゃけ分かってない』

『ただどれが真実であって、どれが作り物であっても受け止める義務は有る』

それは恐らくアイツなりの答え。多分俺ほど極端でなくとも、崩れ落ちた日が何時か有ったのだろう。

義務だ、ああそれはそうだろう。ロボットものの主人公は殺人について考える義務が有るし、日常者の主人公には基本的に適当である義務が有る。

同様。それが指揮官の義務だ。

「……………そう」

「まあいいけど、そこで寝たら駄目だからね」

「分かってるよ」

何だか心配したような表情で瑞鶴は扉を開けて、最後にチラリと俺を見た。

——それは、誰が決めた行動なんだ。

答えなんか有るわけない。扉が閉じるのをぼんやりと眺めている内に、静かな音でその動作は終えられた。

次の日は、一応まともな態度に戻った。

「おはよう、瑞鶴」

「おはよう、ちゃんと寝れた？」

「ダイジョブダイジョブ、六時間だ」

まだ少ないと言われるかと思っただが、何故か安心された。

昨日が酷かったからな、寝ただけマシと判断したのだろう。というか今俺がそう思ったから、そういう風になってる可能性もある。

疑心暗鬼は取れなかった。本当に何で小野はあんな事をわざわざ教えたんだと思っただが

『無知は罪だからな』

それに尽きた。概ね同意だ。

——朝から普通に業務をこなしていた。

横から入る瑞鶴の注釈と、持ってる「はじめてのしきかんっ！」の情報と同時に処理しては、偶にミスして、瑞鶴に呆れられながら訂正印を押したりして。

今日に関してはこのへんちくりんな本への反応もあまり出来ない。何だか業務に集中してるほうがマシだ。

俺は至ってマトモな指揮官としての義務を、一つを除いて全うしていた。

「あ、また名前間違えてる。自分の名前間違えるってどういうことなのよ……………」

「弘って何か狐とか狐とかに似てね？」

「うーん？ すっごい譲歩すればそうだけど」

譲歩しすぎだろ。自分で言ってるそれは無いと思っただがな。

瑞鶴の一挙一投足を疑うのは正直俺が辛い。何を甘えたことを、なんて思えない。

辛いもんは辛い。俺は自業自得だからと納得できるような、主人公じゃない。

「後振り仮名のひらがなとカタカナの所間違えすぎ、ちゃんと見れば？」

「何かこういうのをミスるんだよな、大筋はオツケーだけど細かい所が違う」

漢字だと部首を間違えたり、数学の証明問題で一つ記入ミスが有ったり、分かっているのに違う記号に実験器具の名前を書いてしまったり。

所謂凡ミスの天才だ。実際今も、凡ミス中なわけで。

「ええ、それって大筋もミスって言われるじゃない」

「……………そうだな、大筋もミスと変わんねえよ」

そう、木は枝が一つ腐ればほっとくと全部腐る。

物事には一定に似通った法則があると思うが、これもそうだ。

99%正解の行動も、その1%の不正解が課題となってくるのが世界の摂理だ。だから正論はまかり通らない、1%の間違いもない正論がないからだ。

世界は大多数に都合良く展開する事は有るが、結果的に個々人に都合良くなってくれることは滅多にない。

「それは違うんじゃない？」

「……………どういう意味だ？」

どういう意味もこういう意味も、と身振り手振りで何だか変な動きをする。俺もいつもこんな感じで見えてるならピエロと言うか変な人だな。いや、俺は変な人だわ。

——もごもごとしていた口が、漸く言葉の体を成したものを吐き出す。

「何ていうのかな……………うーん、そうだそうだ。ナポレオンってすごい人居るじゃない？」

「一応聞くがどの国で偉い人だったか知ってるか」

「ユニオン？」

君はアホの子だな、なんか期待通りなのは冗談抜きで複雑な気分

だ。

「フランスな、それで？」

「まあナポレオンが何をしたかは知ってるんだけど、あの人海戦って結構負けてたの知ってる？」

「そういやそうだった。陸は凄いんだがどうにも海がな。」

ナポレオンのポイントは睡眠時間は意外と短くきつってるけど取ってた所だろうな。俺みたいに短い睡眠時間のやつは実際、何やってもダメなパターンが少なくない。

で、それが何だ。というかあんまり返答も聞きたくない気分なのに。

何で聞いちやうんだろうな、都合の良い答えが欲しいのか。それとも瑞鶴に何か期待してるのか。

「じゃあナポレオンって結果的にダメな人？」

「うん？ いや、海戦がダメなんだろ。海戦はダメな人で終わりじゃね？」

「でしょ？ ほら、そういう感じ」

何か話が違うような……………。

「でも俺が今ミスをしていた事實は、そこだけ切り取られて問題視されるだろ」

「だからそれは切り取られてるだけでしょ？ ちゃんと出来てる所は出来てるじゃない」

まあ物は言いようって感じだが事実では有る。

瑞鶴は難しいことを考えすぎたらしく、困ったように頭をかいて喉に骨でも引つかかっているような顔をする。

「失敗したら全部ダメなんじゃなくて、失敗したのにまだダメなのが悪い……………と思う」

「何だ、急に歯切れの悪い」

「だって何か上手く言えてない感じするし！」

まあ何か言いたいことはわかったけどな。

——一応励まそうとしてるのかね。俺はそんな深刻な顔で大筋云々の話はしてないと思うんだが。

「ま、まあともかく！ これの場合はミスを直せば終わりなんだからそれでいいじゃない！ はい話終わり！」

「ええ、何か上手くオチつけるよ」

瑞鶴はバツの悪い顔をして一言、

「正解がない話だし無理よ」

と静かに答えた。

「どうしたんだ瑞鶴、最近は何勝負を挑んでこないな」

何でそれがおかしいみたいない草してるのよコイツ。

まあ確かに指揮官が何処と無く変になってから五日間、そもそも目の前に顔をだすのも食事だけだったと思う。

——今日のお昼ごはんは、指揮官が気分で作ったらしいカルボナーラ。

あの日から挙動不審だったけど、この一週間で一番おかしな行動だと思う。

『食堂の人の仕事が無くなっちゃうからなあ』

とか言ってる作らないと思うんだけど。

厨房を半ば無理やり強奪して作り出した時はビックリした。

——そしてこれ。

「正直美味しくない……………」

前のチャーハンは美味しかったのになあ。胡椒すっごい入ってたけど雑じゃなかったし、何か。何か美味しかったのになあ。

味もするんだけど、何だか足りない。

「無理をして食べる必要があるのか？」

「作ってもらったんだから残さず食べるのよ、何考えてんのよアンタ」

「それはそうだが、本当にゴムでも食べているような顔だぞ」

「それでもよ」

指揮官があんな感じなのに私まで気を張らなくてどうするのって話よ。

——ちよつと余所余所しい時は正直辛いけど、秘書艦だから。

全然何考えてるのかわかんないし、ビックリすることもそれこそ砂の数星の数。

何だか考え方が軍人っぽくないし、セクハラもしてくるし。

多分良い人じゃないのも見れば分かる、どうしようもない中身が普通の人だし。

「それでも、一生懸命やってるんだから私も応えなきゃ」

相談してくれないのも、多分何か理由が有るんだと思う。

あの人が一人でなにか抱え込むのって想像つかないしね、すぐ泣きついてきそう。

「……………瑞鶴、後でちよつと付き合ってくれるか？」

「は？ 嫌よ」

「良いから」

何よ急に、気持ち悪いわね。

「さて、佐藤さん」

「何だよ、久しぶりに顔見せたと思ったらニヤニヤと」

まあ元々ニヤケ面してそうな感じだけどさ。わざわざ執務室まで来て俺を笑いに来るって趣味悪いぞ。

——アレから小野とは顔を合わせていなかった。コイツ自身、俺と敢えて顔を合わせていなかった。

考えろってことなのは俺でも分かる。でも考えりや答えが出る問題か？

俺が甘つちよろいのは、同じ立場を想像しやすいお前なら分かるはずだろ。

「いや、思ったよりメンタル弱いね。さじ加減ミスった」

「人心掌握が簡単にできると思うなよな」

「いや全くその通りだ、いきなり崖に落とす形になっちゃったよ」

難しいな、と頬をかいて笑う。こっちはただいまドブに浸かっている感じなんだがな。

——いや、別に小野を責めたりはしない。いつか来る事実なわけだ

し、本当は視野の狭い俺にも多分に原因は有る。

納得はできないが、そういうことだから。

嫌なことだが、コイツにやいのやいのとキレて回ることもちよつと違う。

「瑞鶴がへこんでるの、気づいてるか？」

「……………どれが本当で、どれが俺が変えたものなのか分からない」

「そりやそうだな」

瑞鶴の言葉がふと、脳裏をよぎった。

『失敗したら全部ダメなんじゃなくて、失敗したのにまだダメなのが悪い……………と思う』

そうだ。知ってるよ、だって俺はバカだから。バカは分かっても出来ないもんだから。

——分かってるんだよ。意味がない。

俺の悩みは全部無意味、明確な解決方法がないし何よりそれを考えること自体が——瑞鶴に失礼なことだ。

頭の中身をいじってるんじゃないんだから、常に疑って自分のせいではと被害妄想なんて本当にバカだ。

「まあ正論が効くって感じじゃ無さそうだな、分かっても出来ないってやつか」

「……………ああ仰る通り、理屈は分かってるよ。折り合いつける内容なものな」

小野の正論が効いてないっていうのは嘘だが。痛いさ、分かっても痛いんだって。

強くなれる気もしないし、この性分は変えれない。

俺は無鉄砲で、無責任で、そして普通だ。主人公じゃないっていうのはそういう理由、問題はこっから成長は殆ど望めない事。

紛いなりにも俺の理論には完成があつて、粗があるから潰せるといふ単純なものじゃない。

俺は目の前にある問題に対して、毅然とすることも出来ない。

「……………まあ、言った本人が引つ掻き回すようなこと言うけど」「言うなよ」

「言わせるよ、アンタの物語の転換点だぜ。多分」

んなもん有るのかね、二次創作ならダラダラと続くものだと思うが。

「俺は事実を認識しないのがダメだと思うだけで、別に今のままでも良いと思うんだ」

「前も言ったけど佐藤さんみたいなのは好きだ。甘っちょろい、それが最高に良いんだ」

「ピリピリしたやつばっかで飽きてたしな、まあそういう理由もある」
でもな。小野はまた妙な接続詞を繋げた。

「今から非情に徹するのも手だぜ？ 別にアリだろう」

「問題は—— アンタはどっちがしたいか、だ」

何だ、意味深なことばかり。やりたいことしか俺はしないと云ってるだろうに。

今はそれが分からなくて困ってる、分かってるだろうに。

「あなたはあなたに誠実であるべきだ—— 事実を見て、やりたいことをちゃんと見つけて欲しい」

「じゃないとアンタ、あつと言う間に潰れるような運命だと思うぜ？」

「なにせ、主人公だからな」

以上、要らないお節介でした。フィクサー楽しい。

そんな事を陽気に言ってるフラフラと何処かへ消えていく。全く、人の感情を振り回すことしかない奴だな、一周回って感心する。悪いやつではないんだろうな、良いやつじゃないだけで。

「はいテンプラおまちどうさま！」

「え、何急に。熱でも有るのか瑞鶴」

ってか晩飯時だったのに誰もいねえぞこの食堂。すっげえフラグだわこれ。俺執務室に籠もりつきりだったし話し合うチャンス大量にあるもんな。

ガンと机の中央に置かれたのは山程有る天ぷら。食えるわけない

よな？ 何この量は。

「なあこれ何人前なのよ？」

「良いから食べれるだけ食べるの！」

「うっそ〜」

嫌ですけど？ 普通に嫌ですけど？

明らかに苦い顔付きの俺を差し置いて瑞鶴の箸が伸びていく。

——— すぎえ、一口で一本食った。どんだけ頬張るんだよ。

「自分で言うのも何だけど絶品じゃない」

「ほんとに自分で言うなっ感じてだわ」

まあ何か、何かする気なんだろう。別にやりたいことが有るわけでもないし、付き合おうかな。

そう思いながら天ぷらを一つ取って醤油につける。

——— 半分ほど食べてみるが、美味い。よくこんだけカリッと出来るもんだ、俺がやるといってもふやけてるんだよな。

「実際美味い腹立つ」

「でしょ」

美味いとも。それは間違いない。

「飯が進むとはこの事だな」

「そ、そこまで褒めろとは言ってないけど……………」
「恥ずかしがる要素あるか？」

「まだ有るのかよ……………」

「私ももう無理……………」

結果は共倒れ、お互いに天ぷらを醤油に浸して突っ伏している。さながら様子は毒殺事件であるな。

——— つてかこれでなんなんだ？ いや美味かったけど、ホントに天ぷら自体はくそ美味かった。

それで？

「後の残りどうすんのこれ……………」

「わかんない……………グレイゴーストに押し付けようかな」

不憫梓エンタープライズ。確定しちゃうからそういう行動は慎んで欲しいな。

何かエンタープライズが天ぷらをめっちゃガッツク絵面を想像して笑いそうになる。

「アイツ、案外食いそうだな」

「どうなんだろう……」

瑞鶴は真剣に考えているようだ。当人に聞かなきゃ間違ひなく迷宮入りする謎だけどなそれ。

つていうか突っ伏したまま会話進行するのお通夜すぎねえか。

「あの………ユニオンの指揮官？ あの人のあーんとか？」

「はははは！ そりゃ無いだろうな！」

アレは非公式カップルみたいなものだ。当分関係も進展しねえだろうなあ、二人共奥手の匂いしかしらないし。

——久しぶりに笑ったな。完璧不意打ちだった。

「いやあ、笑わせてもらった。ありがとう」

「うん？ まあお礼なら受け取ったげる」

何という自信家。何となく感謝されるのを何となくで受け取るとは。

俺も適当に生きてるがそれは中々しないな。

——瑞鶴がニイと歯を見せて笑う。

「食べたら元気出た？」

「うん、お腹壊しそうだけど」

「奇遇ね、私もよ……」

バカだなあ、ホントバカだなあ。何やってんだよ、お前。俺もだけど。

——こんなおバカな美少女、俺は絶対欲しくないよなあ。

俺はクールビューティー派で、クーデレが大好きで、種田梨沙より石川由依で、ぶつちやけ言つてゲームの時は完璧にエンタープライズ派だったしな。

全然コイツつて、相棒として都合良くないよなあ。

ああ。それが俺の欲しい相棒なのかもしれないが。

——都合良くは、行っていないはずなんだよなあ。

「……………心配かけたな」

「ホントよ、全然変なこと言わないし」

「俺は変なこと言う人なのかよ」

ああ馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しいけど、すつごい楽しい。

——眼の前に居るのが都合のいい妄想ってわけでもなし。

どうにもならないことはどうにもする気がないのが俺の原則で。

俺のこの妙な能力は解決不可能で。

瑞鶴は、さっぱり制御不可能だからな。

一生懸命で、グレイゴースト馬鹿で、地味に寂しがりやで、何だかんだ俺にも親身なお人好しで。

「まあ仕事はしないけどテンションは元に戻ると思う、後一日ぐらいで」

「仕事はしてよ!？」

「冗談言え、しないぞ俺は」

俺の苦手なことは10分以上考えることだって忘れてた。

「なあ、何となくもう一回自己紹介していい?」

「また大声出す気? 今、夜だよ?」

「大丈夫だって、今回はちゃんとやるから」

「大本营に無理やり指揮官にされた佐藤弘だ。これからも適度にサボるから、愛想を尽かさないと今後よろしく」

「ああ——悪いけど、このタイミングでマトモに名乗り直す気にはならないかな」

「瑞鶴君空気読んで?」

まあ良いや。突っ伏してる状態で自己紹介し直すとか、変人の仕事だしな。

それに、言う事聞かないくらいが瑞鶴らしいんだろう。

——程々に甘つちよろしく行こうぜ。

何せ俺はアイツいわく、「ハリボテ」なんだからよ。

「あの二人のストーリーは取り敢えず……一章終了ぐらいかね？」

双眼鏡で覗き込んでいた小野が横のエンタープライズに尋ねる。二人は自室から食堂の様子を眺めていた。

突っ伏している様子から何を汲み取ったかは知らないが、二人して笑いだした辺りでニヤリとしだしたのは、正直エンタープライズは怪訝な目つきで見ている。

「私に分かるものか」

「つていうけど、俺達もきつと物語だったんだぜ？」

「そうなのか」

「そうなんだよ」

小野のあからさまなメタ発言をエンタープライズはふんふんと適当に流した。慣れているとしか思えない。

——エンタープライズは裸眼で二人の様子を捉えている。小野の記憶では読唇術も一応出来るはずなのだから、会話の内容は分かっているのだろう。

「なあ、何話してた？」

「秘密だ、趣味が悪いぞ。指揮官」

「お前はどうかんだ」

「私はグレイゴーストだからな、亡霊に趣味が悪いも何も無い」

屁理屈ばかり言っちゃってえ、と小野は不満げに唇を尖らせた。
——何笑ってんだよ、亡霊さん。

笑ってるのを見ると、やっぱり内容が気になるのは変わらなかった。

「今日は満月か。美しいものだな」

「月が綺麗ですね？」

「死にたくないな」

マジかよ、と小野は小さく笑った。

「あなたが待っている場所に、この足で帰りたい」

「……………はい？」

小野は気まづくなって顔を逸らした。

——見えたのは欠けのない満月。

欠けたものだらけの男を慰めるには、丁度いい程々の美しさだろうか。小野はそんな事を考えながら月を見上げたまま魅入っていた。

「つてか新しい艦は何時来るのよ櫻井さん」

久しぶりに電話した。本当は初めての電話は母上が良かったが多くは言えんよなあ。

電話の向こうからはそうでしたね、と慌てた声。お前ラスボスのくせに何か抜けてんな。

『近い内に手配しましょう。要望は、有るならば一応考慮しますが』
「翔鶴。姉貴居ないと寂しいだろうからな」

櫻井は作ったような笑い。まあ良いさ、いざって時に捨ててやるから覚悟しろ。

——俺はこのまま逃げ切るからな。

これから来る艦も全員何とかして、重桜転覆なんかつゆとしらぬ顔で俺は家に帰る。

変わらないさ、俺は目的意識は最初からはつきりしてるんだから。

『わかりました。最優先としましょう』

「あー、後な……………」

『後は、何ですか？』

「まあ良いや、じゃあな」

プツン。無理やり切った。

——と同時に小野君ご入室。タイミング良すぎるぞ、やっぱお前転

生者じゃねえだろ。

「故郷に電話かね佐藤くん」

「馴れ馴れしいぞヘタレ」

「え、何でこんな言われんの俺!?!」

当たり前だ。

全く、要らないことにカロリー使わしおってからに。

幕間

もう一人の主人公

「できでさ、ヘタレ君とエンタープライズの今までってぶっちゃけどんなん？」

「俺をナチュラルにヘタレ君で固定しようとしなくてくれますかね佐藤さん!？」

お前はヘタレ君だ、もう固定だからな。この前の借りは忘れてねえ。

大体朝っぱらから執務室に入り浸ってべっちゃくつてくるようなやつをマトモな扱いするわけ無いだろ、マジで邪魔です。

——っていうか「はじめてのしきかんっ！」がマジでバイブル化してきてるこの頃。あのく、ずっと略称誰か考えてくれないかなくって待ってるんですけど……。

「まあ瑣末事は良いんだぜヘタレ君、ほら早く過去話パートに入って」「今日メタすぎない？」

パートの問題だ。息抜きなかったら俺は死ぬんだよ。

——まあそんなことは置いておいて。色々準備有るけどハンコぼんぽんゲー化してるから、暇つぶしに聞いてみたい。

要はラジオ代わりだよな。

業務ができるようになってきたから瑞鶴がグレイゴーストの追っかけ始めたし。アイドル追っかけてるのと同じだって気づいてないんだろうな。微笑ましいけど眼がマジで怖い。

「早くしてくれよ、マジで今日は序盤に尺使うなって上の人からだな」「ああ分かった分かりましたからメタ発言辞めてくれ!」

勝訴。僕はただ、事実が知りたいんです。

まあ、というところまずはホントに出会いからだな。俺の親父って実は

指揮官でさ——マジだよ。何、設定が違う？　メタいんだってマジで。

それで俺は母親が早くに病気で死んじゃったのよな、いや可哀想とかじゃねえよ。この世界に来てからは多分恵まれてるさ。

仕方なく親父についてきてつてのが6, 7年前の話。その時は海軍将校で成績トップとか普通に天然チートだったからユニオンで言われたのよな。

『お前も指揮官なれば？』

「お父様軽くていらっしやる」

いや、でも凄え人なんだよなこれが。

ユニオンで指揮官になったのは俺自身の実績も勿論有った。有ったけど、どつちかつて言えば親父がすごかった。

元々あの人が何故かユニオンに行つて実績積んでるから息子やし、しかも有能やんけ！　つてなつたわけよ。この前の説明では正直盛つただけど。

「お父様は今でも指揮官なの？」

ああ。プライズちゃん———というかヨークタウン型は親父から任された。

「凄えな、つまり三鳥持つて初代ポケモン始めるみたいなものじゃん」
微妙に現代っ子じゃわからないからレジ系にしね？

「この下りが無駄つて急に思えてきた」

分かる。どうでも良いけど俺はレジ系が好き。

だから要は、アレだよな。異母兄妹みたいな雰囲気も若干あるよね、まあそれは追々何か話題に上るだろうし後で。

初対面は、惚れた。いや見た目いいじゃん、スラツとしてるし銀髪ツボだしさ。

「瑞鶴も良いじゃないか」

いやそれは否定しないけど俺はプライズちゃん。

「このへタレ」

何でだよ。ま、次行こう。

だから仕事は最初はおっかなびっくりだよ。プライズちゃんが手

取り足取り教えてくれた。

「其処詳しく」

疚しい事はないからな？ アンタってこう………時々ド変態だよな。

最初は本当に大変だった。海軍将校でトップって行っても要は実戦経験なし、バリバリの小隊長の横で「し、しかしそれは規則に違反しています！」とか叫ぶ程度の役目だ。

転機は——多分な、あの娘が人型セイレーン、スカベンジャーと殴り合ったときだな。

「殴り合った？」

物理的に。指揮官って出撃についていくんだけどさ——いやそこで驚くなよホントだ。頑張れよ佐藤さん。そのうちやってくる試練だからな？

で、ついていったら船に乗って来たんだよ。だからプライズちゃんが弓で殴り殺した。

「何で物理なんだよ」

冷静になってくれ。艦載機とかで爆破されたら俺が沈む。

——でき。それまでは何やかんや無傷だったのが、初めて手が取れるんじやねえかってくらいの大怪我をして帰ってくることになった。

後悔したもんだ。何か出来たんじやないかって結構思い悩んだ。

当時っていうかこの世界では今でもか。人型セイレーンってマジで指折りのレベルの確認数だから対策がわからなかったってのが大きい。

「そこ詳しく描写。大事なところでしょ」

へいへい。無茶振りだなあ。

『指揮官、下がっていてくれ』

短い声が響いた。澄んだ声音でありながら強制力を感じる忠告に、男は大人しく後ろへと下がっていく。

眼の前に居るのは正体不明の異形。手に備えるは用途すら分からぬ黒い籠手。その白い体つきに反して暗く輝く金の眼は嘲笑に細められている。

明確な異常はその魚類そのものの太い尻尾。打ち付ける度にぼちんと船体に小さな揺れを起こしているのを見るには相当な重量がある。

見るだけで恐怖、それは少女の姿でありながら化物を宿しているのが本能的に理解できる。

—— 其れを見ていた女の、船体を挟む足音とともに殺戮は開始された。

『硬さはどうだ』

十メートルも有った距離が、彼女の一足で虚に落ちた。刹那に衝突したその過程を証明できるのは、挟れてもう戻りはしない船体の歪みのみ。

あまりの速さに微弱ながらもソニックブームを伴っていたその衝突を、スカベンジャーはすんでのところその籠手で受けた。

乱暴な弓での殴打に、早くも左の籠手が罅割れる。

『意外と脆いか』

エンタープライズが無機質に眩くと、弓を振り抜いて足をついた瞬間にまたその姿が消え去る。

—— しかしスカベンジャーは莫迦ではない。

右手に回り込んでいたエンタープライズの動きを当然のように、籠手を突き出して対峙する。

その右の籠手から気味の悪い風を吸う音。エンタープライズの眼が僅かに見開かれる。

『……………これは、無傷では済まないな』

既にエンタープライズは次の一撃に踏み出している。完全な回避は不可能なほどに彼女の中心線を貫いている籠手の先から、夥しい量の青白い弾丸が打ち出され始める。

回避不可能。半身になってもエンタープライズの右手が弾丸を掠めていく。

『しかし当てれば問題はない』

すぐさま手を振り回して弾丸を当てようとするスカベンジャーへの、数段早い左手からの打ち込みが炸裂する。

それは彼女の並外れた運動神経から無理やり生み出された神速の一手、スカベンジャーの顔から薄ら笑いが消えた。

仕方無しと受けた右籠手を完全に粉碎。

セイレーンの血は蒼い。流れる海水のような血を見てボソリと

『さながら悪魔だな、血が海水とは』

と呟いて横へのステップで暴発した最後の弾丸を避けきる。

——距離を取り終えると右手を染め上げた血を払い、また一撃離脱の構えを取る。どう見ても右手は機能が停止しており、傍から呆然としていた男ですら咄嗟に目を逸らしそうになる。

目を伏せた刹那、不動であったスカベンジャーがその黒く太い尻尾を船体に叩きつけてエンタープライズに向かって跳ぶ。

明らかな窮地。マトモにその体にぶつかるだけでも負傷は免れない。

しかし、そこでエンタープライズはニヤリと笑った。

『向かう手間が省けた』

すぐさま弾丸のような速度のスカベンジャーの弾道の、少し横へと足取り軽く移動。

そのまま顔面に向かって弓をフルスイングする。右手を添えただけの、左手だよりの乱暴ながら精密な一撃。

『ベースボールは門外漢だが——これだけボールが大きければ打てる』

スカベンジャーの顔から致命傷を知らせる粉碎音。スカベンジャーの最後の視界にはまばらな閃光が散らばり、とうとう、エンタープライズのフルスイングに体が吹っ飛んでいく。

勢いそのままにゴムボールのように跳ねながら船体を転がっていったのに、すかさずエンタープライズが疾走る。

『後一手——！』

スカベンジャーが朦朧とした視界のまま、無理やり尻尾を叩いて奮

い立ちながら体勢を立て直したときにはもう遅い。

——亡霊はその目の前で、弓を振り上げている。

まさしく亡霊。行方は掴めず、そしてその全てが灰で覆われた不可視の殺戮者。

『弓が壊れてしまうな』

場違いな杞憂と共に、そのまま頭部に向かって振り下ろす。スカベンジャーは最後の最後に、初めて絶望の表情を見せたが全てが手遅れ、とうとうその頭が割れた。

どさりと体が崩れ落ちるのに、エンタープライズは何の容赦もなく数回殴打を繰り返した。

また屍体が転がった。転がって転がって、血を撒き散らしながら漸く——止まる。

『……………終わりだ』

ピクリとも動かないその残骸に満足したのだろう。ふうと息を吐いて、髪を払う。

——右手だけが未だに赤く、後はスカベンジャーの青い血に塗れている。その姿は何かを殺したと言うより、まるでペンキをぶちまけたようで現実味に欠ける。

男はその姿が、単純に——美しいと思った。

殺戮に削がれぬ美しさには、きっと価値があり。それは今、目の前で息づいている。

そう錯覚しては、息をするのも忘れてしまっていた。

『……………指揮官、すまない。右手が動かないんだ』

『——ッ！ す、すまん。大丈夫か!?!』

ワンテンポ遅れた指揮官の対応に、エンタープライズは訝しみながら手を——

「こんな感じか？」

「え、ナニコレ別作品かな？ かつこいい続き見させろ——まあ、

災難だったな」

小野は手を組んで思い出しているのだろう、ちよつとだけ青褪めながら応えた。

「ホントだぜ、艦がすぐ治るのは知ってるけどヒヤヒヤだよ」

そりやあね。眼の前で女の子が傷だらけだと男的には来るもの有るしね、焦りは生まれるでしょうな。

——もし、瑞鶴が俺を庇って怪我をしたりしたら。

多分冷静さを欠いて、要らない被害を増やすだろうな。やっぱり俺には主人公向いていないよ。

「なあ、ぶっちゃけスカベンジャー可愛かった？」

「怖いけど、ちよつと可愛かった」

「やっぱりか、でも会いたくはねえな」

尻尾有るんだ、人外キャラは趣味じゃねえよ。しかも何か薄気味悪そうだし。

その手のキャラと言えばグラ○ルのドラフだよね。彼女達は悪い大人のおもちやになるためかのようなお姿で。薄い本ばかり増えていく悪いクールジャパンだなあ。

まあ重桜の艦ってみんな耳とかついてるけどね。

「何？ それで何か『頑張らなきゃ』みたいなアレ？」

「お恥ずかしながらそういうテンプレ展開です」

「うわー、お前主人公じゃーん」

自虐ネタじゃねえぞ、俺は100%純正の脇役だからな？

——よくもそう、真つ当な感情で頑張ろうと思えるもんだ。

別に馬鹿にしてる訳でもないけど素直に感心する。俺はそれでも、指揮官を真面目にやって何か成し遂げようって思うことはないんじゃないのか？

人は何時でも変われるが、何時でも元に戻る。俺がやる気を出したとしても、成し遂げる前に息切れが良い所だろ。

「……………まだ聞きたい？ 正直自分語りとか恥ずかしいんだけど」

「もう良いや、作業にならない」

「俺の主人公力に惚れた？」

「ああ。惚れたからもう俺と交代してくれねえかな？」

嫌だと首を振られる。まあ俺もお前と代わりたくはないから安心していいぞ。

っていかずつと気になってることがあったんだった。

「小野つてき——いつ仕事してるの？」

「してるしてる、多分ね。誰も気づかないしそれについて語る気もない」

「怪しい」

まあ責任感はあるそうだし、仕事はしてるんだろうな。でもTシャツ姿で入ってくるなよホント。

「ホントすんません、うちの娘が迷惑かけて」

「私、指揮官の娘になった覚えはないけど」

鎮守府
うちの娘なんだよ。

無理やり一緒に頭を下げさせる。いや、アツチもノリノリみたいだけど実際時間を割いてもらってるからな。

「迷惑というわけではないのだが……」

「でも面倒くさいじゃん、瑞鶴つて」

「ねえ何で私こんなに言われたい放題なの？」

そりゃあ君が懲りずにエンタープライズのケツ追っかけてるからだ。ストーカーだぞ最早。

ゲームのボイスだとキヤツキヤしてる感じしてたのにこの瑞鶴ガチだからね、殺る気スイッチがオンだからね。

——もしかして史実の記憶とかが強いのかな。

いやだとしたら逆に仲良いよなあ、一体どういう状態なんだこれ………。

「指揮官がサトーには迷惑を掛けているからな、お互い様ということではダメか？」

「ああ確かにプラマイゼロレベルで絡んでくるなアイツ」

ホントお仕事以外もしっかりして？

今の所爆弾投下するだけの変な転生者だからなアイツの立ち位置。

——俺が中々言えない問題について触れているのに気づいたのか、エンタープライズは少し微笑んだ。今日もお美しいのである男を捨てて俺とケツコンしませんか？

「彼が人間と自分から話すのは珍しいことなんだ」

「面倒かもしれないが、付き合ってくれと有り難い」

「へいエンタープライズの望むままに！——え、人間と話すのが珍しい？」

何その不穏な感じ。上に傍点降ってるだろ、俺には分かるぞ。

瑞鶴と顔を見合わせるが、こっちもよく知らないようだ。まあそりやね、アイツってよく分かんない所あるし。

「ああ、彼は仕事以外で人間とは喋らない」

「自分から声を掛けるというのは、父親以外では見たことがなかったから驚いたよ」

オイ辞める作品違いなゲロ重シリアスの匂いがするんだが！

当方は間抜けな指揮官が全力で勘違いされて胃に穴を開ける小説ですのでガチシリアスはお帰りください！

「アイツの立ち位置分かんなくなってきたぞ俺……」

「指揮官、一番何目線で喋ってるのか分かんない」

確かにそのツツコミは正しいんだが、実際アイツは何者なんだよ？

「人間嫌いってこと？」

「それとも何か違うが、ともかくそうなんだ」

「クソ、納得できねえんだけど！」

エンタープライズも知らないんじや迷宮入りじやねえか、無駄に思わせぶりなこと言ってくるやがってこの野郎！

でもエンプラ好き!!!

「あの人は飄々としてるつもりだが、脆い人だ」

「もうじき帰る事になるが、それまでは宜しく頼む」

ええ………何任せれちゃってんだ俺、何でちよつとまあしやあねえなみたいに思ってたんの俺。

「分かった」

ああ、口が勝手に。まただ、悪い癖だよ。

そんな深刻な話されると断るに断りきれないじゃん、絶対すっげえ込み入った事情有るやつじゃん？

しっかし何で俺に比べてアイツはキャラ立ちまくってんだよ……。絶対転生者じゃないだろ。

——もうどんな顔すれば良いのかも分からずに苦笑いをしてると、エンタープライズがフツと零れたように笑う。レアショットか？

「しかし、あつさり立ち直ったものだな。上手く行ったじゃないか、瑞鶴」

「はい？ 何の話？」

瑞鶴が消えていた。音しなかったんだけど、アイツは忍者か？ それともニンジャスレイヤーか？

エンタープライズもちよっと驚いたように眼を丸くしている。そりやそうだ、俺もこんな速度で消えるのは初めて見た。

「……………まあ瑞鶴のことは忘れて。何の話だ？」

「ああ、サトーの前で言うべきではなかったか。失言だな」
「ますます話が読めなくなる。」

——おい含み笑いを辞めろ、俺のなけなしの主人公魂が原因追求に乗り出しそうだ。偶にはそういうのって謎で終わっても良くない!?

ああ駄目だ口が勝手に尋ねるう！

「真面目に何の話だよ」

「いや、瑞鶴が天ぷらを作った日があっただろう？」

ああなんかもうオチ読めた。でもこういうのって途中で止めるの野暮だよ。

「私は『何時も通りにぶつかってみれば良いんじゃないか』と言っただけなのだが」

「彼女は面白いな、解決してしまうのがまた凄い所だ」

ふーん。ふーん、ふーんじゃないよ結構衝撃だよ。

何そっちはそっちで一本書けそうな話展開してんだよ。俺がクソマズカルボナーラ作って自分で唸ってる間に何いちゃついてんだお前ら!?

俺の前でしろ！ おいしいシチュを勝手に自己完結するな！

あ、でも面倒かけちゃったな。それは謝ろ。

「……………そりゃあ俺含めて面倒かけた、ごめん」

「面白きこととは良きことだ。私のように常に辛気臭くても問題だからな」

多分ですね、それはニーズとか作風とかそういう問題ですね。きつともつと巫山戯てるエンタープライズも居るんじゃないかな。

まあね、面白きことは良きことなり！ って有頂〇家族でも言ってるしね、実際面白いのは良いことでしょう。

「とりあえず俺は大丈夫そうだから、後もうちよつと瑞鶴を頼みます」
「新しい艦が来るまではアイツも寂しいだろうから」

ちやんと頭を下げてお願いしておこう。幾ら言ってもアイツのアレは、ちよつとなあ？ 大変だろうしな、相手するの。

しかし瑞鶴が変態男二人組と喋っても気が晴れんだろうし、やっぱ最低でも同性じゃないと。

アイツからは無理してすぐ倒れる匂いがする、ガス抜きに喧嘩売るのは——まあ良くないけど仕方ない。

「……………それは構わないさ、本当に」

「良い艦と出会ったものだな、あなたも」

まあな。何やかんや迷惑かけても頑張ってくれるし、こつちも自然体でいられるし。

「へタレ君とエンタープライズも良いコンビだぞ」

「ちよつと夫婦漫才には飽きてきたけど」

「ア、アレは夫婦漫才ではない！」

怒られた。ひえく、おっかねえ。

「ほんとにござるか？」

「ああもう、彼といいサトーといい何で私ばかりからかおうとするんだ！」

瑞鶴とは違う新鮮な反応をするからでしょうね。

初心属性は強い。

「ま、アイツイケメンだしちゃんとキープしとかないと取られるぞ？」

「なっ——そうフラフラとした人じゃないぞ、彼は」

急に大胆だな。私の傍から離れたりしないって？ いや〜自爆していくねエンタープライズ君。

「ワオ、これは相思相愛だ間違いない」

「そういうことでは——！」

いやそういうことだろ。

良いなー、主人公だからちゃんとヒロイン居るんだな。俺も欲しい。

ヴァイオレンスアワー①

「指揮官、離れないでくれ」

ぴとっ。俺には刺激の強すぎる柔肌がバツティングして拍動急上昇。

——あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！

おれは奴と一緒に温泉旅行に連れてこられたと思ったら、いつの間にか密着を強いられていた。な、何を言っているのか（ry。

はいどうも、皆勤賞の小野也人です。転生芸人やってます。胡散臭いとか言うな、俺も頑張ってる。

「あ、あのですねエンタープライズさん」

仲よさげに歩く二人を他所に、耳元で囁きかける。

「な、何だ急に」

「ちよ、ちよっとだけお離れいただいて宜しいでしょうか？」

何が起きてるかをちゃんと話そうと思う。

俺は今、腕に抱きつかれて歩いているのだ。頭がバカになりゆ。

女の子の肌って柔らかいよなくとか実質中年同士で盛り上がってたような初心な俺に、そんな柔らかいものは押し当ててはいけません。頭から除外しろ、精神統一だ俺。

「そんな事を言ってる場合じゃない。私だつて恥、恥ずかしい」

「オイ辞めろ、そういう言い方すると俺がラッキースケベ主人公みたいになるだろ!？」

それどころじゃねえんだろうな、分かっているけど俺は美女に弱い。グラフとかが淡々とやってくるなら「そう、これは遊びじゃないんだ（キリッ）」とか思えるけど、俺より抱きついてる相手がすごい緊張してるから駄目。

——ああうん。何で俺が色んな意味で蜂の巣になりそうな状況なのかというと、これは少し前にさかのぼって回想が必要だ。

よし、任せたぞ三人称！俺はテンパってるからガンバ！

幕間とはいえ彼らの言動がフリーダム過ぎる、という野暮なツッコミは置いておこう。というか私も暇語り手ではないので自重してもらいたい所だ。

遡ること正確には四時間程前。何時も通りに朝からサトーとお喋りに洒落込もうと豪快なスライディングと共にダイナミック入室を果たしたところから話は始まる。

余談だが小野はホモではない。多分。

『たのもーッ！』

彼はいつもサトーに呆れられる側。今回もツッコミ待ちな台詞で入ったのだからツッコミが入る———そういう甘々固定概念で埋め尽くされていた。

甘いぞ、ドモン！

『よしへタレ君も温泉行くよな!? 行くだろお!?!』

『ヒエツ、いきなり何だ!?!』

入った瞬間に鼻息荒くサトーが小野に押しかける。

———何この人テンション高くね!?!

彼の予想外はごもつともである。サトーは朝に弱く、恐ろしいことに一応テンションが低いのだ。

具体的には!とかが?がつかない。喋る内容は所詮サトーなので同じである。

『朝にちよつと来てた櫻井さんが、温泉行って来いってくれたんだよこれ!』

サトーがかざしたのは此処に近い場所の温泉の券。

小野はあまり見ずに対応したが、しかしよく見ると「此処は混浴です」という内容でゴリ押している。まともな温泉宿とは思えない。

『櫻井だあ?———ああ、アレか』

内心舌打ちする。奴が絡むと小野はどうしても「ユニオンの指揮官」としての判断を余儀なくされる。

単純にサトーと喋る普段のように適当には動けない。

———でも、今日はある予定ないよな。

普段の彼は朝にサトーの邪魔をし、昼から調査をして報告するとい

うルーチンで動いているわけだが、今日の予定は奇跡的になかった。逆に言うと、櫻井がこのタイミングでこんなものを勧めてくるのは裏がある気がしてならないのも事実だが。

『サトーさんと瑞鶴で行ってきなよ、俺はパス』

『いやこれ四人来ないと使えないっていう謎縛りが有る』

『マジで謎だなその縛り!』

——何のために四人なんだ! ご都合主義に巻き込まれてる感が凄い!

そうだよ。世の中には都合のいいものを求める傾向って有る。

さて、小野はガンガンとサトーに振られて言葉通りの激しい勧誘を続けられる。

『頼むよ! 俺は温泉に行きたい!』

『ええ〜……………こればかりはちよつとなあ……………』

クソ、と言いながらサトーがもう一押し。

『此処混浴なんだぞ?!』

『よし行きますか佐藤さん!』

『はいハイタッチ!』

コイツラはバカだった。性欲に負けるな脳内年齢50代。ハイタッチをするな、纏めて痛い目を見るのはもう見えているというのに。

『……………それ、マジなの?』

『ああ、俺は今男になる』

何でこうなるんだろうか。

そして昼。葉の生い茂る木々の囁きの絶えない山を背景にした、普通の旅館の前に彼らは立っていた。

『兄弟、作戦は分かってるな?』

『来てからやっぱり申し訳なくなってきたし佐藤さん一人で…………』

遅すぎるとしか言いようがない。

『馬鹿野郎、ビビるんじゃない!』

むしろビビって欲しい。せつかく美しい景色に温泉があるというのに、サトーの頭はピンク色状態である。よくも悪くも正直な彼らしいところでは有るが。

——ここに来てから急に怖くなってきた、帰りた。

さつきは「襲うメリツト無いしな」とか適当に済ませてしまったが、目前に目標物を捉えて急にリアリティが増したらしい。

ダメダメな男衆に対して、艦の二人は極普通に楽しみにしている所が強かった。

『温泉って行ったことなかったのよね〜』

『私も聞いたことは有ったが、見るのは初めてだ』

温度差が激しいどころの騒ぎではない。まるで大学のサークル絡みの旅行のような様相で話は進んでいった。

『……………まあ、普通に温泉行きたかったのも二割は有るし』

『二割しか無いんだ佐藤さん、やらしくなく』

『バツ、お前も乗り気だったくせに!』

サトーがパシンと肩を叩く。小野がバランスを崩して前で話している二人に割り込む形になってしまった。

『二人共気が抜けすぎじゃない?』

『待ってくれ瑞鶴、俺は今佐藤さんについて憂慮するべき事態が有ってだな——』

彼がやや保身に逃げながらサトーの野望を暴露しようとした。

咄嗟にエンタープライズが小野の働いたら負けTシャツの首元を思いつき引き張った。

——首痛い痛い!?

『スイマセンでした測り間違ってもサトーさんに加担したりしませんから——!』

『何を言ってるんだ、指揮官』

『アレ?』

——気づかれてない?

よく聞こえてないなと感心している間もなく、エンタープライズが周りを見渡しながら耳元で呟く。

『物陰に人が居る』

『え、マジかよ!』

静かにしろ、とエンタープライズが小野の口を塞いだ。

——そりや大声出すでしよ。

ノリでオーケーを出したらこのザマである。彼は驚愕というより、予想通りすぎる上に自分が浅はかであると若干へこみ気味になる。

——この前の言動も怒られたし、不用意に動くくせが治らない。

サトーに対する言動然り、今回然り。ストッパーに入るエンタープライズが居なければよくこういう暴走をする。

『……にしても、こんな直接的に殺りに来るとはな。どうする?』

『下手に帰るわけにも行かないだろう。取り敢えず出来るだけ離れないでくれ、部屋も同室にしよう』

——はい、今なんて?

予想外の一言に彼の頭がトンカチショック。一瞬点滅する。

何度も直前の音声を脳内再生している。ドウシツ、ドウしつ、ドウシつ、どうしつ——ああ同室か。

——は?!

『同室?』

『それと——少し目を離れたスキになんてことも有るからな』

そして、現在。

いや最後の一言だけおかしいよ、作為を感じるよ俺は。つていうかそのフロントにくつついた危険なボールを手に当てるのは何、もしかして俺で遊んでる?!

——つていうか何がムカつくつて、前のお二人が

「まー、こんなお昼からイチャついちゃってはしたないわね、瑞鶴?」

「明日から絶対いじつてやる」

と事情も飲み込まずに好き勝手言ってる所だ。アンタラこの旅館出たら覚悟しろよ?!

特に変態佐藤は許さんぞ俺は。

「絶対何らかの形で報復するぞ、プライズちゃん」

「全く同感だ、指揮官」

特に佐藤さんの方はこっちが爆弾抱えてるの忘れてるだろオイコ
ラ。

——いやでも瑞鶴も可愛いよなあ。元気いっぱいだししかも献身的、
これは佐藤さん恵まれてんなあつて思っちゃうもん。

横の人はデレてくれないからなあ、真っ直ぐ来る信頼って貴重で素
晴らしいと思うよ俺。

「いだっ!? 何耳引つ張ってんだよ!」

「手が滑った」

「滑る空間無いから!」

おつかねえ、ちよつと他の女の子見ただけでコレだよ。

「俺は一途だぜ?」

「そうニヤニヤと瑞鶴を見ながら言われてもな、というかそういうの
ではない」

いや絶対そういうのだろう、女子だなあ。

この小野也人にもつと溺れても良いんだぜ? おえ、今の台詞を言
う姿を想像するだけで吐き気がする。

「てつきり浮気を疑われたのかと——い”だい”い”だい”!」

藤〇〇也みたいな声出たじゃねえか。どぼじでな”ん”だよ”オ
オオオオオオオオ。

それは美術マニアがエル・グレコの受胎告知見たらテンション上が
るぜみたいなもんなんだけだな。大〇美術館、こっちにはあるかな?

——というか前の二人が案内受けるからこの理不尽な感觸を誤
魔化すタイミングがない。歩く度に変なもの当たるんだよなあ、盗ん
だバイクで逃げ出した。

「なあ、ぶっちゃけこんなにくつつく必要ある?」

「い、一応だ」

「すつげえ怪しいんだけど」

一応って言われたら一応ですけど。備え有ればドラゲナイって言

うしな、言わねえよ。

——まあ、ナンカ気配はするよな。案内役の人とか客とかだけじゃねえ、数人とかじゃないもん。この密度はもう疑いようもなくアレだ。

「おやおや、お二人とも仲がよろしいのですね」

突然後ろから声、思わずビクリとなるがプライズちゃんの方が駄目だった。

「何だ!? 敵か、敵だな!」

「ちよ暴れないでくれ! 手がもげるう!」

痛かったりやわつこかったりの様々な天国と地獄を味わいながら声の方に振り向く。

——ワオ、イケメン。黒幕君じゃん、どうりで櫻井ボイスなわけだ。

「だ、誰だ!」

また暴れる。このまま腕がもげたら素晴らしい感触を覚えたオーパーツ品なのでは? いやならば俺という存在はそれ以上にオーパーツ的価値があると信じるしかねえ。

「落ち着いて!? らしくないよプライズさん!」

痛い痛い、コイツが今すぐ危害を加えてきそうな顔なんて——
してるな。悪役感が有るツラしてるし。

プライズちゃんは見たことないんだった、アカンマジで腕がもげる。

「この人櫻井さん! 佐藤さんのサポートしてる変な人だからストツプ!」

「私は変な人というイメージなのですか!」

そりゃそうだろ。指揮官を後ろからバックアップしてるとか立ち位置自体が変というか、オンリーワンだよな。

多分佐藤さんが甘つちよろいのもそこら辺の真つ黒事情を処理してくれてるからなんだろう。

そして怪しい。佐藤さんは気づいてなさげだがコイツは悪役とか云々より隠し事が多そうなんだよ。

「……………そうなのか?」

「うん、重桜の多分えらいお方だよね？」

「いえいえ、其処までではありませんが」

プライズちゃんに腰を曲げてはにかんでくる。お、何だ俺に喧嘩打ってんのかアンタ。

うちの娘はまだやらんぞ。俺が納得したやつ以外には渡さん。

俺だって同類では有るが、娘を“管理”しかねない奴は駄目だね。

——にしたってコイツ、マジで何考えてるのかがさっぱり分からん。

「今紹介がありました但が改めて。レディエンタープライズ、私は櫻井です」

「今回の温泉旅行も、私が招待したのですよ？」

何でさらつと俺悪い人じゃないよみたいな主張してんだこの人。っていかむしろ怪しまれるわ。

意外と抜けてる？

——やっぱり怪しいんだろうな、紹介を聞いてもちよつと警戒の取れないプライズちゃんを見ながら溜息をつく。

「どうしてこう皆さんに警戒されがちなのでしょうか……」

「すまない、失礼な態度をとるつもりはないのだが……」

お互いに萎縮しちやつたよ。意外な反応が起きる組み合わせだな。

——じゃなくて！

咳払いをしてこの妙な雰囲気吹き飛ばす。

「おい櫻井さん、これはどういう事だ？」

「どういう事だ、と言いますと？」

何しらばつくてんだよ。

「何で周りに知らない人間の気配がしてるんだよ、デカイ旅館でもないのに数がおかしいぜ」

「——ああ、気づいてしまわれましたか」

櫻井の笑いが急に作り物臭くなる。もう色んな化物もどきは見てきたつもりなんだが、コイツの急に人間性の剥がれ落ちるような瞬間は見てるだけで背筋が震える。

プライズちゃんも本格的に警戒してるらしく、気付かれない程度に

腰が落ちてる。何かあつたら最悪殺す構えだな、コレ。

「……………申し訳ありません、今回の件というのは——私共の抗争に巻き込んでしまうものです」

「本当は貴方がたを巻き込みたくはないのです。もしもお二人にもしものことが有ればを思うと、メリットが無いのもお分かりでしょう？」

ああ、そうだな。俺もそう思うよ、俺らに危害が加わればユニオンと重桜——最悪、アズールレーンvsレッドアクシスの構図が完成する。

櫻井は何を考えているか分からないが、佐藤さんの話を信じるなら愛国心は本物だ。無闇に国を潰すのは本懐ではないだろう。

「じゃあ何で俺達を連れてくる縛りを設けたんだよ」

プライズちゃんを手で制する。何というか、コレは危険なパターンじゃない気がする。

最初は俺に正気なのかという顔をしていたが、俺が眼で

『最悪顔面殴ればなんとかなる☆』

という超適当なアイコンタクトを送ると警戒を解いた。これで良いのかよマジで？

「今回狙われているのが、彼らと貴方がた——二つであるためです」

「……………話が掴めねえな、部屋で話そう。佐藤さんも呼ぶし、艦も傍に置くが勘弁してくれよ」

仕方がないことですので、とニツコリと微笑んで返される。

——俺らが遅いからと戻ってきた佐藤さんが櫻井を見てびっくりしていたが、どうやらサプライズのつもりだったと本人からは説明された。

あの、ユニオンのにはサプライズどころか奇襲なんですがちよつと遊び心有りすぎない？

「それでは、まずは私が説明するべきですね」

ホントそうだよ、佐藤さんガツガチなんだぞ。こういうの慣れてない可哀相な人粹なんだからさっさと説明してやってほしいぜ全く。机の周りに櫻井、向かい合う形で俺と佐藤さん。それぞれの隣に秘書艦。要は「お前の首を何時でも飛ばせる」という構図にさせてもらった。

櫻井はちよつとへこんでいたが本当に仕方ないことだと受け入れた。警戒されるの苦手なんだな、警戒心ゼロの佐藤さんが良くしてもらえるわけだ。

「申し訳ありません、今回は完璧に私のミスです」

「現在指揮官のお二人は狙われています、直接的に言うなら『アズールレーン』との抗争を望む集団』にです」

佐藤さんが泡吹いてるけど!? これは不味い、一般人には刺激が強すぎる内容だったか〜!

「さ、佐藤さんしつかりしろ」

「指揮官落ち着いて、最悪私が守るから!? ね!？」

ちやつかり私が守る発言。何とも言えないこの気軽さは素晴らしいもんだ。

「イノチ、ネラワレテル。コワスギワロタ」

「アカンこの人メンタル雑魚すぎる」

駄目だなこれ、もう瑞鶴が看病始めちやつたよ。膝枕良いな、あの太腿だろ?」

こつちもしてくれないかな——あ、スイマセン真面目にやります。

佐藤さんがしそうな質問とかもしないとな、この人に今死なれても利害的にだって困る。

「……………気を取り直して、じゃあ俺が質問するぞ」

「どうぞ」

「俺が狙われるのは分かるぜ、殺せば即戦争だ。でも佐藤さんは何でだ?」

それは……………と櫻井が説明しにくそうな顔をする。何を隠してるんだ、俺の目を見て話してもらおうかな。

俺は眼に変な迫力があるらしいからな、実際眼つてのは相手の印象として占める所は割りとデカイ。

「……………詳しく言うことが出来ないのは申し訳ありません。簡単に言うと、重桜内での派閥の問題とお捉えいただければ」

「というとアンタは温厚派なのか？」

「ええ、一応は」

一応は？ 何か意味深だが、あまり深く捉えすぎるのもアレか。此処でパパッと明言されてもそれはそれで胡散臭い。

——つてか佐藤さん大丈夫かな。何か瑞鶴がうちわ仰ぎ始めたけど顔真っ青だぞ。

「今回のコレは囮作戦——と言ってしまえばそうです」

櫻井がそう言うと言を閉じて、静かに頭を下げる。

「ユニオンの指揮官に対してこれは許される行為とは思っておりません」

「責任問題は全て私にありますので、どうしてもというのならこの首でござん頂けないでしょうか」

其の顔付きに嘘は感じない。本当に俺が殺そうとしても抵抗をしない、それが分かるくらいに体に力が入ってない。

最初から胡座なのはそういうことか。ユニオンでは足を組んで話すのがすぎさま攻撃に移れないという意味でのマナーになつてるが、その重桜版だ。

抵抗はしないんだろう、本当に。

「……………もう仕方ねえよ、小野」

「指揮官、大丈夫なの？」

手を振って顔面蒼白なまま、佐藤さんが起き上がる。

「俺も重桜だから言える立場じゃないんだが、櫻井さんはそつちの安全を確保するためにもこうするしかなかったんじゃないかと思う」

「この人は胡散臭いかもしれないが」

「佐藤さんにまでそう言われてしまいますか」

櫻井がちよつとシユンとなる。何かアンタつて意外と人間臭いな。

「ちよつと黙つててくれ、真面目な話だから」

それに珍しいな、佐藤さんが庇うのは。

いつもなら『俺は無関係だからそこは頼むぞ』とか超逃げ腰発言するのにな。ホント、転生者の中でも逃げ腰レベルは言っちゃ悪いが度が超えてると思う。

「胡散臭いが、悪い人じゃねえんだよ」

「特に恨みもない奴をハメようとか、そういうタイプじゃないのだけは俺が保証していい」

櫻井が何か眼潤んでる。うーん、道具扱いつてわけじゃないんだな……ちゃんと信頼関係みたいなのが有るらしい。

佐藤さんはまた寝込んでしまう。無理ばかりするからまた顔色悪くなってるし。

やたらと黙秘を貫くプライズちゃんにちよつと尋ねてみよう。

「どう思う?」

「私は指揮官の武器だ。武器に問いかけてどうする」

俺が振るい手で、彼女が武器。その構図はいつものこと。

完全に間違っているのに、一番効率のいい立場関係だ。

——まあ、プライズちゃんと意見がぶつかったりしても困るし、この態度が正解なんだろうな。

上手く振るえば上手く殺せるし、下手に振るえば無闇に殺す。

そのプレッシャーは俺がだらけた脳味噌を引き締めるのに相応しい発想であるし、彼女はそうであるべきだと常に言っている。

「……………そつか。ありがとう」

「私はまるで具体的な意見は出していない」

それが大事なんだよ。言葉に出さない信頼が有るからこそ、俺は行動に責任を持つべきであると気付かされる。

この関係性はきつと間違いで、佐藤さんの思うように対等であろうとするのは至って人間的だ。

俺はそういう意味では主人公じゃない。この解決できない複雑な問題を放置して、その泥沼の中での生き方を見出すやつは主人公じゃない。

ある意味、佐藤さんみたいにそれに足搔いて行くべきだったのかも
しれないと今では思う。

いやだいやだと叫んで、でも駄目なんだと気づいて、それでも何か
今とは違う着地点を見出すべきだったのだろう。

俺は、彼女の優しさに甘えつぱなしなのだ。それを構わないと許し
てくれる相手に、甘えている。

「いつもそう言ってくれるから、俺は今此処にいるんだと思う」

俺は沢山の失敗を知っていて、数えきれない成功を見てきた。

失敗であれ、成功であれ武器であると言い切つて、俺についてきて
くれる彼女が居るから。今の俺は主人公のように振る舞っているだ
けだ。

目を背けることを利用して、上手く利用されようと振る舞つてくれ
ているからだ。

「……………そういう話は後で聞く、本題に戻つてくれ」

あ、顔に出てないけどこれは照れているな？

まあその通りなので、息を吐いて表情を整える。

「……………よし、櫻井さん」

「今回は、アンタを信用する」

櫻井の顔がぱつと明るくなる。ラスボスだったり小動物みたい
だったり掴みどころのないやつだ、全く。

——まあ、でも佐藤さんの眼は其処まで間違つてないんじゃないか
な。

それに、今櫻井の首を切り落としてもそれはそれで問題だし。そも
そも無理な相談だったな、色々。

「有難う御座います」

「まあ客観的に見てアンタ殺してどうすんだつて話でも有るからな」

戦争の火種だ。それこそ抗争してる勢力の思うつぼだろうし。

——これを最初っから分かつてないはずもないんだが、今回は見逃
そう。何でも突っかかりやいいつてもんでもねえ。

佐藤さんにカッコいいところを見せたかったとか？ いやいや、そ
れはねえな。どんだけ佐藤さん好きなんだよつて話だし。

「で、俺らはどうすりゃいい」

「佐藤さんの予定通り混浴で皆だんご大家族でもいいが」

俺の発言に艦のお二人がギョロリとして、佐藤さんの顔が完璧に死んだ。

反撃するタイミングは今だよ、死んでもらうぞ佐藤。

「ちよ指揮官!? 混浴ってどういう事よ!」

「いやそれはですね〜……………あ、でもヘタレ君も(最初は)一緒に入ろうと画策してたぞ」

「なっ!? 本当なのか指揮官!」

ああこの野郎、微妙に語弊のある言い方しやがって!?

つてか佐藤さんが膝枕から叩き落とされた。

「ぐはあ! 痛い痛い!」

鼻引っ張られてる。ざまあみやがれ。

「ち、違うんだプライズちゃん! 俺は辞めようって途中から言ってたんだよ!」

「途中まではそれ目当てだったのか?」

「ア、イヤソレハ」

やめろその何か察したみたいな目線。違うんだ俺は本当に温泉楽しんでほしかったんだマジだつて!?

途中までだから、途中までだから!

「な、なあ櫻井さん!? 俺がそんな事考える奴に見える!」

「え、私に振るんですかこの流れで!」

もうアンタしか居ねえんだよ頼むよ。さつき見逃しただろ、何か上手いこと言ってくれよ。

「え、えーと? しかし男性というのは常に女性に良からぬことを考えているものではないのですか?」

「何でアンタ他人事なの!?! すっげえ株が落ちちやうぞこれえ!」

何でまるで自分是对象外みたいな言い方なんだよ、アンタも一緒に崖に落ちてるからね今。

ああもう滅茶苦茶だよ。

ヴァイオレンスアワー②

「缶コーヒー欲しい？」

「ヘンタイからの施しは受けないわよ」

わお手厳しい。人間誰でも間違いを犯すものだぞ、俺は特に。

——しっかし碌でも無い事に巻き込まれた。櫻井さんは派閥闘争だとは言ってるが、実際は何処までホントかも正直分からん。

ああキモチワル。いろ〇す飲んでスツキリしよう。

「あ、クソ。テンパって百円玉も入れられないぞ」

「取り敢えずそれ百円玉じゃないから」

相当おかしくなってますね俺。あ、これゲーセンのコインじゃねえか、ゲーセン野郎あるあるか？

ようやつと百円玉にありつけた自販機くんからお礼のいろ〇す。ゴトリという音に小さく反応してしまうのはもうしょうがない。

——瑞鶴はピリピリしている。話の抑揚こそいつもどおりなのはこつちに気を遣ってるんだろうが、あちこちに飛んでる視線に殺意じみたものが有る。

俺はそういうのを見たことがないからちよつと怖い。

「つてか瑞鶴飲めつて、お前此処に来るまでに水分摂ってないだろ」

「……………まあそうかな」

さつと受け取つてすごい勢いで四分の一ほど飲み干す。

やっぱ喉乾いてたんだろうね、相変わらず目つきは険しいが飲んだ後にはちよつとだけ顔が綻んでいた。

受け取る。

「もっと飲んでも良いぞ、これからそつち忙しいんだし」

「お腹タプタプになっちゃうでしょ」

「デブになるってこと？」

顔も見ずに頭を叩かれた、上体ごと体が落ちる。

だつて普通そう受け取るだろ。

「トンダ暴力美少女だぜー！」

「変なことばかり言ってるからでしょ、結構気が抜けないんだから

ね今」

あつそ、俺はそれを自覚したら倒れるからこのテンションで行ってるんだけどね。つまり夢見心地で生存しているということだ。

アレだな、疲れとか忙しいとかでテンションがハイになって色々麻痺ってる状態。ふと冷静になった瞬間にまたSAN値チエツク入るんじゃないかなあ。

「だからって常に刀に手を添える必要はなくね——　　ぷはあ、生き返るう」

やっぱり天然水とかが一番ですよ。ジュースは甘えだな、実際甘いし。

——ふとこつちを見た瑞鶴の目が白黒する。

「え、飲んだの」

「は？ そりや買ったんだから飲むだろ」

「え——ええ!？」

そんな焦ることかよ。俺はお前の腰の鞘からするりと抜けていく刃が煌めいてる方に焦ってる。

え、何。殿中、殿中でござるぞ?・

ヤベえよ半分以上抜いてる、何で涙目なんですか!?

「もうアンタ殺すしか無いじゃない!」

「それお前が死ぬフラグじゃねえかあ!」

というか年上に向かってアンタとは何だ、わしはそんな子に育てた覚えはありません!

——完全なる死亡案件かよ!? ヤバイ、(輪廻転生に)達する達する!

ああ。舞い降りた名推理に、急に手をポンと叩いた。すげえスツキりしたんだもん、ついやっちゃうよね。

「間接キスね、あつ成る程」

「今更気づいても遅いのよ!」

「もう歳の的に気になってないんだってすまんかった!」

「子供っぽいって言われてるみたいで尚更腹立つわ——　　ツ!」

もう人斬り抜刀齋に変わってしまった瑞鶴に襲われる直前に

「イチャコラしてないではよ戻ってこいやアンタラ！」

と扉を開けたママに怒鳴られた。ごめんなさい小野ママ。

「ママじゃねえから！」

「なぬ、読心術か！」

誰でも分かるわと怒鳴られた。まあ瑞鶴がギリで止まってくれたから正直ナイスタイミング。

「佐藤さんも艦との関係は良好のようですね」

何いってんだこの人。ってというか水買いに行ってる間に部屋から出ていつてるかと思ってた。

「それは殺し愛的なニューアンスで言ってるんですか？」

っていかか今日の皆は言葉通り暴力的だよなあ、何なんだこの妙な空気感。また暴力系ヒロインが流行りだして作者が乗っかってる？

いやいや、もうアレはハヤランテ。

美少女もリアルを呑む時代。多少はリアリティに反さない面が要るんですよ——ってこの話ある界限では世知辛すぎるのでは？

「そうよ、指揮官との関係が良好って目が節穴じゃない？」

「節穴どころか色眼鏡じゃね？」

「それよそれ」

「やっぱ仲いいなあ、佐藤さん良いな——ああゴメンて、隣の芝生は青いんだよ！」

ちゃっかり浮気しようとしてるやつ居るんだけど。瑞鶴は何やかんや言うことを聞いてくれそうだし好きにして良いんだけど、エンタープライズ可哀想過ぎるぞ今のは。

無い物ねだりってもんだ、十分良いじゃないか。

「瑞鶴よりよっぽど堅実な嫁さん貰つといて贅沢だなあ、ヘタレ君は」
「私は嫁じゃない！ 何なんだ、全く……………」

また怒られた。っていか窓ごしに声聞こえてるんかい、ほんとに見張ってるのかあの娘。

変な線を引っ張る才能ばっかり目覚めていってボンファイア。

「そうだぞ、俺の嫁だけどうせならもつと良い所に嫁いでもらわねえと」

「多分ヘタレ君の言ってる嫁と俺が言ってる嫁は違うね、うん」

何お前、この期に及んで萌えとか感じてるのか？ 眼の前に居るとそうはならんと思うの。

——まあ、言わんとする事自体は分かる。

「そうだなあ、瑞鶴って男選び下手そう。俺が選んでもいいぞ？」

「さすがにセクハラよ、指揮官」

くっそ手厳しい。ガード堅い。

「恋愛クソザコ幸運空母のくせに」

「佐藤さんまだそれ言ってるんだ」

いつまでも言い続けるからな俺は。二次創作設定を気づけば公式設定と同じくらい浸透させてやる、エンタープライズと対比されて苦しむ瑞鶴二次創作の未来が見える見える。

俺は千里眼スキル持ちらしい。

「というか夜中まで騒いでたら良いってどういうこと？」

小野と櫻井さんの厳粛な審議の結果とは聞いたけど、何か意味が分からん。

っていうか半分気絶状態だったし、話も瑞鶴から聞いたのはかいつまんだ感じだし。

——櫻井さんが殺されに行ってる時は流石に一瞬目が覚めたけど、まあアレだね。防衛本能的なやつ。記憶があんまりはつきりとしてない。

「佐藤さん、それはあんまり難しくない話だよ」

「そうなんだ」

でも俺って戦闘とかからつきしだから分かんないよね、何というか「セオリー」が無いと分からんだろうさ。

「やつこさんは俺らが寝静まったら殺すでしょ？ でも寝てないから襲われないんだ」

「はあ。何で？」

「窓の外で見張ってるエンタープライズさんが怪力だからね、10人

ぐらいはバツバツバツなぎ倒す——オホン！」

あ、また窓の外から見られてた。ずいぶん尻に敷かれてんなあ、良い嫁さんだぞホントに。

「うちの素敵なレディが目を光らせてる間はアッチは勝てないと踏んでるんだよ」

「さすエン」

「さす〇にみたいに言うな」

さすエン。当方が大変お世話になっている最強のサブヒロインですからね、やっぱさすエン。

「それに、私だつて丸腰で来る程ではないですよ」

突然櫻井さんが横入りしてくる。実は小動物的な要素が強いと判明して一瞬ほっこりしたけど、アンタが居なけりゃこの状況は絶対生まれないんだよなあ………実質黒幕だ。

「私の周りには誰も置いていませんが、彼らを囲む形で軍を配置してあります」

「何でちやつかり自分まで囷にしているのかはマジで分からんな、これが重桜流つてか?」

確かに小野の苦言は最もだ。指揮するべき男が囷なんて間違いなく現代の軍略ではおかしい。

「作戦の成功の為には、時に自分ですら駒にするものです」

「脚本作りに必要なのはセオリーではなく、全てを投げ捨てた成功率ですから」

アンタえらくあの言い回し気に入ってるんだな、俺は適当な例えのつもりだったんだが。

——しかし言われてみりゃその通りだなあ。

集団が成功したいなら身分も使って命を賭けて。為政者の鑑みたいな台詞だと思うよ、暴君になる可能性は低からず有るように俺は思えるが。

「櫻井さんが死んだら（俺の安全とか特に）困るから頼むよ」

「勿論ですよ、死ぬために生きてる訳では有りません」

——じゃあ何で生きてる。とは聞けなかった。

ちよつと怖い。なんて答えたつて信じられないし、でも信憑性を帯びてる返しをするんだと思うよ。

「それに貴方だけに業務を任せるのは、ちよつと不安ですからね」

「おいおい俺は頼りにしてんのにデイスるとかさすが櫻井きたないぜ！」

まあ身の安全のためだけだ。実際業務が増えるのは怖いな、普通にこなせないかも。

「つてかエンタープライズはアレで良いのか、何か一人蚊帳の外で」

「俺は正直怖いからアレでいいです………」

「アレで甘えてるつもりなんだと思うぞ、個人的な見解だけどさ」

ゲームの頃から我儘を言わないからなあ。我儘に振る舞ってもらえるつて相当だぞ、俺では一生拝めん絵面を一杯知ってるお前は素直に羨ましいぜ。

——まあ小野くんは敢えて一步距離を置きたがってるから、俺がどんだけ「このエンタープライズは素晴らしいんじゃないかな!？」とオタク特有の早口ムーブで畳み掛けても駄目なんだろうな。

「いやぶつちやけるけどさ、偶にプライズちゃんに見捨てられないか怖い」

「おうおう惚気んな鬱陶しい」

言動をちまちま気にしていると俺みたいになるぞ。でつかい所で間違えて細かい所間違えないより逆が良い。

「アイツ私とご飯食べてる時、小野さんの話しかしてないよ」

「へえそうなんだ〜！ 一緒にご飯を食べるとは仲がいいね瑞鶴君！

指揮官は嬉しいぞ！」

いだあ！ 耳引つ張られた、デジャブい！

「私、扉の外で見張ってるから」

「ああ悪かったつて、冗談だからなんとか笑って流してくれよ」

小野から情けねえなあと言わんばかりの視線が飛んでくる。お前にだけはそんな目で見られたくない。

例えワカメに嘲笑されてもお前にだけは勘弁だ。

「そういうのじゃないわよ、実際アイツだけにさせると効率も悪いし

仕事量が均等じゃない」

「……………成る程ね、まあやりたいようにやってくれ。俺はせいぜい此処で——」

バッグから敷かれた布団に投げつけたのは——トランプ。

「これで夜を明かしてみせるからよ」

「佐藤さんって偶に高校生みたいな事考えるよな」

「分かります」

二人揃ってなんでい、何も無いよかマシでしょーが！

「呑気よねえ、指揮官は」

「お前が守ってくれるんだろ？ 一応信用してんだよ」

何やかんやと最後の 一線で必ず踏ん張れるやつってのは何となく分かる。

——まあ、希望的観測でなけりや良いけども。

「——あつそ」

「さて、男だらけのトランプ大会だ」

「アレ冗談じゃないんだ、ちよつと格好いい嘘をついたぐらいに思ってたんだけど」

俺がそんな主人公的な気を遣うように見えるか？ 見えるころには俺の転生人生は終わるよね。

「よつしやじゃあこれから勝敗数えて一番負けたやつが最初に混浴覗こうぜ」

「すげえアホっぽいな佐藤さん」

「実際バカだよ俺」

俺はそれでも混浴に入ってみせる。

「何が何でも俺は瑞鶴のボディラインが見たい」

「案外うまく夜を明かせれば見えるかもしれない。ただしその頃にはあんたは八つ裂きになっているだろうけどな」

「お前もしかして完了形態さん？」

「完了してない絶賛成長中の変態さんですが」

知ってる。っていうかお前腕つぶし強いのか？

チエリオー！

——櫻井さんどうしたんだ、何で固まってるんだ。

「え、どしたの櫻井さん。敵襲？ 殿中ですか？」

「いえ、その——他人とトランプをするなんて随分久しぶりだと思ってる」

まあそりゃあね。俺達みたいに大学生みたいな馬鹿騒ぎばかりしてる大人も少なからう。

大人になると見え過ぎちまうから、何でも気楽にできなくなる。気楽にできないとどんどん息苦しくなって、こんな下らないことも遠くなっちゃう。

——あの会社が嫌だったのはそういうのを呼び起こす当たり。なんかムカつくというのも十二分にあつたが、何より気楽さを失わせる所。

転生者は良くも悪くも自分の生には無責任だからこう生きていくんだらうねえ。

考えすぎて頭痛い。また膝枕してくねえかなあ。

「んじゃあ肩慣らし。俺が勧めるのは王道に行く——スピードですかね」

スピードは良い。頭使わないからな、物理で相手のカードをへし折れ。

「アレ途中で若干相手の手を殴りに行くから駄目じゃね？」

「分かる分かる。何か自分のスピード上げるより相手のスピード削ぐ方に行っちゃうよな」

クソ、コイツ頭を使わせようとしてやがる。こんな状況でそんな頭使って何が楽しいんだよ！

「はいはい、小野也人はポーカーを推します！ セブンカード・スタツドな」

「くっそ難しい単語に櫻井さんがパンクしてるんだけどどうすんのへタレ君」

この人遊び慣れてねえなあ。

「か、勝った………は、はははッ！」

櫻井のトチ狂った笑い声。

朝日も登り始めた最中、男達は実には下らない戦いを続けていた。

「クソォー！ 最後の最後で裏切ってくれやがってこの櫻井イ！」

佐藤が畳を叩いて悔し涙。お前何でこんな下らないことに本気になつてるんだ？

どうやら賭け事に圧倒的に強い小野相手に二人で悪戦苦闘していたようだった。にしてもこんな明らかに怪しいやつと組む佐藤にも問題はないだろうか。

「いやアンタラ仲間内で揉めて見苦しすぎんだろ………結局俺一位だし」

「やかましい！ お前が天然チートなのが悪いんだい！」

——何でふつつーに俺ら二人相手で勝つんだよお前は！

そりゃโป๊กเกอร์で組むメリット無いからだと思っただが私が語り手それを言っても仕方がない。

佐藤がトランプを投げて絶叫する。

「何で俺が行かなくちゃいけないんだ——ッ！」

「いや佐藤さん自身がそう設定したんでしょーが」
全く小野の仰る通りである。

そんなバカバカしいにも程があるやり取りを二人で繰り返していると、突然に櫻井に無線がかかってくる。

「ああ、私だ——ええ!? 数時間前から駆除済みだと!? 何故私に言わないんだ——え、私が返事をしなかった?」

「何してんだ櫻井さん」

櫻井が素で謝っているのを見ながら二人は「コイツ遊ばせるところくなことにならないな」というアイコンタクトを交わす。

かなりの平謝りで謝った後、静かに無線を置く。

「………では佐藤さん、オペレーションSを執行しましょう」

「嫌だ、俺は嫌だあ！」

櫻井の真つ黒い笑顔に駄々をこねて逃走しようとする佐藤を小野が襟を掴んで捕まえる。

佐藤がヒツと情けない声を上げながら顔を見ると——櫻井の比ではない、ドス黒い微笑を浮かべた小野がこちらを見ている。

——やべーやつに火をつけてしまった！

一番誰がやばい奴かを彼は見誤った。

「いっぺん——死のうか？」

「いーやーッ」

!!!!!!!

「ふう……………」

ちやぷり。アイツが湯船に浸かる音がした。

私も体を軽く流して湯船に浸かる。ひたりと湯に触れる足から体がぞわぞわとして、何だかいつそ心地が良い。

体全体を沈めこむと、芯から温まって何だか軽い高揚感。労働の後の風呂はいい、なんて指揮官が言っていたが本当だったらしい。

「聞いた？ あの三人、夜通しトランプしてたらしいわよ……………」

全く呆れるわ。一応狙われてる立場だって自覚は有るんだろうか。

私が今後を憂いて溜息をつくのとは対照的に、エンタープライズは外にまで響きそうな大きな笑い声。

「相変わらずだな」

「何時になったら大人っぽいところを見せてくれるんだろうねアレ……………」

何だか年の離れた大人だという感じがしない。

頼りないと言うか情けなくて、子供っぽいと言うか適當過ぎる。夜通し廊下とにらめっこだったコッチの身にもなって欲しいと言うか。

「アレくらいが丁度良かったりもするんだ。堅苦しい軍人ばかりでは

世の中が上手く回らない」

「そりやそうだけど………」

それだと私達は貧乏くじってことになるだけだ。

——いや、別に指揮官が特別嫌いなわけじゃない。むしろ割と相性はいいほうなんだと思うのだが、それでもあの偶に見せるとんでもない行動には驚かされてしまうというか。

まあ、コイツの指揮官も中々だけど。

「小野さんも指揮官と意気投合してるし、アンタもユニオンに居る時は大変でしょ？」

「まあ否定はしないと」

あまりよろしくない記憶でも有ったのだろう、湯船から手を出して頬を搔いて力のない笑い。

「私は指揮官が好きだ。彼もそれを迷わず私に言ってくれるだろうし、信頼関係という言葉にすると少し堅苦しいが——ともかく理屈ではない関係がある」

「サトーも少し逃げ癖は有るが悪い人ではないだろう？」

まあそれはそうだと思うけど。

ちよつと引くぐらいに逃げ腰な時は有っても、何というか——
何だかんだコツチのことも考えてるし。

多分理由を聞いたら『中途半端な情』とか『自分が納得できないから』みたいな返事をするんだろうし、それで事実な部分もある。

でも、それでも行動が表す限りは

「そうね、まあ良い人なのかな。あんまりそういう考え方で関係性を作らないけど」

「ではどういう考え方だ？」

「直感よ」

らしいな、とクスリと笑われる。何だかいつも妹扱いされてるような気がして気に食わない。

こういう時は仕返ししてやるに限る。

「ま、明らかに上司との関係に恋愛沙汰持ち込んでるヤツに笑われる筋合いはないけどね」

「なっ!? だから違うと——」

「いや、理由つけて胸とか押し付けちゃって白々しい。露骨なのに小野さんも煮え切らないと言うかねえ?」

怖がってるのかな、進むことを。

今の関係が大事だから、変に壊したくないというのは分かる。私だって指揮官の距離を不用意に壊したくはない。

だがこの場合はちよつと違う。

「アンタ誠実なのが望みとかほごく割にはこういう時はハッキリ言わないわよね。言葉にしないと伝わんないんじゃない?」

「大きなお世話だ!」

子供みたいに拗ねてしまつてそっぽを向かれる。純情と言うか、根が普通というかねえ。

案外私より年相応な部分が多い。つていうか私が偶に妙に変わつてるのかもしれないな、別にそれがどうというわけでもないけど。

「顔もスタイルもいいわけだし、無理やり襲っちゃえば? ソツチのほうが早いわよ正直」

「えげつないことを言うな………と、というかそれこそ不誠実ではないか!」

まあ他人事だしね。ちらりと湯船の奥の肢体を覗く。

「いや、私が男だったらアンタみたいな女に襲われたらもう流れで

——」
「も、もう終わり! この話は終わり! 良い!」

何か素になつてる、初心よねえ。精神年齢で言えば20は越しているでしょうに。

まあそういう所があるから小野さんも躊躇うのかもね、土壇場で拒否られたらシヨツキング過ぎるし。

——うーん、イマイチピンとこないけどそれでも結構クルわねそれ。

「ま、とにかく頑張んなさいな。何か見てて焦れたいし大真面目に体に訴えるのを勧めるわ、私は」

「分かった、分かったからもう辞めて!」

顔真っ赤っ赤、うわー楽しい。指揮官が時々遊んでたのも納得だわこれ。

エンタープライズが色々と限界を迎えて湯船から上がってしまった辺りで私も上がるうかと思つた時に

——ぺた。小さな足音。

「……………さて、グレイゴースト。ちよつと下がつて」

「な、何だ唐突に」

「いや、アンタは見られたらそのままテンパリそうだから」

音を立てないように湯船から上がる。エネミーはどうやらこの手の隠密行動のド素人のようだ、足音を消すなら足刀からゆつくりと足を降ろせと教わらなかつたのだろうか。

——まあ、あの人知らなそうだなあ。よくそれで来るもんだけど。

「ほら早く、一撃で仕留めたいから音はあんまり立てないで」

「何だ？ 本当に何をする気だ？」

気づいてないと言うより、それを想定してないのか。幸せな感覚を持つてるものだ、そのまま純粹に生きて欲しい。切に。

扉の前まで立っている。このへっぴり腰は——分かんない、どっちもへっぴり腰で来そうだし。

——よし、殺す。

思い切つて扉を開けながら回し蹴り。顔が見えると同時にタイミン
グで蹴っ飛ばす。

「何ホントに覗きに來てんのよこのスケベ！」

「ありがとうございますう!？」

指揮官だ。まあ予想通りだけど、タオル巻いてお風呂入る気満々
だったのは一周回つて最早感心モノよね。

——その後少し首が痛いとか言つてたけど、ぶっちゃけ自業自得
ある。

二章

七話

「あつつういー!」

冒頭で火傷。猫舌は辛いよ、ラーメンが伸びるまで待つなんて訳の分からん事をするこも有るからね。

飲んだのは珈琲。エンタープライズが持ってきていた数少ない私物だった気がするが、置いてあつた場所が執務室の机だった辺り、忘れたと言うより置き土産のつもりなのかもしれない。

あの二人はもう帰つた、というか朝起きたら居なかつた。挨拶もなしなのは急な用事でも入つたのかもしれない。ちよつと寂しいな。

正直二人共あんまり指揮官扱いしてくれなかつたのは辛かつた。まあ不快でなかつたなら何よりだが、俺つて真面目な性格のやつが見たらイラつくレベルの行動ばつか取つてるしな。

「瑞鶴、次氷入れといて! 熱い舌が、舌が!」

「相変わらず何か抜けてるなあ、次から入れておくわ」

何だかんだやってくれる辺り非常に楽。根がね、多分善人なんですよ。

ぼんやりとソファに座つている瑞鶴を見た。お前も冷ましてるじゃねえか。何がフーフーだ。

「絶対熱いつて思つてただろ」

「いや注意する前にあんな勢いで飲むから」

「仰る通りですね、何かすまん」

口直しに机の上の籐かごに入つたチョコを放り込んだ。こつちは多分小野、チョコにはちよつとした拘りがあつてねとか偉そうに語つていたのが懐かしい。お前の拘りより遊戯王のコンマイ語の説明の方が聞く価値有るつての。

つていうかこの味………何かおかしいな。まあいっか。

アイツは本当にどうでもいい話ばかりをしていた。あの『命令』の話がどれだけ理解してもらいたいと思われていた内容なのかも、短い

付き合いなから理解は出来てきた。

「にしても主人公だったな、アイツラ」

「指揮官の言う主人公って何？」

唐突にちびちびと珈琲を飲んでいた瑞鶴に尋ねられてハツとする。

そう言えば話したことがない内容かもしれない。

俺は当然のようにメタ視点で考えて予測を立てるとんでも転生者なので、主人公も結構そのままの意味と思われているんじゃないか？
「んーとな、ぎっくり言うとか何かを背負ったり捨てたり、造ったり出来る。もしくはその勇気がある人間かな」

「珍しく難しい物言いするね」

「別にいつもどおりになるーく喋ろうか？」

朝は何かテンション低いんだよな、よくわからんけど眠いのかね。

「じゃあかるーくして」

「はいはい、んじゃあ俺のつまらん主人公の定義について講義を始めよう」

机に戻って紙とペンを取って、瑞鶴に寄越す。

「お前の知ってる主人公かけ」

「正直マンガしか読んだこと無いよ？」

「それで良い、お前がどういう認識かを理解するのって重要だろ」

ルフィなのかナルトなのか一護なのかって事だな。同じジャ○プですら色んな主人公がいるわけで。

瑞鶴は妙に唸りながら書こうとペンを持つが、まるで紙と接触する様子がない。

「適当でいいんだぞ、直感的でいい」

「えー、余計に書きにくいな」

「俺は阿良々木君とか出てくるな」

これで読書は幅広いほうなもんで主人公の定義は広いことを知ってる。

クズなやつ頑張るやつ強いやつ一本筋の通ってるやつ優しいやつカッコいいやつ後ついでにバカなやつ。世の中色んな奴が主人公だ。皆自分分みたいなやつが主人公だと思いたいんだろ。だから皆

主人公に投影できるよう、種類も沢山なわけだ。

「分かんない」

「まあ良いや、じゃあ俺が会社辞めた話するぞ」

何で急にそんなという顔をされたが、これを語らずして佐藤というちやらんぽらんは紐解けないんだよ……。

アムロがちやんとガンダムに乗るべきとか、両儀式は一回死にかけなきゃならないとかそういう類で個人の形成に影響を与えたものだと思う。まあ自己分析の結果で言うと、だが。

「身構えんなよ、辞めた理由だけだから」

「前も言ったつけ、俺が残業代でないから辞めたって」

どうだったかなと瑞鶴が首を傾げる。

「主人公が何かと言うと、やっぱり何かを変えようと思うんだ」

「例えば世界を救いましたーとか、ナンカ一皮むけましたーとかさ。絶対に自己完結する主人公は居ない、特殊なタイプでは居るけどまあそれは置いとけ」

そういう例外についてお話すると色々ごちゃごちゃしてくるのはお約束。

「まあ要するに、アイツラが主人公っていうのは『捨て方を知ってるんだな』と思ったから」

「何かを守るためとか、成し遂げるためにこれは捨てよう、これはなんとか解決しようって出来る。凄いスキルだぞこれは」

確かに取捨選択は大人になれば覚えるよ？ だって俺らって大体は凡人で、拾えるのも捨てれるのにだって制限があるって錯覚を常に突きつけられるからな。

でもアレは違う。その凡人が定められたと思ひ込んでる物以上に柔軟に捨てて、拾って、それを可能にするための何かしら尋常じゃない努力ができるタイプだ。

「会社をやめた俺は主人公気取りだった。嫌なことをちやんと嫌って言えた自分カッケーなってちよつと思つたよ」

「でも違う。主人公ってやつは、その会社自体を変えるやつなんだろうな——って無職になってちよつと経ってから実感したよ」

俺が思い切っただけでは世界は変わらない。就職は厳しくて、あの会社の体制は変わらなくて、社員はそれを受け入れてる。

何か其れは気に食わなくて、でもそうだよなとも思うよ。俺がしたのは「自分のより良い環境へ出ていくこと」であって「より良い環境を作ること」じゃなかった。

それじゃ心は動かせない。作るぐらいの気概を持って立ち向かっていたら、思うところのある奴も出たかもしれない。

中途半端な決意じゃ周りは動かせない。「お前は出来ても俺は私は」で仕舞いが大抵。

「俺は逃げ出すまでは出来たけど、そうやって捨てる拾う作るっていうのがとんでもなく苦手」

「問題は逃げるし、最悪放置する。アイツらは多分、放置していても最後には解決しようって全力になれる眩しい奴らだよ」

「それが主人公ってやつだ」

俺の場合はしかも正解が選べないし、なおさら凡人。

「ふーん、意外と考えてるんだね」

「偶に真面目に喋るとこういう反応なの結構辛いんだぜ？」

日頃の行い、とだけ言って瑞鶴もチョコを食べ始めた。

全くその通りである————って納得してしまう辺りが主人公じゃねえんだよ。

でもこういう時にちゃんと聞けやっていうぐらい真面目に本気で反論するのが、俺にとっての主人公ということなのだろう。

「このチョコ美味しい」

「あのヘタレ君め、パッケージを置いてやがらん」

名前さえわかれば買ってやるんだがなあ、これぐらい。

「しきかくん、なんかしかいがぼやあつとする……………」

ろれつまわってないですよ、っテおれの頭もちょッとヤベえな。

瑞鶴は相当食ってたもんな、そりゃ机に突っ伏したくもなるだろう。酒とか慣れてる感じしないし。

「……これ、ウイスキーボンボンだわ」

俺は一個しか食ってないんだけどなあ、これ相当アルコール度数キツイぞ。

——ああ、カゴの底に書き置きが有る。

『酔っ払って勢いでラッキースケベをかます時用だぞ☆ 応援してるぜ』

「アイツ殺す……次会ったら問答無用で殺す………」

置き土産ですらろくなものではないのか、奴め。俺、なんか恨みを買うようなことしたっけなあ。

ってかラッキースケベって。俺は瑞鶴をそんな目で見てないんですが。

——お前みたいな公私混同どころか公私完全一致のやつと一緒にせんでくれ。一応部下だし、何よりこんな年下の娘を襲う趣味はない。

「やっべ、俺もちよつとクラつとする」

「でもこれおいしい………」

「おい、バカ。これ以上食うなよ！」

欲に弱いやつだな全く。まあ確かに美味しいよ、酒臭すぎるわけでもないしアイツのセンスは悪くないと思う。

食べる度に瑞鶴は段々と口がへニヤへニヤになっていく。むしろそれでまだ食おうと思うよね、俺はもう気持ち悪くなるが。

「なんかなきたくなってきた………」

「朝っぱらから泣き上戸に付き合わされるとか今日は厄日かよ………」

もうウルウルしてるし。コイツ五秒前の言動も忘れてそうだ、酒に弱いんだろうな。

——というかこれさ、絶対この展開を予測して置いてったよな。アイツラッキースケベとか推奨してくる柄じゃないぞ、まあ乗せられたら狙いそうな予想がつく辺りは流石ヘタレ君だが。

「なんでわたしアイツにかてないのよ〜！」

「知らねえよ、ベテランだぞアッチは」

机をダンダンされてもですね、年季の差を埋める才能なんて現実には有りません。

時間、労力、お金は等価交換ですからね。ついでに錬金術も等価交換らしいけどそんなものはこの世にない。

「大体、何でそんな拘るのよお前……」

「だって、だってえ！」

だってじゃありません。お父さんは理由を聞いているのですよ？

——個人には個人のペースが有るじゃないか。一応軍人だから、そこら辺の考えはシビアなのかもしれないが、それでも出来るペースと出来ないペースが有る。

身の丈に合わない事はしちゃいけない。

「お前はお前のペースで進めばいいじゃねえか」

「そりゃ下見りや幾らでもいるんだから、上見ても幾らでも居るんだよ。無理しないこと」

「だって、しきかんサボるんでしょ？ じゃあそのうめあわせはわたしがないと」

突然そんな事を言いだした。突っ伏して、何か不満げに。

不満は続く。

「そうじゃなくてもたよりないし。わたしがアイツぐらいできないとダメじゃない」

ちやつかりデイスられた。ちよつと可愛いと思った俺の純情を返せこの生意気娘。

——にしても扱いにくいやつだな。そういうことじゃないっての。

普通はそんな事言われたらやる気なくなると思うんだがなあ………見立てがまだまだ甘いな、俺も。

「お前も適度にサボれば良いんだよ、何でも自分で背負い込む方向に動くんじゃない」

やる側もやられる側も精神衛生上よろしくない。

俺も理不尽に仕事をぶん投げたくてサボってるわけじゃない。と
いうかサボりぐせ自体は本当はないし、多分真面目な部類だ。

——頑張れば頑張るほどに、碌でもない事に近づくことになる。

俺の無能を証明しなけりや俺どころか俺の下についた艦まで危険な綱渡りをさせられる。不本意なやつも出てくるだろう。

それは許されぬ。俺の嫌いなフェアじゃないことのオンパレードだ。努力には報酬を、忠誠には完璧たる指揮をだ。

それが成立しないから適当なんだよ。

「しきかんがまじめにすればいいだけじゃない！」

「おうおうそれで良いんだよ、自分で補填しようとかいう発想が間違ってるってこつたね」

俺のした行動のツケは俺が払わなくちゃならん。これは世の中の摂理だ。

連帯責任なんぞくそくらえ、この鎮守府は絶賛俺の独断で運営してるんだから全部俺の責任なんだよ。

「……………ねむい」

「もう寝とけ。運ぶくらいはしてやるから」

泣き上戸はストレス溜まりまくってる証拠だからな。そろそろ翔鶴連れてくるって聞いているから尚更焦ってるんだろう。

まあ別に翔鶴来るまでもうちよい時間があるって電話が朝に来たし、そう急ぐこともないだろう。

瑞鶴は必死の抵抗虚しくうつらうつらし始めた。

「まだきょうのしよるいがおわってない……………」

目を擦りながらぼんやりとした顔でそうぼやく。

「分かった分かった、それぐらいやつとくからマジで寝ろ。作業どころじゃないだろ」

「でも……………」

そのまま寝始めた。まあ無理だろうな、何か長持ちし無さそうなテンションだったし。

完全に酔いつぶれたと見てよろしいようだ。

——しかし、背負ったらダメだよなあ。何がと言わないがダメ。「うーん、お姫様抱っこ行けるかな……………」

取り敢えず瑞鶴をソファに転がして仰向けにする。全然起きねえ

な、寝るの早すぎるよねこれは。

しゃがんでまずは肩と膝裏に腕を突っ込む、すつげえ柔らかい。なんかの睡眠グッズ的安心感すら有るぞこれ。

——セーのっ！

「イダダダダ！ 腰が、腰があー！」

一息には無理だわこれ。もつとしゃがんでゆっくりやろう。

さて、まずは息を整え深呼吸。そして初動で腰に力が向かったらアウトなので微妙な位置調整。情けないが俺の実力はこんなもんなので仕方ない。

よし、もう一回。

「よい——しよつとおー！」

行けた行けた。ちよつと考えれば力なんて誤魔化せるもんよなガハハ。

さて、行こう。ちやちやつと行かないと清掃員の人に見られて「ついにお持ち帰りですか佐藤さん」とか生暖かい目で言われる。

何で俺あの人達にからかわれるんだろうね、従業員の誰も俺のこと指揮官って呼んでくれないし。

「お、重い……………」

美少女は軽い？ ウソつけ軽くても10kgのお米4つ分は有る。階段は命懸けだった。もう何というか、さつきから足の感覚ねえのよ。ポータルガンでも落ちてねえかなマジで。

まあポータルガンを撃つ手すら塞がってるんだけどね!?

——漸く寮舎まで辿り着く。確か瑞鶴の部屋は入り口からそう遠くない距離だった、筈。

「……………すう、すう」

マジで言うんだなこれ。種田梨沙も細かい収録させられて大変だ。

——そういや石川由依と種田梨沙ってどっちも京ア二主人公だな。声優的に先輩はコツチなんだから不思議なもんだ。

「全く、寝てる時は大人しくて良いんだけどもなあ……………」

顔だけ見れば可愛い。顔だけ見ればな、喋ってみるとやっぱ年下って感じがして異性としてはあんまり見れない。

小野はその辺どうなってんだろう、年下好き？

——まあでも一回人生やり直したら、ある程度精神年齢も肉体年齢と同期するのかもしれない。

それにエンタープライズの方が精神的優位持つてるっぽいし。尻に敷かれるダメ夫の絵面ばかり思い出すもんな。

「つてかアイツのことばっか考えるな——」

どれだけ知り合いないんだよ俺。可哀想だな、普通に。

「よし、ついたぞ」

問題は扉を開けるといふ苦行。執務室は足でゴリ押したが足まで棒の今は八方塞がりも良い所。

必死で足を上げてみるがあんまり上がらない。そりゃそうだ。

「ええ、どうしようかね……」

「一回下ろせば余裕のよっちゃんいかなんだが、如何せん地べたに下ろすのは——うんダメだよね」

荷物じゃねえんだから。

仕方ねえ、気合い入れろ俺の腰！

「どっせいー」

踵落としの要領でドアノブを下げる。そのままケンケンで後ろへ移動だ！

あ、腰が！腰がぶっ壊れるう！

——開くには開いた。瑞鶴を下ろす頃には俺も倒れている可能性が高いが。

「腰を言わずして何が転生者か！」

いやそんな理屈はないがな。

腰が悲鳴を上げるのを必死でなだめて一歩ずつ部屋に入る。

——部屋は男の子って感じだな。貼られたバンドらしきポスターに映るボーカルは何となくエンタープライズに似ている気がする。

やっぱお前実はアイツ好きだろ。

ベッドは簡素で目覚まし時計だけ枕横に置いてあって、机の上には何か——これ教科書だな。

「スポーツ好きの男の学生だな」

ぶつちやけそうだろ。しかもスポーツ用品置いてあるんだぞ？

——まあそんなどうでも良い女らしさのリクエストは木星へ投げ捨てて、ひいこらひいこら言いながら漸く瑞鶴をベッドに投げ込んだ。

ちよつとベッドから瑞鶴の体が跳ね返ったがまるで起きない。ホント寝たら起きないのな。

「ミツシヨコンコンプリート——腰イテえなあ」

ちよつと休むか。まあこれぐらい許してくれるだろ。

「……………痛いけど仕事せにやいかんよな」

時計を見るともう11時過ぎ。手こずり過ぎたな、腰痛いし仕方ねえけど。

横を見ても未だ熟睡中。此处で一休みしてたのは出来ればバレないほうが良いだろう、幾ら何でも部屋勝手に見られたってという現実を目前にすると恥ずかしいだろうし。

腰を擦りながら扉を開ける。

「瑞鶴、居たの？」

「はい？」

振り向くと見えたのはマリンブルーの青い瞳。絹に似たエンタープライズとも違う白い髪は————そしてその白い羽織は……………あれ？

もしかして櫻井さんのもうちよつと時間が有るって朝の電話、今すぐじゃないってだけで——今日には来るの？

「ア、イヤコレニハフカイジジョウガデスネ」

「キヤー！・ ケダモノよ瑞鶴！」

何嬉しそうに叫んでんだこのアマあ!? ちよつとウキウキしてるの俺には分かるからな!?

不味いな、言い訳できない。ネームプレートが部屋に貼ってあるもん。

「つてか妹があんな目やこんな目に遭ってる可能性を想定した上でその顔してるなら相当ヤベえやつだなお前!?!」

——ぶっちゃけ、この瞬間に悟った。

最初は翔鶴が良いとか言ってたけど、翔鶴が来たらもつと面倒くさいことになるんだなって。

まあ瑞鶴の部屋から腰擦って出てくる俺も大概なんだけど。

八話

過去を引きずるということを悪く言うキャラクターは数多く見てきたが、俺はアレに関して甚だ疑問だ。

いや、それが何時でも良い方向に好転するとか言う気はないのだが、過去を踏まええない人生とはつまり常に赤子のように生きるという事だ。

無理じゃないか。俺にはそれが出来る人間が想像がつかない、何度記憶喪失になれば良いんだ。

一歩歩くのは不安で、言葉一語は不定形、漂う匂いは不詳。常に未知に晒されるという訳で、そうなるのも難しければそう在り続けるのも難しい。

やっぱり多少それが失敗を招くとしても「見えない成功」が有る限りは、やはり多少は過去を引きずるべきなのだ。

過去がない存在。居るとするなら、きつとソイツは――。

「責任は取るものですよ、指揮官?」

「俺がヤベえことやってるみたいな言い草を辞めてくれませんかね?」

クソ、コイツがヤバすぎて俺が後手に回ってるだど? 意味が分からんぞ。

――俺が期待していた翔鶴はもっと、こうだな。俺に謎の誘惑をかましつつ何だかんだ有能みたいな小悪魔系のそれでだな……。

決して寮舎のど真ん中でマジで俺がポニテ女に殺されかねないよ。うなことは言わないはずなんだよ。

「指揮官――ホント?」

「いやマジじゃねえよお前も信じるな」

「いやだって」

「だつてって何だ！ 俺を何だと思ってるの!？」

「そんな肩持って警戒しないで、お前に欲情なんて多分死ぬまでしないから。」

翔鶴が明らかにニヤニヤしてるの見れば分かるだろうに。つていうか部屋に入って現場を目撃していたとしても、不法侵入でどっちみち翔鶴も中々ヤバイ奴になるだろ。

「というかジョークがブラックかつ下品だから辞めのような翔鶴?」

「ですが男性が女性の部屋からゲツソリとして出てくるというのはつまり——」

「待て、待て。後ろから刀を抜く音するから待て」

「チョロインかね君は。姉の言うことを信用し過ぎではあるまいか？」

このトンデモ少女の顔からは「ああ〜楽しい♪」とでも言わんばかりの愉悦が滲み出ているではないか。いやもしかして俺の信用問題なのかこれ。

「つてかお前まだ酔っ払ってるのか、そう言えば」

「そ、そんなことは……」

ほら、足フラフラ。さつきまで酔いつぶれてたわけだし普通だ。

「お前は寝とけ。後で事情は説明するから、先に言つとくと完璧に無実です」

「……………分かった」

ちゃんという事聞いてくれる辺り、目の前の人よりよっぽど良識ある。比較しちゃうと瑞鶴の株が爆上がりだな。

まあ確かに俺も今の叫びを聞いたら起きる。否応なく起きる、だが刀は抜かないと思うんだ。刀は魂だつて武士の皆さんお怒りだぞ？

怒りに任せて刃物は振るうなよ？

さて、と振り向くと翔鶴の顔が青ざめている。忙しいやつだな。

「まさか無理やり瑞鶴にお酒を吞ませたんじゃ……」

「何で俺はパワハラ変態上司のイメージなんだ!」

「冗談です♪」

冗談じゃなさげに言うんじゃねえよ。というか演技が無駄に上手

いんだよ、マジで引かれてると思った。

同じ種田梨沙でもえらい違いだ。どうやったらこれが姉妹だと判断がつくんだろうなあ……。

まあ姉妹ってあんまり似ないと思うがそれでも似ても似つかない。

「というか、いつから此処に来てた？」

「朝の10時からです」

「割とすぐ来たんだな」

何かどう解釈してもこの到着時間とは受け取れない言い草だったんだが。櫻井さんって説明とか下手なんだろうか、そういうキャラとも思えないんだが。

まあ別に早く来てくれても全然問題ないけどね。どうせなら一緒に手続きとかやってもらえると楽だし。

「——とりあえず腹減ったろ。何か作るかね、食堂に行くからついてこい」

「指揮官と二人きりは少し怖いです……」

「もうお前に遊ばれたりしねえからな」

ちえ、と軽い舌打ちが返ってくる。本気の舌打ちじゃないだけマシなのかもしれないが、それにしてもこの娘扱いににくいぜ……。

胃に穴が開く日は近そうだ。

「というわけで、お前はオムライスだ」

お子様にはお子様ランチだこの野郎。お前を女扱いなんか俺はしてやんねえからな。

——ご丁寧フラッグまで刺して結構真面目に作った。最近食堂の人が作る度に色々ご指導してくださって有り難いのだが、いやでもこの環境に慣れるのはそれはそれで問題だと思っただ俺。

嫌がらせに「ちやくにんおめでどう！」ってデミグラスソースって書いてやろうかと思ったが、流石に凝り過ぎなので辞めた。そこまで怒ってない。

「ええつと……これは、指揮官が作ったということですか？」

「見てただろうに、何か瑞鶴の評判良かったから初日の昼食はこうなの」

「はあ……」

結構普通に動揺しているらしい。確かにこんな事をする指揮官は俺ぐらいだと思っうね。

何というか——正直さつき遊ばれてたから、ちよつと一泡吹かせてやりたいとは思ってしまった。所詮俺も餓鬼よなあ。

——固まったまま動かないのでちよつと不安になってきた。もしかしてデミグラスじゃなくてケチャップ派？ それは流石にどうしようもねえんだが。

「どうした？ 食えない野菜とか有るのか」

「い、いえ。そういう訳ではないですよ」

何だかおつかかなびつくりな手付きでスプーンを手に取る。そんな不味そうかね俺の料理は。

「いただきます」

「どうぞ」

ゆつくり、やたらゆつくりな運びで漸く一口。

「……美味しいです、ね」

「ふーむ、評判は何故が良い」

結構真面目に「相手への思いを込める」的なアレで美味くなるらしい。『命令』に当たるのかそうでもないのかはよく分かんが、まあ美味けりや其れに越したこともねえよ。

一応食堂の人にも食べてもらったんだが、その思いを込めてる云々の流れは一緒だった。どうやら『命令』とかじやない可能性が高そうだが、しっかし原因がよく分からんよなあ……。

「どうせ余ったら食堂の職員さんの胃にボツシユートだから、好きなだけ食うといいぞ」

何だかそう言う中々の勢いで食べ始めた。食に貪欲なのは瑞鶴と共通なんだな、顔付きから反するがある意味姉妹らしいね。

ただ瑞鶴と違うのは髪が落ちてくるから、定期的に耳にかけ直す所。チラチラ映るうなじはもしかすれば魅力的なのかもしれんが、こ

うあざといと俺は釣られんのだ。

後何回でも言うけど、俺は艦を異性という対象で見れない。何歳差だよっていうね。

「見た目に忠実な普通の人、ですね」

「おうおう、失礼なことばつか言ってるど昼食を取り上げるからな」

今はこちらに決定権は有るんだよこの野郎。

「いえ、指揮官というイメージと違っていて驚いただけです」

「俺がマトモじゃないのは確かだ、まず指揮官を真面目にやる気がない」

翔鶴の眼がちよつとギョツとする。言いたいことは分かるぜ、もう帰りたいよな。

俺も帰りたい。母上の飯が恋しいよ……。

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

礼儀正しいんだな、意外と。いや見た目通りだが。

——食器をカウンターに置いた後、綺麗な所作で歩いてくる。育ちが良い感じはするよな、どつかの妹さんもこの淑やかさを見習ってくれ。

何だか言いにくげにお褒めの言葉が入る。

「あの、美味しかったです」

「そうか。言ってくれば——まあ、多分作るぞ」

気分にもよるが。疲れるし、何より食堂もちゃんと利用しないとこの人達不憫すぎるし。

別に食堂が不味いわけでもなければ、飛び抜けて俺の料理が優秀というわけでもない。何故かリピーターが来るのだ、あんまりやらないけど。

俺が圧倒的に美味いなら職務怠慢と割り切れるが、そんな「何となく」で食堂の人から労働の喜びを奪うのはアレすぎる。

「というかもっと気楽にしてくれ。俺が落ち着かないわ」

「普通に接してもらったのが初めてだったので、すみません」

うーん、その割には手慣れた小悪魔っぷりであるがなあ。
もしかして俺がイジられる才覚を持っている？ いや要らねえな
あそんな才覚。

——ついスルーしそうだった、嫌なことは認識しないのが人間だからな。

仕方ない所はあるが、こういう所をちゃんと拾つとかなないと後々大事なものを見逃しかねない。ちゃんと覚えておこうか、「初めて」——
——つてやつ

「俺の方針はフェアに行くこと。まあ達成不可能なのは理解してるが、一応そういう感じ」

「……………変な人」

「なあっ!? 誰が変な人だ!」

おい何が面白いんだよ!

「はい、じゃあちゃんと自己紹介」

執務室でゲンドウ座り。瑞鶴とはだいぶエキセントリックなエンカウンターをパフォーマンスしてしまったので今回はきっちりとな。

つていうか翔鶴とはすぐに喋れるようになったな。まあ出会い方がアレだと否応なく碎けると思うけど。

「第五航空戦隊旗艦、翔鶴です」

「よし誘導してやろう、一航戦の先輩はどう思う?」

「——「先輩たちを目標に頑張ります!」つてどう?」

「最高だ、お前をうちの鎮守府に迎えよう」

この下りがないと翔鶴らしくないね。

最強の毒舌小悪魔女、言ってしまうとそれが翔鶴だ。

顔に騙されちゃならない、清楚で優しいげなのはその顔までで中身は腹黒かつ毒舌家だ。ぶっちゃけ俺が苦手なタイプの女だが、まあちよつと二次元補正キツめだからそこはノープロブレムよ。

何で翔鶴が最初の秘書艦が良いとか俺思ってたんだらう、危険人物だよな。

「じゃあ俺の自己紹介だな」

「ケダモノさん、ですか？」

「分かったからもう勘弁して」

瑞鶴の前で言うのは特に辞めて欲しい。

「さて、名前は佐藤弘。座右の銘は『仕事より趣味』、指揮官は真面目にやる気がない」

「自分で言っていて恥ずかしくはありませんか？」

「いいや全くだね！」

何だかんだ最低限の仕事はしてるぞ、別にお前らの本分まで貶めようってわけじゃない。

功績を挙げられたら困るが、程々に頑張ってくれないと櫻井さんに怪しまれる。正直こつちもそんな調整するのは気苦労が絶えない。

出来る仕事をやりすぎてもいけないし、出来ない仕事を放置しすぎるわけにも行かぬのだ。

「秘書艦は翔鶴に任せたい。瑞鶴は何というか———こう、分かるだろ？」

「言いたいことは」

「うん、頑張ってくれたけどな」

如何せん武闘派に任せる仕事ではなかった。翔鶴は見た目通り要領の良いタイプだし、こつちに任せるのが適材適所というものだ。

———また書類溜まってきてるしな。何、何でも都合よく書類が増えてくるんだよ。

「っていうかお前も俺が指揮官やる気ないって言っても、特に突っ込まないのな」

「ええ、もう期待していません♪」

「酷いなあ」

十分ダメダメっぷりは披露したものの見切り早くないかな、もうちょっと見定めようぜ。ア○タカみたいにな

「———にしても、艦ってやつは皆おキレイなもんだ」

「女性なら誰でも良いんですね、こわーい♪」

「冗談でもちよつと傷つくよ俺も」

ううむ、調子狂うぞ。完璧に乗せられてしまっている。

瑞鶴もエンタープライズもだいたい初心者向けな美少女だから対応できてただけかもしれない、翔鶴とはテンポがつかみにくい。

「間違っても君らに手は出さんぞ」

最悪懲戒免職だぜ。というかそうじゃなくてもこんな若い娘に行くほど俺も落ちぶれちゃおらん。

——まあ『命令』とかいう便利チートが有る以上は……そういう事も起きてるんだろいうな。

俺には関係ない話だけでもね。まあ宜しくないよ、どんな作業であれお互いの承認は必要だ。

「面白くないなあ……」

「今面白くないって言ったよね」

「何のことでしよう♪」

何、積極的に襲ってきて欲しいの？

——いよいよどういいうスタンスで俺に接しているのか問い詰めようとした時、ダンダンと此方に走ってくる音が聞こえた。

「おい、佐藤さん！ ちょっと今大丈夫か!？」

ボタンと勢いよく開いた扉から、モニター管理室の安藤さんが飛び出てくる。

いつもは此処の監視をしている人で、艦が不穏な動きをしてないとか変な侵入者が居ないかとかをちゃんと見ておく仕事らしい。

此処が軍事施設だと思いきや出させてくれる役職の人なわけだが、本人は俺以上にフランクなおっさんだ。敬語は一応俺が上司だから、なかね。

「だから俺は指揮官ですよ安藤さん」

「いやそんな場合じゃないんだって!」

「ええつと……どうしたのですか?」

翔鶴から先に息切れた安藤さんに疑問を投げかけた。おおつと、意外とスイッチの切替はしっかりしてるんだな。

良かった良かった、あのテンポでずつと行かれると俺が困る。

「お人形みたいなちっちゃい子が海から流れてきたのが見えたんだよ

！」

「マジかよ絶対保護する！ 行くぞアンドウさん！」

「おうともー！」

そして俺らはバカである。何というか、俺の下に配属されてるだけ有ってマトモなやつは居ないのだ。

「……………やっぱりケダモノさんじゃないですか♪」

「お、俺は別にやましい気持ちはありませんからあ!？」

本当に無い。結構真面目にない。

「よし発見！ まずは人工呼吸、かな……………」

安藤さんが叫ぶ。ええ…………でも、ちっちゃい子にいきなり人工呼吸とか相手に酷といえますか……………。

安藤さんも若干申し訳なさげ。

——とか思いながらやたら足の早い安藤さんについていきながら浜辺に出る。翔鶴は俺よりも明らかに速いが、足の遅い俺を煽りながらだったので殆ど一歩前ぐらいの距離である。

さて、俺もとうとう幼女の顔を拝める——って。

「この娘は……………」

「なあ、本当に人工呼吸居るんじゃないのか佐藤さん」

「多分——要らねえな」

その姿は、背丈に似合わぬ身分の高そうな服に包まれていた。

袖のない荘厳な金の装飾の多い服は——ドレスかな。はつきりと分らないが、何か高そうなのは間違いない。イノセント・ドレスってやつだったら含蓄の深いもんだ。

紺のドレスに合わせるように裏地が赤の分厚いコート。エンタープライズのそれというよりは、もつと高貴な身分を見ただけで語るようなもので、水を吸ってぐちゃぐちゃな様子は勿体なさばかり感じさせる。

携えられた儀礼用のサーベルに、ベコベコになった肉食魚のようなデフォルメ調のデザインの艷装。

——ああ、もう何でこうなる？

「その娘は多分、艦だよ」

「……………あ」

音が生まれた。自分のものであると気づいたのは、一瞬間を置いてのこと。

——頭がガンガンとした。自分がどういう仕組であるかは分かたし、息をするにはどうすればいいかも明白だ。

だけど先が出てこない。役割を果たし、生きる何らかの生物であるための情報までしか私には出てこない。

俗に言う記憶喪失、だろうか。

「——お、起きたかな？」

次に音が届いた。男のものであるまでは判別できたが、その声に頭は反応がない。さつきは自分について考えると痛んだのだから、きつと記憶に引つかかると痛むのだと思う。

知り合いではないらしい、第一声が見知らぬ男とは私も可哀想な立場のようだ。

——目を開けて、その声の先を見る。少し気の抜けた雰囲気に比べれば、幾らか整った顔付きの若い男だった。

「ええつと、グーテンモーゲン？」

「指揮官、多分グーテンタークではありませんか？」

「あ、そうっぽいな。モーゲンってモーニングとかに似てるし、今昼前だもんな」

もう一人の女と何やら揉めている。ドイツ語について話しているようだ。

「日本語の言葉で構わない」

私の言葉に男の顔が仰天というのを切に訴えかけてくる。そこまでおかしなことなのだろうか、しかし日本語が分かるのだ、確かに思

考言語はドイツ語のようなのだが。

「そつか。じゃあさ、ついでに自分の名前も分かるかな？」

「名前……………」

「そうそう、取り敢えずそこだけ」

意識の方向性、みたいなのを記憶に集中させる。言うならば絡まった色々な色の糸の内、必要な色だけを抜くような感覚。

——しかし頭が痛みの赤で塗りつぶされるばかりで、私らしき色はまるで見えてこない。

記憶喪失だけでも済まされないううだ、体の節々が軽く痛むような気もする。

「ああ、無理に思い出さなくても良いよ」

「だから、何て呼んで欲しい？」

男の質問は、何だか私に妙な気を遣っているもののように思う。

——普通の気遣い、という言葉が頭に引っかかる。どういう理由なのかはわからないが、それは私にとって『普通』とは違うようだ。

「名前……………分からない。好きに呼んで欲しい」

「そうか……………まあ、仕方ないさ」

どういう意味かは分からないが、それは私が予想している「仕方ない」とは違うような気がした。

言葉には出来ないが、何か「この状況で用意された男の立場からの言葉」というような気がしない。もっと深く、何かを知っているような……………。

「じゃあ————フィーゼ、で良いかい？」

「何となく君の顔を見ると、そう名乗ってるような気がするんだ」

「フィーゼ————フィーゼ、か」

その名前は何だか頭が痛くなる。噛み締めて呼んでいると、男の顔が変わっていく。

その男の顔は、名前を口に慣らす私に喜んでるように見えた。

——少し、その顔を見ると気分がざわつく。何だか胸の奥に、男の言葉が強く鉄心のように埋め込まれる感覚だ。

正体は掴めない。はつきりしているのは、男は安全であるという妙

な確信だけ。

「その名前に意味は有るのだろうか」

「その内説明するよ、ちゃんと時期が来たらね」

成人の男の顔付きから想像のつかない、何とも少年じみた笑いを見せた。

——何故だろう。見る度に男の色ばかり、頭に残っている。

「指揮官、ちよつとわざとらしすぎて怪しい人でしたよ?」

「だってだって、いきなり怖いオジサンとか思われたら俺ショックだしー!」

フィーゼちゃんは天使だからな、俺は嫌われたらショック。

翔鶴辞める俺を変なオジサンみたいな顔で見るんじゃねえ! 俺はこれでもセンチメンタルなんだよ! もう知ってる人も多いかもしれないけど!

「指揮官つて……………弟みたいですよ」

「いや俺は圧倒的に年上だぞこの小娘が」

「何だかその台詞が子供っぽいつていうか」

クソお、否定しきれないじゃねえか!

——でも実際、フィーゼちゃんの頭の中身がどうなってるかとか俺はわかんない。それは瑞鶴も、翔鶴も皆そう。

だが、まあ——頭の中が大人びてても、子供っぽくてもあの子は小さい。

俺ら二人と会うのだって、記憶喪失ならなおさら怖いだろう。

「あんまり不安にさせたくないんだよ、俺だったら絶対怖いもん」

「ですが———そういう事を真っ直ぐと言える所は、とても良いと思いますよ」

「え、そうかな———つてだから俺を弟扱いすんじゃねえよー!」

ちよつと嬉しかったんだけどムカつくなこの野郎!

「よっよっ」

「俺を撫でるんじゃない！」

大体背丈の問題で背伸びしてるじゃねえかよ！ あ、もしかしてこれちよつと逆に可愛くない？

——何察してるような目で見てんだよ、くっそ全部上を行ってるみたいな顔しやがってからに！

ああもう、今日は色々起きすぎだぜ！

九話

『……………はあ、記憶喪失の艦ですか』

櫻井さんは何とも要領を得なさげな返事をした。何だよ、そんなつまらない電話だったかなこれ？

——受話器からは喧騒が絶えない。今の櫻井さんはどうやら忙しいらしく、腑抜けた返事はそういえば普段はしなかった。

間が悪かったようだ。

『艦の種類などは分かりますか？』

「ええつとな、多分鉄血のZ46。フィーゼ」

櫻井さんが吹き出す音がする。え、俺おかしなこと言ったかな？

突然受話器の遠くから櫻井さんが怒鳴る声。こんな都合良く揉め事が起きると思えないし、俺の一言が問題なのだろう。

やだなあ、また面倒事に巻き込まれるのか？ おかしいだろ、運なさすぎ。

『な、何故貴方がその名前を知っているんですか!?!』

「な、何でって言われても」

ゲームで持ってました、とも言いにくいな。

彼女は鉄血のZ級駆逐艦の最終型、完成形というイメージが有る。ゲームではそのイメージに違わぬ高性能なのだが、実は実戦経験は史実で無いらしい。

究極の箱入り娘。後ドイツ哲学に造詣が深いらしくて、俺よりよっぽど難しい言葉遣いで喋る才女でも有る。

ちっちゃくてかわいい、単純に庇護欲をそそる。白髪金眼つよそう。

『一応下級の軍人には噂程度でしか広まっていないのですよ!?! 何処からその名前を入手したんですか!?!』

「ええ!?! いや、まあ——いろいろ」

もう答えようがねえよ、そういう意味では俺は知識チートみたいなもんだし。

こればかりは誤解されてもどうにかするしか無い。俺には今回誤

魔化するための手札がない。強欲な壺を誰か早く制限解除してくれ。

当時小学生だった俺でも、あのカードから匂うデツキ圧縮というパワーワードは分かる強さが有った。そりゃ禁止カードになる。

『貴方には常々驚かされますね………ですが、有難うございます。すぐに『彼女』が迎えに行くはずですよ』

「彼女？」

『恐らく知っている方ですよ。それでは忙しいので、失礼いたします』
あ、切られた。先に切るなんて珍しい、本当に忙しいんだろう。

受話器を机に置くと、俺の顔を眺めていた白髪の少女がキョトンと金の瞳で問いかけてくる。

「何の電話だろうか」

「迷子の子が居ますって軍人さんに教えたんだよ」

そうなのか、とあっさり納得して乗り出していた体をもとに戻す。机の陰になって見えなくなってしまう。

——すぐに元気になったファイゼちゃんは俺に何故か懐いてしまった。これも『命令』の効力なのかねえ、小さい子供は嫌いじゃないが如何せん好感度を操作しているような疑念を持ったまま話すのは歯がゆい。

「あなたは軍人ではないのか？」

「ええ？ ああ、まあ軍人だけど軍人っぽくはないだろうね」

もうこの流れ何回経験したかね。俺は本当に軍人っぽい大人じゃないからなあ。

トコトコと俺の横に来るなり書類を背伸びして眺めだす。癒やされる、人形が歩いてるみたいだ。

「しかし仕事はしている」

「そりゃ軍人ではあるからね」

「しかしらしくはないのか？」

「民間採用だからだと思う」

本当は採用というか民間誘拐だけだ。

何だ、何処だ、何時だ、何故だ、WWWがずっと続いている。草は生えてねえぞ。

記憶喪失には違いないがそれは自分という個人に関してだけで、艦としての常識や教養は言うほど抜けていない事が質問を続ける内に分かってきた。

だけでも何か子供っぽくなってる。まあ、ゲームみたいになんか小難しいこと言われてもオジサンにはさっぱりなのでこれくらい純真無垢な方が助かる。

急に書類をびよんぴよん飛んで一枚取って眺め始める。

これもしかして危ない感じなのかもしれないが、記憶喪失だし良いか。唯の艦載機の整備状況の書類だし。

「これが重桜の文字なのだろうか」

「そうだね、ひらがなカタカナ漢字がメイン」

「3つあるのか？」

「そうだよ。此処は世界でもトップクラスに難しく、ただが一番奥深い言語を使う場所だからね」

文学が一際発展したのもそれに限るって偉い人が言ってた。俺もそうだと思うね。

ラノベとかさ、太腿の表現がこんだけ豊富な変態言語持ちの国だからこそ発展したに間違いはないね。いやあ最高の場所に生まれたよ、軍人にさえさされなければな!!!

ほう、と難しそうな表情で文字を見ている。俺よりよっぽど頭良さそうだなもんな。

「あなたも書けるのか？」

「勿論だ、書けなきゃ軍人どころか社会人失格だ」

あれ？ 元無職だし俺って社会人失格だよな？ まあ良いや、ダメ男という認識をフィーゼちゃんにまで持たれたら俺のメンタルが崩壊しかねない。

俺はフィーゼちゃんの前ではカツコよくて優しいお兄さんが良い。イイじゃん、ちよつとぐらい癒やしを求めてもさ。

「時間が有れば、少し教えてもらえるだろうか？」

「良いよ、瑞鶴とかなら喜んで——」

「いや、あなたが良い」

あれえ？ どういうことかなフィーゼちゃん、500文字以内で回答して下さい。

——まあ、瑞鶴の話してないし急に出てきた名前は嫌かもしれない。鳥のヒナとかって最初に見た相手を親と認識するらしいけど、アレに近いものかもしれないな。パパだ、俺はパパなんだ間違いない。

何でもかんでもその手の話題に結びつけようとする男は気持ち悪いって俺は知ってる。俺は分かる男だぞ。

「別に大丈夫だけど、何で俺？」

「ダメ、だろうか……」

「ダイジョウブ俺超ヒマだから！」

上目遣いには勝てなかったよ……。ゴメンね瑞鶴怖いもんねオジサンが教えるよ。

——くう、この子自分の魅力をご自覚してらっしやる。

俺はこの子に逆らえない、萌えにゴリ押されている。

「ってというか翔鶴も瑞鶴も紹介してなかったっけ」

「ああ。一体誰だ？」

翔鶴はフィーゼちゃんの機装を工廠で見てもらうって言ってそれっきりだし、瑞鶴はまさかの酔っ払いだしなあ。

——ああ、でももう瑞鶴の酔いも冷めてきているかね。艦って体が強いつて小野は言ってたし、俺よりは早いはずだ。

「じゃあ瑞鶴に会いに行こうか」

立ち上がって扉に向かおうとするどぐいっと服の裾を引っ張られる。

「手を繋いでくれるだろうか」

「お嬢様の言う事ならば喜んでっ！」

ああ俺って子供に弱いなあ！ でも何か気分最高だわ！

おててぶにぶにだね。オジサン嬉しい。

「かわいいっつー！」

見せるなり目を輝かせてフィーゼちゃんの小さな肩をぶんぶんぶ

んぶん。

「駄目だこの鎮守府ロリコンしか居なかったか！」

「ろりこん、とは何だ？」

俺は瑞鶴に見えないところからしーつ、とウインク。知らない方がマシな事実もあるからね。

——っていうか瑞鶴もなのか。親近感はちよつとだけあったが、俺と結構似てるんだよなこの子。

まあそれで何だよって言われたらわからん、というしかない話だが。元々なのか、俺と出会ってそうなってしまったのやら。

「お名前は何ていうの？」

「フィーゼ、と彼が名付けてくれた」

「ちよつと指揮官、何か名前が可愛くない」

睨まれても知らんがな。実質本名なんだけど。

——フィーゼちゃんを持ち上げるなり頬すりまで始めやがった。コイツ俺を超える変態なのではないのか。いやあ、ちよつと怖いなこの人。

取り敢えず取り上げる。

「何するのよ」

「フィーゼちゃん怯えちゃうから、お前完璧ド変態の顔だったぞ」

「失礼ね！」

お？ 何だこらやんのかこら!! さっさとアホみたいにその用途不明の刀ブンブン振り回しとけばええんとちやうんか!!

バカみたいに訓練やつときやええんとちやうんか!!

——このネタはマニアック過ぎる。

「——にしても、この子どうしたの？」

「拾った」

「ついに指揮官も犯罪に手を染めちゃったのね……」

「何で誘拐したみたいな脳内補完してるんですかねえ!!」

お前は俺を何だと思ってるんだ、さっきと言いそんな信用なくなることしたかなあ!?

基本は倫理的に間違ってることはしないし、ましてやこんなちつ

ちやい子誘拐して俺何するんだよ。

——逆にその動機が思い当たる辺り、やっぱ瑞鶴のほうが俺より変態なんじゃなからうか。

「まあ、という感じでこのアホの子が瑞鶴ね」

「誰がアホの子よ」

「すまんすまん、治らんからバカの子だな」

「なんですって!」

ああ袖でしばくんじやない! それ遠心力で結構痛いんだよ!

——俺と瑞鶴の馬鹿馬鹿しいやり取りに、一体フィーゼちゃんは何かを感じていたのだろうか。

ちよつと淋しげに目を輝かせてずっと見ているのは、どうにも見る度に胸の奥に何か突き刺さる感覚だった。

「よし、フィーゼちゃんなんか行きたい所はあるかね!」

「唐突に何だ?」

「ここって子供にはぶつちやけつまらんでしょ」

油くせえし飯は量がやたら多くて子供向けとはとても言えん。そして何より遊ぶものはなんにも無いんだよな、軍事施設に有つても困るんですけどもね。

「本が読めれば満足だ」

「まさかと思うが読みたいタイトルをお教え願おう」

「そうだな……超人思想には興味がある」

また哲学少女ルートに向かつてるよこの子。俺とはある意味相容れないな。

——記憶喪失だから、尚更埋め合わせるものが欲しいんだろうか。

でもそうだとして、ガラクタで埋める意味はあるのかね。それで埋め合わせた場所は確かに塞がるだろうが、俺なら其処に見つけるのも難しいような大きさでいいから宝石をぶち込みたいもんだが。

「なあ、フィーゼちゃん」

「何だろうか?」

「本は良いが、経験は大事だぞ」

まあね、先人の知恵って大事だとは思う。あるものを使わないのは勿体無いし、そして本ってやつはヒトになんかの形で使ってもらうのを待っている健気な連中だからな。

——しかしそれは行き詰まった時とか、何かがしたい時とか、方向性を持つていべきだ。

「フィーゼちゃん、自分がやりたいと思うことを言ってみなさい」

「どういうことだ？」

「良いから、どう？」

フィーゼは顎に指を当てて考え込む。それは俺よりもよっぽど何か多くのことを考えているようだし、実際その処理量は俺の比ではないのは確かだ。

少し喋っただけで分かるが、子供であるには頭が回りすぎている部分があるように見える。

「本を読むこと……だ」

「そりややつぱり暇潰しだね」

本は時間を喰うものだが、時間を投げ捨てる道具じゃない。

知識は幾ら持とうと役に立つものだが、担い手の重量を超えていい武器じゃない。

どんな力も、担い手の操作可能な領域じゃなくちゃならない。力は知識、担い手は経験と言えはいいのかな。

——ただでさえ艦ってやつは精神年齢にそぐわない大量のものを背負わされてる、それで犠牲になるものもアホみたいにある。

そんな事に時間を使えるほど、裕福じゃないんだよ。

俺の知らない昔の戦争みたいな飯も食えない状況とは違うが、その時間の足りなさは以前よりずっと逼迫してる。

「もつとまずは経験を積んで、失敗なり成功なりを一杯持つて——
——そっから本を読もう」

「まあそんな良い人生送った覚えはないけど、多分その方が色々楽しいと経験則で思うぞ」

まあ先に読むのも手だけだね。しっかし若いんだから何でも先に

潰してから取り組むのはつまらない。

潰して歩いていくのは失敗できない大人の仕事だ。足元も見ずに走っていきのが失敗できる子供の仕事だ。

理屈だけで言えばそうなんだ。どうしようもない子供の失敗だつて有るが、本当はそうできるようにしてやるべきだ。

「そうだろうか」

「正解とか言い切れないが、俺はそう思うぞ」

だって子供の時に失敗しそこねると、俺みたいになるしな。

大人になってから走っちゃならん所で走って——気づけば国家転覆に付き合わされてるわけだし。

「要するに正解を読んで問題解かずに、四苦八苦して解いたほうが意義あるものが得られる——みたいな話だ」

「無意味な正解より意義ある不正解だ」

まあ一見遠回り。答えから見ていけば何だつてすぐ終わるよ、当たり前だ。

——でもそういう事をしてきた俺は、こうなったわけで。

多分不正解だよ。これはな。

「……………あなたが言うのなら、そうしよう」

俯いて静かに頷く。

——待て、なんか恥ずかしいこと言っただけじゃない俺!?

「ま、まあ信じるかどうかは貴方次第です!?! 参考程度にな……………」

「瑞鶴、何だか浮かない顔ね」

汗を拭いながら歩いていると、突然話しかけられた。

さつきは実のところマトモには喋れていなかったもので、その姿を見た時に少しだけ誰なのか分からなかったが誤魔化した。

にしても綺麗な顔だ。私とは似ても似つかない。

絹みたいな髪に、宝石のように爛々と光を撥ね付ける翡翠の瞳。私
のものとは本当に全く共通点がない。

「そうかな?」

「ええ、きつき会った時よりスッキリしてないっていうか」

スッキリしてない………まあ半分ぐらい当たってるのかも。

理由は分からない、いつという訳でもなくこういう日は有った。気分が沈むと言うより、とても強い違和感みたいなものが頭を埋め尽くすような感じだ。

最初はまさかあの男に——なんて思った時期も有ったが、結構本気で違うらしいことは結論付いている。

「あの子に嫉妬してるとか？」

「翔鶴姉、本当にそういうのじゃない」

いつになく大真面目に答えてしまった。指揮官のせいであんな時につい巫山戯る癖がついちやってるんだよね。

——私は良くも悪くも運が良い。それは自覚が有るし、それで不自然なことが起きたような感覚というのも此処最近で幾つか有る。

それははつきりと認識できる。何というか、運が良い時は運が良い出来事の前後の結び目が何だか雑になるのだ。

簡単に言えば、本当は無いものを紐の途中で無理やり繋げてるみたいな。

「そろそろ帳尻合わせが来る」

「え？」

「なんでもない」

そしてその違和感を、この世界が寛容に放置してくれないのも知ってる。

——これから偶々上手く行っていた分、ギリギリでなんとか道が続いていた分の代償が遅まきで払わされる。

そう思うとこれは全く幸運ではないよね。自分の都合の良い所で、良い展開を持ってきてるだけ。

——生きる上で全部が全部グッドニュースな訳がなくて。

これから敢えて後ろに配置し直されていたバッドニュースが、沢山押し寄せてくる。

それはむしろ個人なんて簡単に押し潰すもので、下手をすれば原型を残さないほどの濁流になっている可能性すら感じる。

要するにずっと、ぼんやりとした命の危険を感じている。
何というか——あの人も色々放置しすぎてるのかもしれない。
此処まではつきりと

「多分近い内に死ぬなんて思ったの、初めてだし」
残念な話、私の直感というのはほぼ外れたことが無い。

「ええ!? 誰なのよその変な名前の指揮官は!」
電話の前でがなる。ふかした煙草をぎりぎりど噛む度に、その鋭い
八重歯が目立つ。

——その女の顔は、雰囲気で分かりにくいが非常に整っていた。
夜の海に似た複雑に光る碧い瞳に、その目鼻立ちは整っている。髪

は緩くウェーブの掛かった金髪で、うなじで括った残りが黒いダツフルコートの上を泳いでいる。

本来は美しい、という形容の相応しい顔付きだ。しかし着ている軍服と左眼を隠した黒い眼帯のせいか、その様子はどちらかと言えば強烈。

美しい瞳は相手を見定める鷹の瞳で、波打つ髪は女の尋常でなさを象徴する姿。

「ええっと、サトーだっけ!? 何でウチの機密事項を知ってるのよ、結構嚴重に管理してくれて要求出したよね私!」

『すみません、むしろあの方がどうやって情報を持ち出したのかが不思議なくらいなんです』

「そりやアンタラの管理不足以外ありえないでしょーがっ! なーにすつとぼけてるのよバカサクライ!」

その美しさは怒れども変わらない。強烈とは即ち押し付けるような美貌であり、怒りに塗られると尚更その圧力は強くなる。

——彼女が話しているのは機密事項のことだ。彼女達が造り出した乙級駆逐艦の最高傑作にして、最も使えない少女。

しかし性能は並の者では歯が立たない結果が出ており、その異様な性能から製造されてからも秘匿は続き、本来は件の「サトー」が知る可能性など有りはしない情報だ。

「——仕方ないからもう言わないけど、ウチのグラーフに先に迎えに行かせるから言っついてね!」

「こつちも礼儀作法つてもものが有るし、それは通させて『了解しました』」

プツリと電話が切れる。先に切るとは中々失礼な男である。さて。と息を吐きながら金髪の女は横の女に視線を寄せる。

——黒、白、灰。そう言った何処か死を想起させる色ばかりを身に纏いながら、それを生者たる輝きに横の女はその完成によって仕上げていた。

御伽噺の人物じみた長い白髪、喪服かのように肌の見えない服の最中に否応なく目に入ってくる開かれた胸元。そして何処か厭世的で

人、を見ていないような倦怠感に包まれた鮮血色の眼。

その姿を幾分かの芸術性すら有る。破滅的で諦観混じりの表情の通り、その身体からは死の匂いがするとかつて見た黒髪の男は言つてのけた。

「サトーね、マトモなツテから名前を持ってきたとは思えないが……」

まあ、かつてのゲームからの知識だ確かにその通りである。

しかし彼女が想像したような、少なからず血が流れるようなツテというものではないのも確かだ。

「グラフ、先にお迎え頼んだよ」

「良かろう。しかし——彼女はサトーとやらの言うことを聞いているということなのか？」

疑問を呈したグラフ・ツエツペリンの瞳は今まで以上に赤く揺れた。

「さーね。その辺も見てきてよ、気が乗ったら腕も見ればいい」

「……………本当に、良いのか？」

グラフの口元が、妙な悪意に歪む。

「ぶっ壊すのは私達の仕事」

「専門分野は徹底的にやること。ついでにプロ根性も忘れないこと」

分かっているさ、とグラフは了解して立ち上がる。

「行ってくる」

「行ってらっしゃい、グラフちゃん」

——そして運命はまた廻りだす。

この世は楽曲である。無音であるなら観客の苦情が来るものであり、騒音ばかりでも苦情がやってくるものだ。

男の平穏なソロパートはもう言ってる間に終わる事だろう。もうすぐサビに向けて走り出さねばならない、男はそれをやってのけねば

ならない。

後回しにしてきた地獄はこれから始まる。

これが逃げられぬ蟻地獄である限りは、男はきつと——この混沌の主人公なのだ。

十話

——自分が何であったのかは明白だ。きっと彼の言う通り、私は兵器だったのだ。

この目は標的を捉えるために有り、この足は標的に向かって疾走するために有り、この手は標的を壊すためにある。

故にそれは偶々ヒトを模された破壊の道具、本質的に『生きる』事に特化している他の生物と根本的に異なることも分かった。

草食動物が草を食い殺すのは生きるため、肉食動物が他物を貪るは生きるため。

そう、如何なる生物にも必ず搭載された最初の欲望にして機構。『生きる』というものに私の体はそれ程比重を置いていない。

形而上の心が生きる事を何らかの手段にしているとして、結局生物の体は生きる事を大前提に動くはずだ。私は——艦は違う。

生きるのは何のためだろうか。この問いに、哲学以上の価値が発生するのが私だった。

「明日から外に出ても良いだろうか」

質問が予想外に思えたのか、書類に釘付けだった彼の眼がこちらに向く。

私は書類作業に忙しいのだから別の場所で時間を潰すと言ったのだが、ああだこうだと丸め込まれて執務室にずっと居た。

彼が少しあたふたとしながら返事をする。

「え、それは良いけど唐突になんで？」

「あなたも言ったではないか。外に出てみるのも嫌ではない」
別に彼の言葉を鵜呑みにしてそう言っているのではない。

言われてみて気づいたことなのだが、どうやら私には行動の選択肢があまり思い浮かばないらしい。それこそ経験に乏しいようで、私がしたいことは「知る事」。

本を読むこと自体ではない。欲しいのは知識で、手にしたいのは生

きている実感。

「俺のアレは個人的意見だから別に気にしなくて良いんだよ？」

「違う、あなたの言葉で道が見えたただけだ。決して流されたわけではない」

「言い切られても複雑です」

そういうものなのか。目に見えて彼はへこんでしまう。

——何か言うべきだろうか。

「私は様々なことを知りたい。だけど——本を読むという手段しか思いつかなかったのだ」

——そう、私が欲しいのは自分が此処にいる実感。記憶もなく、正体も知らず、何者でもない自分という白紙を塗りつぶす知識の黒色。それは後ろめたさすら帯びているが、それでも白紙の自分は不安になる。これはどうしようもなくて、心細くて、何かに縋り付きたくなる暗闇に居るような恐怖だ。

逃げ切りたくとも、そうも行かない。仕方なかったし、別に悪いことでもなかった。

つい考えすぎてしまう、一旦忘れよう。

「あなたの言った経験することも知ることだ」

字を追うことだけが知ることに繋がるとは限らない。

花の匂いを知ること、踏みしめる道路を感じることに、見慣れない物に触れてみることに——どれも新たな風になる。経験であり、そして新たな情報で、知ることである。

言われてみればそうだったというのに、どうやら私の発想力は酷く乏しいらしかった。

「そういうことなら良いんだ。失礼なことを言ったみたいだ、ゴメンね」

彼の謝罪が単純に理解できなかった。

「何故謝る？」

「要するに浅はかな子だと思いきんでた訳だし、それは駄目だ」

「その程度の認識の齟齬、この世界に砂の教程有る」

それでもだ、とその瞳が少し鋭く光った。

いつもこうではないが、時々彼の眼は何か輝きのようなものを強く見せる時がある。

——そういうものを持たない私には少し羨ましいものだ。極端な言い方であれば、その在り様には恋い焦がれる所がある。

何も無いわけではない。きっとそうだが、無いと思ひ込んでしまうと苦しい。

「当たり前だから流すのは駄目だ、そうやって省き続けたら碌な事にならない」

碌な事とは、とまで問いかける勇気が出なかった。不幸の種類なんて、知るべきでも知りたくはない。

「これぐらいやるのは当たり前、当たり前、当たり前前って繰り返すでしょ？」

「何もかもが当たり前前になったら、誰も『当たり前前』の事』に関して不平も要請も出せなくなる。これは不味いことだ、起きたことや行ったことに対して考える自由が壊されることになる」

時々酷く難しいことを言う。少しわかりにくい。

恐らく顔に出ているのだろう、彼は手を振ってヘラヘラと笑って誤魔化そうとする。

「まあ取り敢えず今は駄目って事。それだけ」

「そうか、覚えておこう」

いつかは意味が分かるのかもしれない。そんな事を何となく思う。

——彼と言葉を交わすのはとても有意義だ。

気づかないこと、知らないこと、多くを私に与えてくれる。どんな会話を誰とするよりも、彼とすることに捉えどころの無い幸福感を私に与える。

「やはりあなたと言葉を交わすことはとても心地良い——何もない私の、数少ない財産だ」

他の誰と語り合うより、彼とそうすることに価値を感じる。

——こういうものを、何というのだろうか。

「そういうことばかり言っているとオジサン勘違いするから辞めて」
突然彼が軍帽を被り直して顔を伏せる。

どういうことをいってはおならないのかよく分からないが――

「私は嘘偽りなく言葉を伝えたつもりなのだが……………」

「グハア！」

「フィーゼちゃんが天然たらしでオジサン落ちそう……………」

「何情けないこと言ってるのよ指揮官」

はじめてのしきかんっ！こと「はめかんっ！」を片手に読みながら唸る。あ、略称は使いまわしです。

飯は食ってる感じがしない、なにせ明日はデートである。今度は白髪ロリと来た、俺は下手な動きをしたら軍人のくせに警察さんのお世話である。

勿論このイカレ指南書である「はめかんっ！」にそんなパパお役立ち情報みたいなのは載っていない。

「しかも明日はデートだぜ？」

「ちよ指揮官と二人きりで!？」

そりやそうだろ。そりやフィーゼちゃんのお願いは聞きたい所だが、此処の人員を絶やしたりしたら櫻井さんからお注意されてしまいますよ。

——という俺の事情を知ってか知らずか、瑞鶴は机を叩いてこちらに身を乗り出してくる。

「指揮官と二人きりとかフィーゼちゃんが危ないでしょ！」

「お前と二人きりの方がよっぽど俺は怖いね！」

なんで俺までロリコン扱いなんだよ、お前抱きついてるときの目がイツてたからな！

俺は小さい子は素直で好きだけど、別にそういう対象じゃねえよ。ましてや瑞鶴だって俺にとっては対象ではないわけで。

——なんだろうね、中身が完璧おっさんだから美女とかに靡かないんだろうか。ああでも、大学生の時は普通に付き合ったりしてたしそれだけでも言い切れないのかもしれない。

「そ、そんな事ないと思うけど」

「そんな心当たりありまくりだわーみたいな風に目を逸らして説得力有ると思う?」

「心当たりなんて全然ないし、多分、きつと、メイビー」

絶対あるだろ、眼が泳いでますよ瑞鶴くん。

しかし茅原実里はいいぞ。何がと言わんが良いぞ、あの声で喋りかけられるとトウクってなる。普通に接している俺の理性を褒めてほしいぐらいだね。

何かさつきと言ってること違うけどあの声は良い。聞いていると心の奥底に響いてくる、まあ石川由依もその類だけど。

「あ、そうだ。そんな心配ならお前も一緒にカラオケでも行くか?」
瑞鶴に呆れた顔をされる。何故だ。

「指揮官から外出を勧められてしかもカラオケとか、昔の私に言ったらキャパオーバーで卒倒しそう……」

「何だよ、堅っ苦しく訓練しろ訓練しろって言われるよりは気が抜けて良いだろ」

「そりやそうだけどさ」

まあ軍人としては不合格も良いところだとは思うけどな。そもそも真面目にやる気がないってそれ何度も。

どうせならみ〇しるべとか歌ってほしい。良ければ境界の〇方とか歌ってほしいし瑞鶴と約〇の絆とかも歌ってほしい。

おお、生声で声優の歌聞けるとか指揮官になってよかった。来世でも自慢できるぜこれ。

「指揮官、顔が気持ち悪い」

「言いたいことは分かっただけど普通に聞いたらかなり俺が可哀想だから言い方を改めてほしい」

可哀想な人じゃない、と鼻で笑われた後また天ぷらを食べ始める。

この野郎好き勝手言いやがって、大人つてものをな——この！
このお！

何もする気が起きないぞ。もうこの程度で動じないし、動じても瑞鶴に何か仕返しする気力もない。

「まあともかく、来るのか来ないのか」

「行く」

「翔鶴にも聞いていってくれ、一応外出間際でも外出届は出せるはずだし」

出来れば早くしてくれって事務員のお姉さんに言われた気がするけど、まあこういう場合は仕方ないと許してくれる人だ。

指揮官とか艦以外は結構まともで善良な人多いんだよなあ、この鎮守府。

いや軍事施設的にはゆるゆる過ぎてマトモじゃないんだがな。

——まあ、翔鶴も行きたいなら俺はパスすれば良い。多分金とかは瑞鶴と翔鶴で何とか出来る——よな？ ああ……怪しいなこれ。「うん、後で聞いとく」

「頼んだ、俺はもうちょい書類作業終わらせてから寝るから」

「了解しました、指揮官殿」

今更かしこまられても逆に困るところだよな……。

「はいついたぞ、当小説二回目の街（詳細不明）だッ！」

「誰に言ってるの？」

わからん。何か二次創作的に言っておいたほうが地の文の負担が減るかと思つて。

例のごとく電車はカット。フィーゼちゃんの方がスムーズに改札通つていったなあ、瑞鶴だっせ〜つて言ったらやばいことになりそうだった、主に俺の顔面が。本格的にアイツ暴力女化してきてるよ。

しかも二人共近い。俺を挟んで座りながら会話しないで欲しいね。電車スカスカじゃなかったけどさあ、通勤ラッシュの終わり時ぐらいだし。

「つていうか翔鶴来ないんだ」

「みんな居なくなったらいざというとき困るでしょうから、だって。指揮官も翔鶴姉を見習うべきだよ」

「お前もな」

ううむ、姉ヅラをしておつてからに。俺は弟じゃないと言つておろう

に、あれからずつと子供扱いである。

まあ前回の外出はうまく行っただけで、毎回誰も来ないとも限らないから当然の対応か。昨日一日とはいえ秘書艦を任せただけから勝手は分かってるだろうし。

なんか買ってきてやるかな。

「翔鶴って何が好きなんだ？」

「指揮官、あっちもこっちも女の子を引っ掛けて見苦しいよ？」

「ちげえよ失礼な!？」

ちよつと労おうと思っただけこれだ全く！　こういう所は姉譲りだね君は！

———というか、フィーゼちゃん静かだな。

「どうしたの？　人が多いと怖い？」

「いや———見たことのないものばかりだ」

違った。凄い目が輝いてる、外に出た経験がゼロと聞いたが興味はあつたらしい。

きよろきよろと辺りを見回して凄い早歩きでどこかへ行ってしまう。

「あ、ちよつと置いてかないでくれよ!」

「フィーゼちゃん喜んでるのかな？」

瑞鶴は呑気なことを言っているが、もう軽く見失ってしまった。

「居た居た、急に歩いていったら駄目だよ」

「すまない、つい気になって……」

「ゆるそう!」

駄目だ子供に甘すぎる。

見ていたのは———アクセサリーだった。意外と女の子な趣味をしているらしい。

———へえ、最近のアクセサリーって色々有るんだな。俺の彼女ってやつは身につけるものは一人で買ってきてしまう人だった。こういうものを見たのは久しぶりのことだ。

完璧に釘付けになってる、光り物好きとは意外だ。

「入る？ 一杯は買えないけど幾つかなら」

「良いのか？」

「良いよ、瑞鶴は？」

後ろから小走りでついてきた瑞鶴はうーん、と唸る。

「まあ、買ってもらえるなら一個ぐらいは」

「そうか、二人で見ている。男は急かす生き物だからこういうところに一緒に入らないほうが良い」

俺は意外とせっかちらしく、言いそうになるのを飲み込んで爆発しそうになることがある。母上には随分怒られた覚えがある。

瑞鶴に財布を渡すと不思議そうな顔をしていたが、動く気配がないのを見て諦めたらしい。手を繋ぎながら入っていった、仲が良いように何より。

「時間を取った、すまない」

出てくるなりフィーゼちゃんがなんだか申し訳無さそうな顔をしている。

「いやいや、今回はフィーゼちゃんのために来たんだし問題ないよ」

「有難う」

軽く礼をされる。ちよつと照れてて可愛いし礼儀正しいなあ、なあ瑞鶴？

——こっちは慣れていると言うか、軽い礼の言葉を言ってから財布を返される。

いや良いんだよ、良いんだけどさ………………。何だろうな、気兼ねないという奴なんだろうがなあ。

「よし、どんどん回るぞ。フィーゼちゃん最優先だが、三回に一回ぐらいは瑞鶴の行きたいところでもいい」

「別に私は…………」

「出る機会無いんだから遠慮するな」

何というか気恥ずかしそうな様子で歩いていく。

うーん、遠慮は本当にしないほうが良いと思うんだが……………。

色々した。服を見たり、本を見たり、路上ライブを何となしに聞いてみたり、流行っているらしいデザートを食ったり。

九時に出たはずだったが、軽くカラオケをして帰る頃にはもう昼の三時半だった。時間というのはときに合つという前に過ぎ去つてしまふものだな、なんてフィーゼちゃんがボソリと呟いていたのを覚えている。

「ただいまー。翔鶴、土産に人気らしいシュークリーム買ってきたぞ」
瑞鶴にもはつきりと趣味嗜好が分かるわけでもないらしく、消え物が無難だろうとのことだ。この姿になってから会ったことはないらしい仕方ない。

予想通り執務室の椅子に座って字をカリカリと書いている。眼鏡を掛けているのにも驚いたが、何より凄く——ぶっちゃけ、可愛い。

何だろうなあ、普段とのギャップと言うか。俺の中でのイメージがガキ、だからだろうな。口を開かないと美人的な。

「……指揮官、気づいてなさそうだよ」
「だな」

歩いて近寄ってみるがこの間にも反応はない。

よし、これは耳元でだな——ははは、私の計画は完璧だ！
「しようかろう、パパが帰ったぞ」

「……………何を言ってるんですか、ケダモノさん？」

あれえおかしいぞ？ この至近距離で振り向かれると俺の方が無理だ助けて。

つていうかケダモノさんって言うの辞めて欲しい。瑞鶴の眉がピクピクしてるからさ。

——ああだから誤解なんだって、もうコイツ言っても納得しねえな？

「殺されるから指揮官って呼んで下さいお願いします」

「——おかえりなさい、パパ♪」

オーノー！ このアマ信じらんねえ！

せつかく土産買ってきたのにこの野郎、勝手に食うぞ。

——まあ、そんな大人げないことしても仕方ないか。袋ごと書類の上に置く、指揮官として許されない行為的な気はしたが何度も言うが真面目にやる気がない。

「ほれ、シユークリーム。行き先で評判良かったやつ」

「ご丁寧に有難うございます、パパ」

「パパじゃない！」

こんな危ない娘を持った覚えはない。俺の娘というともつと阿呆と言うかだな、少なくとも「うふふ」とか言わねえんだよ！

という俺の脳内の叫び虚しく、翔鶴は立ち上がって俺のシユークリームを受け取るなり口に手を当ててニマニマとこちらを見る。

「こういうこともちゃんと出来るんですね、えらいえらい」

「こ、このお！ お、大人をバカにしやがって！」

何でいつもこういう扱いなんだ！ 頭を撫でるな10センチ以上低いくせに！

——俺が妙な満足感と決死のキャットファイトを繰り返している
と、小さな声で

「……ありがとうございます」

と言ったのが聞こえた。もしかしてこれ照れ隠しなの？ ああでもやっぱり嫌なものは嫌だからそれでも嫌なんだがな!?

そこら辺のヘナチヨコ主人公みたいに照れ隠しだから許してやろうとかならないから俺は、むしろガツツリ何らかの報復を企てるぞ。

「で、何で客人が来るって話を櫻井さんは俺にしてないんだ」

『すみません、少し遅れてしまいました……』

いやもう来てるんだけど、小舟がこっちに近寄ってきてるんですけ

ど。

と言っても、俺も把握しないまま外に出ていったのにも多大な問題が有る。一概に櫻井をクビにしろとデモを起こしたりするようなことではないんだけども。

翔鶴は把握していたから最悪対応する気だったらしい、っていうかアイツのほうが書類業務は速かった。もう任せてる。

——船は黒が基調な上に、例の鉄血の十字架のような妙なマークが描いてある。間違いなくファイーゼちゃん絡みだわコレ。

近づいてくる内にちよつとずつ見えてくるのは——何だあれ!?

「おい、何かすげえゴツチャゴツチャした塊みたいなの居ない!」

「そうだな、しかし何故私についてこい等と……」

君絡みだからだよファイーゼちゃん。もつと具体的に言えば鉄血と揉めそうだから先にご査収くださいどうぞどうぞの姿勢。

——何というか、これはちよつと俺も気が引ける立ち居振る舞いではある。

しかしいきなり此処でドンパチ始められたりしてみろ、俺以外の艦とか、従業員まで巻き込む。そこまでにならんためには——仕方ない。

「仕方ない、か……」

相変わらず不可抗力に弱い。

「そろそろ見えてくるのではないか?」

見えたのは黒い艦装だった。鯨のような気味の悪いデザインの飛行甲板が幾つかと、空母ならばちよつと気色悪いぐらいに搭載された連装砲——連装砲?

——えつと、じゃあアレはグラフ・ツエツペリン? やべーやつじゃねえか勘弁しろください。

っていうか尻尾でけえな、後ろ向かれるとアレのスケール感がまぎまぎと突きつけられる、でかすぎるぞアレは。俺ぐらいならばたき飛ばせそうだ。

「アレと戦ったら負けるだろうな……」

「艦と言うにも過剰なほどの艤装だな」

全くそうだ。実際アレが動くとなると並の空母じゃ勝てない。

それこそエンタープライズとかぐらいじゃないのか、真面目に。主砲持つてあんだだけ飛行甲板持つてるとなると機動力以外に弱点が有るとは思えない。

「すまない、彼女を見ていると頭が痛くなってくる……………」

「そりやそうだ」

間違いなく君の記憶に関係する人物だからね。お迎えで鉄血艦で同類の未完成艦な訳だし。

——そのまま船が港に繋がれると、そのやたら重い艤装を背負ったままに女が降りてくる。鮮血色の瞳に長過ぎる白髪——間違いなくグラーフ・ツエツペリンだな。

「卿が佐藤弘——か？」

突然響き渡るかやのんボイス。いや冗談っぽく言ってるがスゲー威圧感が有る。

「あ、ああ。始めまして、此処の一応責任者だ」
手を差し出す。

刹那、グラーフの長い尾が彼に向かって放たれる。

「では、見せてもらおうか」

佐藤はすぐに異変に気づいて俊敏に対応するが遅い。瞬く間に太い黒鉄の尾に巻き取られた彼は、そのままグラーフの横まで連れてこられる。

尾が放れたのも束の間、グラーフが右腕で荷物のように持ち上げる。

「どういふことだいきなり！」

「いきなりも何も——命令通りだ」

すぐさまZ46がサーベルを抜いて突撃した。その捌きは素人のものとはとても思えず、見たことのない速度で弾丸のようにグラーフ

の懷に彼女が入り込んでいく。

しかしグラーフの武器とは圧倒的レンジに有る。どんなに小さな体でも、乱雑に振り回された尾に弾かれてしまった。

それはZ46の視点から見ればまさしく暴力。近づくほどに背丈の半分はゆうに越すことが分かってしまう其れは、何をしようと抗えぬ絶対的移動命令に匹敵する。

「ほう、前に見たときより速いではないか。何か教わったのか？」

余裕すら読ませない無表情で尋ねかける。鮮血色の瞳が妖しく光つてはZ46の目の奥底から何かを引きずり出そうとしているような錯覚を帯びる。

見ているだけで怖気だってしまったZ46は顔を振り払い、ステツプを踏んで不規則な動きで退避、最接近のプロセスを数秒の内に成し遂げる。

その姿はまるで踊っているようにすら見えるほど軽快。しかしグラーフの口が小さく吊り上がる。

「あなたは——誰だッ！」

——頭が割れるように痛い。だがそう言っている場合でもない！

次は薙ぎ払うように振るわれる尾に飛び乗って、踏み台にして大きく飛び上がり急降下する。

グラーフはそれに気にもとめず、薄い怪訝な表情で佐藤に視線を向ける。

「誰だ、だど？——佐藤。卿は何をした」

「は!? 何もしてねえっていうか離せよ！」

「それは出来ない相談だ」

じたばたとする佐藤を揺さぶって抱え直す。

それと同時にグラーフの肩周りに合った主砲が一斉にZ46に向けられる。指揮棒が振るわれ、奏者は破壊の交響曲に構えだすかのようだ。

放たれる。その雑音は狂想曲、標的の死を以てのみ演奏は終焉を迎える。

「フイーゼちゃん！ 避けるろ！」

佐藤が『命令』を告げる。Z46の意思に関係なく、その『命令』を遂行するために眼は主砲の射角を追い、体は避けるためにゆらゆらと揺れ始める。

——こんな時までイヤイヤ言ってるらねえからな！

幸い太陽が邪魔をして上手くグラーフが補足できていないのも有って、軽く避けるだけで砲弾はすべて明後日の方向に消えていった。

「——何？ Z46が『命令』を受け付けているだど？」

グラーフは全く違うことに驚いているようだったが、その場の二人は気づきもしない。

突っ込んできたZ46のサーベルを——グラーフは左手で受け止める。

勿論それで止まるわけではない。手の甲をあっさり貫通し、手を振ると同時に首のすぐ横をサーベルが突き抜けていく。

「何と——！」

あまりに常識外。Z46の顔が固まるのと同時にグラーフが小さく愉悦を表す。

「Z46、筋は悪くはない。だが——」

そのまま血の流れっぱなしの左手でサーベルを掴んでいたZ46の手を持ち、顔を極限まで近づける。

「貴様の思う通りには踊らぬぞ？ 我は」

そのまま手を引いて体を引きずり込み、まるでボールのようにサーベルから振り払って放り投げる。

何もなかったように尾の先でサーベルを器用に引き抜くと、その眼に似た真紅の血が滝のように溢れる。

サーベルをZ46に向かって投げる。

——何故だ？

謎が深くなる。

「フィーゼちゃん！」

「問題ない、あの程度で壊れるなら我が来る必要など無いのだからな」
「何だとテメエ——！」

ますます怒りに顔を染めていく佐藤を他所に、グラーフはそのまま地面に叩きつけられて跳ねるZ46を冷たく睨め付ける。

それは観察。植物の観察日記をつけるような退屈な仕事で、彼女の何かを量り取ろうとしている。

——何だ、この戦闘の違和感は。

佐藤は必死で謎を紐解こうとするが、怒りばかりが邪魔をして思考が進まない。

恐怖と狂騒に戦場が支配されていて、慣れていない佐藤では思考を元の調子に戻しきれない。

「……………まだ行けそうだな」

グラーフが呟いた瞬間に、凄まじさすら有る表情でZ46は体勢を整えてまた疾走る。

その速度は前回の比ではない。もはや神速の領域、ソニックブームに包まれた白糸の童女が砲弾の隙間を縫うように走り抜ける。

「何？ やれば出来るではないか、これは——動くしか無いな！」

突然笑い、尾を構えてグラーフが走り出す。グラーフの顔は享樂に吞まれてしまっていて理性に欠ける、そのまま佐藤は放り投げられた。

——不味い、これじゃ返り討ちだ！

走る二人がスローモーションに映り出す。男は自分に問いかけ始めた。

——俺は何がしたい。

生き延びたい？ 何かを変えてみたい？

違う。

——じゃあ何だ？

分からない。知らない、そんなものは主人公だけが知ってればいい。

やりたいことなんか無い。目指す場所なんか無い。

俺に分かるのなんて——

今この瞬間に、するべきことだけだ。

走る。マントを引きながらどうにか追いつき、グラブの止まった勢いで彼が前に放り出される。

——今、俺がするべきなのは……………。

ぐさり。グラブの鋼鉄の尾が肉を貫いた。

それは男の右腕だった。白い執務服の袖が血の牡丹で色づいていく。男の顔が苦痛と混沌とした感情で爆発しそうなほどぐちゃぐちゃになる。

血を浴びたZ46の顔が青褪めていく、その眉間のすぐ傍にまで尾は伸びて血を垂らしていたからだろうか——それとも。

「アアアアアアアア——ツツ——ツツ——」

「何故だ——ツ！」

絶叫。処理しきれない強すぎる感覚を外に吐き出し続ける。

——痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！

痛いと逃げたいを数億回。問いかけることなど無意味、考えなど不要。慟哭はただ響くのみ。

其処に在るのは義務と責任、男は逃げられない。言葉も吐き出せぬ苦痛と淀みの底で、言葉にすらせず叫ぶ。

——何故って、部下と家族は大事にするって決めてるからだよ！
そしてピースを掻き集め転機の一手を彼は打つ。のたうち回らず、痛みに足掻き、それでも前に進む。

それはまるで、主人公のよう。

「痛い、クソ痛いしかも最悪だ！」

「だけどツ！——隙は作ったぞ！」

「今だろうが、五航戦——ツ！」

刹那、彼の後ろから二羽の鶴が翔ぶ。

その手に握るはスラリと伸びた玉鋼の刀。艦載機を展開し、その姿に有るのは怒り、殺意——そして任務遂行に突き動かされる歪んだ感情。

『言われるまでもないわ！』

二人の声が音叉のように共振を繰り返し、彼の脳にまで響き渡る。

——それでこそだ。

グラーフの口角が、その二太刀を近づく最中に醜く裂けて釣り上がる。何の感情かも判然としない狂った表情に釣られて口が言葉を奏でる。

「面白い、彼は興味深いぞ——アドミラル」

『何やっとなんじやこのバカ娘があッ!!』

突然、グラーフの耳元から若い女性の怒号が響いた。今まで微動だにできなかったグラーフが、耳を抑えながらバランスを崩す。

当然、目標が動くという予想外に太刀筋は修正不可。そのまま本体をすり抜けて両端の主砲が斬り壊される。

「——は？」

「ええ？」

気の抜けた佐藤と瑞鶴の声も束の間、バランスを崩したグラーフに引っ張られるように尾が動いて激痛が走る。

「イタイイタイイタイ！」

「ああ———すまない、彼女が五月蠅いものでな」

グラーフが手で制した。眼から敵意は全く感じない。

———待つてこれどういうことだ？ イタイイタイ！

何だか彼の引っ掛かりが解ける気配が漂う。つまり、彼の見慣れたBパート終盤の臭い。

『誰が説明もなしにやっていいって言ったのよこのバカ！ 間抜け！

中二病！』

「何を言っている、我は『見せてもらおうか』と前置いたぞ」

『あっちどう見ても本気でしょ！ やっぱバカ！』

叫ばれるのが辛いのか、片目をつむりながら通信機を離して会話している。

———ああ、言ったねそんなの。

彼の頭が瞬間的にすっからかんになる。絡まっていた謎が解けていく感覚がして、すつきりした感じと尚更不満という感情が渦を巻いていたのだ。

幸い、そんな事を考えているからあまり痛みは気にしていないが。

「えっと、『命令通りだ』っていうのもつまり」

「ああ、卿らを試しても良いと聞いて此処に来たのだ。命令通りに遂行しているではないか」

言葉足らずか teme は。

『えっと……………サトーだっけ。何かゴメンね、そいつ図体だけデカ

イとびきりのバカなのよ』

もう知ってる。脳筋だな、何か三発ぐらい顔面殴りたい。初めて女を殴りたいと思ってるよ俺は。

十一話

——夢なのはすぐに分かった。特有の浮遊感と言うか、誘導される思考を認識できてしまった。俗に言う明晰夢というものらしい。内容はあまり詳しく分からない。漠然と自分が見た生き地獄を眺めている感じだ。

小学校で出し物を多数決で押し潰された瞬間とか、死ぬ程頑張ってたやつが世の中舐め腐ったような顔してるやつにテストの成績で負ける瞬間とか、特に意味もなく絡まれてるオッサンを見てる瞬間とか——どう言えば良いのかな。

単純に「辛そう、大変そうだ」というよりは「耐えられるし、耐えることを強要される程度だからこそ辛い光景」を沢山走馬燈のように見ている。

俺の持論だが、耐えられない絶望より耐えられる小さな不運の山の方が場合によってはキツイ。

耐えられない絶望は同情される、自分の不運を嘆ける、境遇のせいにするならそれをバネに立ち上がれる。とにかく、行動できる。

耐えられる小さな不運の山は違う。「みんなそんなもんだ」と諦めてしまうし、それが辛いと思う自分を責めるし、境遇のせいにするばそれは唯の悲劇のヒロイン気取り。

——それは違う。

どっちも地獄だ、きつとそう。

彼女達だつてそうだ。腕がもげただ、眼がなくなつただ——そりゃあ辛い。

でも。自分の存在意義に悩む瞬間も、戦いの果てを見失う失望も、それを嘆くことが無駄に感じる虚無感も辛いに違いない。

辛くないやつなど、この世に居る訳がなかった。何で其れを、誰も理解しないんだ？

「……………寝覚めの悪い夢だな」

開口一番悪態をついてしまう。起き抜けの俺というやつは妙にテンションが低い、そして隠してる悲観的な感性が膨張していつまり——何というか、かなり根暗だ。

どうやらベッドの上らしい。

起き上がると、足元に僅かな体温と重み。霞む視界を擦ろうとする
と右手が激痛で動かない、仕方なく左手で擦って眼を開く。

Z46が眠っていた、眼が赤いのを見るともしかすれば泣いていた
のかもしれない。

「寝てるのか」

「そうだね」

さっき話した通信機越しの女の声、多分坂本真綾だな。もう此処に
ついているとは。

女の姿は黒いダツフルコートに軍服で黒づくめ。砂金のような金
髪に、蒼海を思わせる瞳というと流麗な顔立ちを想起するだろうし実
際そうなのだろうが、左眼を覆う黒い眼帯や鋭い目つきがどちらかと
言えば凛々しく見える。

手袋で両手を覆っている彼女はパイプ椅子ごと距離を詰めて話し
始める。

「えっと——ズイカクだっけ？ さっきまでこの娘と一緒に泣い
てたよ、罪作りの男だねえ」

「そりゃ不味いな、後で引つ叩かれる」

艦に？ と彼女は不思議そうな顔をしている。言いたいことは分
かる、俺も何で引つ叩かれるような関係性になったのかと言われたら
回答に困る。

——横を見るとグラーフ・ツエッペリンも座っている。禍々しい例
の艀装はしまっているのだろうか、それでも背丈自体が190を越し
ているから座っていても威圧感が有った。

「右腕はしばらく動かせない。結構深くまで刺さってたらしい——
——っていうか、正直ちよつと切除するか迷ったらしい」

何だ其れは。待て待て、そんな設備はこの鎮守府にはないだろう。まさかノコギリ——考えるのを辞めておこう、身震いしそうだ。「まあ？ その横の娘さんにも原因の一端があるんですがね？」

グラーフ・ツェッペリンはバツが悪そうに顔を逸らす。正直な所、そこまでは怒っていないが。

俺の腕がぶつ刺さったぐらいでZ46に届かないような勢いでもなかったし、元より寸止めのもりだったのだ——と時間を置けば冷静に判断できた。

要するに、俺は水を刺しただけだ。

「その節は本当に申し訳ない、無辜の人間に危害を与えるのは流石に此方に非がある」

その雰囲気似合わない律儀そうな口調。

「腕がぶつ飛んだわけでもないし特に追求はしないよ。それより——アンタの名前は？」

「ああ——シユテルネ。こつちでも有名かな、私の名前は」思わず口が空いた。あまりにも予想外な名前だったのだ。

「え、あの——世界最初に人型セイレーンとやりあったあの？」「星の女、とか呼ばれてるらしいね。シユテルネ自体が偽名なんだけどなあ……」

シユテルネ——ドイツ語で星か。昔知り合いがそんな事をカッコをつけながら教えてくれた。

——何か一時期ニュースになった。何でもこのシユテルネ本人がやりあったらしく、都市伝説ではその時にセイレーンの血を浴びて半分化物になったとか、戦闘で失った部位をセイレーンのもので代用したとかいうのもある。

それから最初は色々な報道がなされて、彼女の動向は注目されていた時期がある。

まあ眼帯はしてるが——まさか眼を、なんてことはないだろうし都市伝説の方は唯のデマだろう。

しかし重桜で噂が立ち、ニュースで追われるほどの有名人である。「こりゃ凄い人と会う羽目になった。俺は平穩に安月給の安寧を求め

「てるだけなんだがな……」

「変な事を言う。ひーちゃんはまるで欲がないのか？」

「ひーちゃん？ 俺は弟でも何でもないんだが」

「何で咄嗟に弟を思い浮かべたんだ俺は——何かこの人から姉御肌の臭いがするからかな。」

——弟という単語が相当ツボに入ったのか、ずっと笑っている。

「外人の私が言うのもアレだけど、ひーちゃんは言語センスがアレだな」

「そういうアンタは予想より背が低いな——ああすいません、土下座でも何でもするんでワルサーP38を眉間から離してくださいお願いします靴だって舐めますから」

何か190とかのヤベー奴を期待していたのだが、彼女の背丈は160ちよいが良い所。エンタープライズもそれくらいだった気がするし、それは女性基準なら実は高いのだが——イメージで言うともはや巨女だから仕方ない。

まあその顔で160ちよつとつていうと……うん。

「アンタ普通に男寄ってこないか？」

「え!? いや、全く……」

急にしおらしくなってしまう。

こういう事を言われ慣れていないのか少し動揺している。いや、もっと大人な人だと思って話を振ったつもりだったんだが……。

この人扱いが難しそうだな。

「ふーん、ワケあり20代……つていうか何歳？」

「デリカシーの欠片もないな——まあ良いや。27」

「年上だと？ 若すぎる、逆に怖いよアンタ」

行き遅れ系女性軍人。尚生きる伝説的扱いをされている模様。

——まあそんな無粋な質問は置いておいて。

「で、フィーゼちゃんの状態を教えてもらえるって事でいいのかこれ」
軽く忘れかけていたらしく、彼女の右眼がキョトンとする。

——うーん？ どうなつてんだこの人、子供っぽいのかギャング氣質なのかよく分からない。色々な属性をこっぴどく感じた感じがする

な……。

「そうだった」

何処と無く暗い顔付きになる。その瞳が見据えているのは俺の手でも、Z46でもなさげ。

この人も何か有るのか。小野といい、指揮官はドラマがなきゃやれない決まりでもあるのだろうか——つていうか俺にはドラマもクソもなかったな。

最近自分が指揮官だということを忘れそうになる。

「いつも思考回路が分からないって言われるから、私の生い立ちからなるけど構わないかな？」

「はあ………もう何でも来てくれ。俺の適応力はメキメキ向上してるからな」

何だ思考回路が分からないって。アンタどんだけブツ飛んだ軍人なんだ？

——さて、まずは何で偽名かっていう所からお話を始めよう。

私は孤児だ。今でも名前もよく覚えてない辺鄙なスラム街で、スリをして生計を立てていたのが大体10歳まで。ちなみに当時は字も書けなかったよ、絵に描いたような捨て子ってわけ。

親の顔は知らない。さぞ絶世の美女が私を捨てたんだ、と適当に思っておいてくれ。正直私自身は出自に興味が無いんだ。

10歳の、9月だったね。金持ちそうな厳しい顔付きの男から財布を盗った——此处で人生が狂ったんだろうさ、多分。

そいつの名前は——ああ、どうでも良かったね。取り敢えずハンス・ウル——何だっけ。そんな感じの伝説の軍人の家系の男だったらしい。

名前を覚えてないのかって？ 最近は名前はシユテルネだけで通すからね、どうでも良いことはすぐ頭から抜けるんだ。

私はすぐに取っ捕まえられた、ミスはなかったんだが男の動きがあ

なりに速かったんだ。

一応当時は有名なスリで通つてて、自分でも運動神経と瞬間的な判断力には自信が有った。自分を超える奴が居ることに驚きだった、重桜で言う所の『井の中の蛙大海を知らず』ってやつかな。

そして言われた。

【貴様の力をマトモに活用できる場所がある】

すぐさまこう答える。

『飯は有るのか』

【無い方がおかしいと思えるくらいには生活を保証しよう】

契約は数秒の間に成立。私はソイツの養子として大体22ぐらいまで生きることになる。

——え？ 地獄だった、何がと言うかクソツタレな人生がもつと濁つていった。

ほら、今でも頭数が揃わないから陸軍って人間で構成するでしょ？

アレに入る予定だった、確かその家系の名を知らしめた軍人は空軍だったんだけど、まあ艦の艦載機に勝つてっこないわ。

つまり旧式の軍人。女が入るなんて私もどうかなって今でも思うんだけど、残念ながら私の陸軍将校での成績は実技筆記ともにトップ。世の中変なことも有るもんだよ。

途中までは同時進行で凄まじい初等教育からの追い上げを家でされた。辛かったけどマトモな教育が受けれるのは、正直ちよつと嬉しかった。それに頭の出来は悪くないみたいで、何だかんだ環境には慣れた。

ああ、勿論男だらけの環境で色眼鏡は絶えなかったね。まあそれはどうでも良い、結論だけ言うと『実績で捻じ伏せた』、それだけ。私は傷つきもしなければ考えるところもなくただ相手が勝手に僻んで、勝手に諦めただけ。

告白されたか？ 何でそういう事ばかり聞くな………ま、まあ有る。私は興味ないから全員振ったけど。

そして私が陸軍に入るべく日々を走っていた間に、残念ながらその養父と亀裂が入ってた。

というのも大層な話じゃない。ソイツの持論が気に食わなかった。『軍人とは国の道具だ。我々は道具として磨かれ、道具としてこの生命を全うするのだ』

それが大嫌いだった。ってというかアイツもそう思うのは勝手だけど私が嫌いな考えなのは分かっているだろうに。

何せ金銭的自由のために言うことを聞いてるようなものだ、元より自由とか自己決定を求めていたのにそんな事言われちゃやる気が失せるに決まっている。

——それで、まあ陸軍をそこそこやった頃に失踪した。私は道具じゃなくて、道具を使う戦士の方がまだマシだった。

私は特別頭が悪いわけではないけど、生きる場所は動物的な生死を賭けたりする類の場所にしか無いと確信してた。人生もそういう風になったし、私自身それが向いているだろうと思えたから。

それで評価をしてもらえない軍は嫌いじゃなかった。無意味に他人の物を奪い取ってはそれで生きるだけの10歳までよりよっぽど生きてる心地がして、生き甲斐を覚えて、ついでに言えば生きる理由になつてると思ってた。

けどあの養父は駄目だった。思想がかけ離れすぎてて、アイツの手元で生き続けるのは無理だと見切りをつけた。アイツもその気配は気づいてたみたいで、それこそ『道具としての価値』の無い私は放置された。

——勿論路頭に迷った。そりや仕事も同時になくなったからなあ、幾らそこそこの成績で入ったと言ってもそんなに長く勤めてなかったのも有る。逃げ出す時に持ってた貯蓄なんてすぐスツカラカンだよ。

で、また違う軍人に拾われた。どうやらソイツは私に惚れたらしい、一目惚れだそうだ。バカじゃないのかと罵ったが

『愛にバカもアホもない。好きなもんは好きだ』

って言い切られちゃって。流石にどうしようもなくなってずるずると家に転がり込んだ。

今？ 今は——死んだよ。戦死。

——こつからは大きい声では言えないような手続きを重ねて軍人に戻ったわけだが、抜き打ちで入った指揮官の適性試験に引つかかると来た。

前まではその適正とやらはゼロだったのに、突然湧いて出た。ちよつとびつくりはしたけど起きたことは仕方ない、重桜と同じで適正があるなら殆ど強制連行なものも有るし。

さて、もう私の話は良いだろう？ 私もこう自分のことをおおつぴらに話すのは恥ずかしいんだ、あんまり良い生き方だとは思わないから。

それで指揮官になって、実績をそこそこ重ねてそこその地位について。そんなぐらいでグラーフちゃんとも出会ったんだがそれはまた。まあ興味があるって言うなら話すよ……。

こういうわけでいよいよ本題。Z46——ごめんごめん、フイーゼちゃんだったね。あの娘に会った——遭遇した、エンカウントした。そんな感じ。

やつとここ半年ぐらいの話に戻るよ。

ひーちゃんも知つての通り、人型セイレーンを撃退した私は名実ともに英雄——みたいな扱いをされた。偶々な部分も大きかったと思うから正直、飾り立てられたハリボテの指揮官だよ。

まあそれでも一応は実力が無いわけでもないから手に入れた地位で戦力を整えて、後は勢いで駆け上がった。実力は名誉に追いついて、有り様は虚像を掻き消すほどになった。

勿論膨張していた。私だつて人間だ、そんなものだよ。

私は戦うことで生きる意味を見出した。それは世間に評価された、だから自分よりそう在ることを強いられる艦は尚更そう在るべきだと思つていた。

——思つていた、だよ。今は思わない。

フイーゼちゃんは強かった。模擬演習は単艦で駆逐艦三隻を相手取つて勝利した、対空演習では航空機は残らなかつた、艦隊運動に混ぜればまるで指揮棒に従う演奏家の如くピタリと動きが噛み合う。

それには勿論理由が有る。

——記憶がない故に、彼女は常に『覚醒』に近い状態だった。未成艦故の特質だった、生まれた頃から潜在能力を引き出せていた。

え、覚醒ぐらい知ってるんじゃないの？ フィーゼちゃんの事を知っててそれを知らないって白々しい……。

——そして、配属されて一ヶ月で彼女は異常をきたした。それは艦としての異常だ。

『何故私は戦わなくてはならない？』

最初はその質問から始まった。指揮官をやっていて初めての質問だった。

『セイレーンは本当にただの敵なのだろうか？』

私は口を噤んだ。答えのない問いに、懸命に答えることすら放棄した。

艦に私の個人的意見なんて教えて、納得するわけがない。そう思ったから。

『私達の正体は何だ？』

『この戦争に勝った先に我々はどうなる？』

「何故」

『どうして』

『何で』

『私に名前は、無いのだろうか……』

嫌気が差した。分かってる、分かっているんだそんな事って頭の中だけで叫び続けて、言えないから唇を噛んで口はいつも噛み傷だらけだった。

それは解決すべき問題だ。私は逃げてはいけない、善処しなくてはいけない。

——でも何も出来ないじゃないか！ 適当なことを言っただけでいい包

めてそれでおしまい!? それって道具と何が違うのよ!

認められなかった。自分がやりたくなかった『道具として生きる』事を強要しているなんて事実には絶えられるほど頑丈じゃなかった、英雄じゃないから。

戦いに自分を見出して欲しい——自分勝手な価値観を押し付けた。

そんな子供みたいなことばかり頭で考えて、彼女を見る時の私の目は多分、虚ろになった。

どんどんフィーゼちゃんの成績は落ちた。段々と言うことを効かなくなつた、暴れるときだけは異様な能力を発揮するようになった。参つたさ、権力の濫用で多くの指揮官に『命令』させたけど聞きやしない。ついでと言わんばかりに私も作戦がずさんになった、ミスも増えた。

やってられなくなつて、Z46を閉じ込めた——今回はそう呼ばせて欲しい。今の彼女とは多分、別のものを私は見ているつもりになつていたから。

しかし放置しては軍に文句を言われる。私は仕方なく——
——今、此処にやってきてる。

「どう? 向き合うことも出来ない卑怯者が英雄なんて、それこそハリボテどころの騒ぎじゃない」

「詐欺だ、とんだ詐欺師だよ私は」

段々と自嘲的になつた口が、漸く自傷を辞めた。

——俺は他人だ。他人だからこの人がどういう苦しみ方をしたのか、客観的にしかわからない。

それは誰も悪くないとか言えはいだらうし、アンタは頑張つたとか言つてやるべきなんだと思う。眼の前の小さな少女のような彼女に今必要なのは、理屈付けだった。

でも、それは出来ない。代わりに

「……………辛かったな」

とだけ答える。それは誰にも否定できない事実だから。

俺はこの人を正しいとは思えない。仕方ないと同情もしない。だけど、辛かったんだろうなとは思う。それだけは俺が誠意を持って伝えられる言葉だ。

別にこの人の行動は、如何なる事情が有っても俺はやるべきではないと思う。だから庇えないが、辛かったのは間違いない。

「そう?」

「アンタ自身が辛いって叫びながら喋ってる風だったし、俺が同じ立場でも辛いって言うから間違いない」

「慰めのつもり?」

「違うね、それは事実だ。慰めなんて主観的なプロセスを俺は挟んじやいない」

それに、この言葉が今俺という存在に出来る彼女への最大の後押しだ。

「それで此処に幽閉しながら船でやってきてる最中にぶっ壊されたってか?」

「そんな感じ。まさかサーベル一本で艦装を回収された挙げ句、船を半壊させられるとは思わなかったけどね」

力なく笑う。何だか最初に見た時より彼女の顔はくたびれているような気がした。

—— 全く、碌でもない世界だな。ほんと。

小さな幸せも奪われるし、理不尽は唐突に突きつけられるし、楽しいことは嫌なこととハツピーセットだ。言ってやるとくそつたれ、やってられないにも程がある。

「何か、話し過ぎた。ごめん」

「別に良いよ、俺は暇人だ。指揮官の仕事から逃げる口実にもなるし悪くない」

紛れもない事実を言ったつもりだったが、小さく笑われる。

「嘘が下手だね、ひーちゃんは」

「いや、結構大マジだぞ」

——笑っている顔は、やっぱり少女のまままで止まっているような気がした。

環境に潰されて突貫工事で大人になって、生き甲斐を見つけたと思いきんで生きるやつ。俺のイメージを纏めると、まるで彼女まで小さい子供だった。

全く、善人は早死にする。出来れば長生きして、生きていたことを後悔しない何かを見つけて欲しいものだ。

「ああ——よっす、元気だぜ俺」

放置で医務室を出るなり瑞鶴が居た、出待ちか？

さて、テンションも戻ってきたし普通に行こう。

完璧にトラウマを掘り抜いて意気消沈気味のシユテルネさんは放置した、いや俺はなんて言っただよ分かるわけ無いだろう。

俺なんてアレだぞ？ 仕事したくないーって喚きながら飯作ってるんだぞ？ リブしてるワールドがディファレントだ。こういう時はそつとしておくとて奴だ、多分グラーフが何とかしてくれる。仮にも秘書艦だし。

「……………何だ、生きてたんだ」

「お前がボロ泣きで俺に抱きついてたという情報は握ってるんだぜ？」

「ちよ、誰よそんなデマを流したのは！」

君より圧倒的にエライイお方だ。

「抱きついてないし！」

「泣いてたのはホントなんだ」

軽くからかったつもりだったのだが、瑞鶴は本当に涙目になる。

——アレ、これ俺また日本刀でハラキリされかける？ それは嫌だ俺は死ぬなら膝枕されながら美少女に囲まれて死にたい！

いやそこまでじゃなくていいから老化とかそんな苦しくない病死とかが良い！

「……………当たり前でしょ」

「——はい？」

「当たり前じゃない！」

唇を噛み締めて、手を強く握って涙を堪えて。

始めて見た姿だった。俺はそういう奴だと思ってたし、強いんだろ
うなあとはかり思っていた。

——普通に泣かれて、俺は普通に困惑した。

「一息ついたと思ったら急に倒れるし、血は一杯出るし！」

「心配しない方がどうかしてるわよ！」

怒ってるのか泣いてるのかもよく分からない。本当に切羽詰まると
誰でもこんなものなのはよく知っている。

ただ、あんまり想像してなかったと言うか。俺って、そんな重要度
が高いものって認識がないんだよね。

何でってそう立ち回るから。理解者ヅラした薄っぺらいやつには
見えるかもしれないが、根本的に誰かに必要とされたりかけがえのな
い物とは思われない。

そう思われても困るのも有るし、俺はそういう人間になる才能に欠
けるからだ。

今更な話だが、俺は普通の人間と言うかとりわけ利己的な部類だ。
誤解は利用するし、時には誰かを捨てる日もやってくる。

——それを見透かせないほどの馬鹿ではない、と思ってた。

「おいおい、泣くことあ無いだろ」

「有るわよ！ 馬鹿！」

明らかに自分の顔が引き攣っているのが分かった。

多分これから、相当的是はずれなことを言うんだろうなあ——他
人事のように頭の隅がぼやく。

「泣くほど重要度が高い人間か？ 俺」

「重要度とかそんなんじゃない」

「じゃあ何だ？ 顔？」

「馬鹿」

今日はバカバカと手厳しい日だ。日々IQが下がっている自覚は

有るから許してくれよ。

——どういう顔をすれば良いのかもわからない。まごついて顔を逸らしそうになると、すごい剣幕で詰め寄られる。

琥珀の目に映る景色も、唇の質感も、吐息の様子さえはつきりと見える距離。幾ら何でも近すぎる。

「置いて行かれるのは嫌だって言ったじゃない！」

——カポーン。風呂場の桶でもぶつけられたような音が頭に響いた感覚がした。

ああ、言つてたなみたいな。物語に直す所の何話前の事だったろうか、着任の二日目ぐらいにそんな事を言われたな。

うん、確かにそうだった。そりゃいかな。

「ああ——そういう事ね、悪かった」

誰であれ、いきなり居なくなられるのに極端なトラウマが有る。

まああの史実じゃあな。

「何か誤解してるみたいだけど、相手が誰でも言うわけじゃないからね」

「はっ？」

「——もう、察し悪い！」

忙しなく怒鳴られて頭が常にアースクエイク。俺はひこうタイプになりたい。

「指揮官だから言ってるのよ！」

「はあ、そりゃあ司令塔居ないと——」

「そうじゃなくて、アンタ個人！」

んなアホな。俺は好感度50を永久キープしてるつもりだったんだが。

——俺なんかしてやったっけ？ いきなり掃除始めて、次の日倒れて無茶して心配掛けて、落ち着いたと思っただら急にヘコミだして、そんで仕事をするわけでもなく幼女を拾ってぐうたらぐうたら。

いや真面目に好感度上げるポイント無かったぞ？

「いやいや、何で俺？」

「何でもへつたくれもないわよ、何となく」

「お前は動物か」

怒るのにも疲れてきたのか、今度は嗚咽を漏らし始める。まあ怒ってる時は出ないだけだからな、そういうの。

——うーん？ 結構客観視してもそこまで好感度上がる要素あるか？ 仕事はしないし、何か特段突き抜けた良い所も（あるかどうかは知らんが）見せたわけでもなし。

ぶっちゃけ部下と上司じゃないのか？

「俺何もしてねえじゃん、何処でそういう感じになるわけ」

「何処って——何処だろ？」

——まさか『命令』の効力とか？ 都合のいい人格になるって小野が言ってたもんな。

俺は心配されたい人種だったのか、今更自分を見つめ直してるけどこれどうなのよ。っていうかこの能力の範囲広すぎるな、どれがどれだか真面目に分からん。

「お前、俺が性格良いと思う？」

「全然」

ぐさ。キツイこと言うぜ。

「何か俺がお前に一生懸命なんかした？」

「全然」

していない。

「じゃあお前にとって泣くほど居なくなってる男か？ 俺」

「……………うん」

何でだよ。

「いや真面目に理由聞いてんだよ」

「ええ？ 何ていうのかな、こう——」

手でよく分からん物体をこねるような動作。何だお前、パン作りにも手を出したか？

結局よくわからなくなったらしく、頭をくしゃくしゃと掻いてキツと俺を睨む。

「何やかんや一緒に居る内に情が湧いたのよ！ 多分！」

「うえー夢も希望もない理由だなオイ！」

何、アレじゃん。「嫌いな同僚でも急に居なくなると寂しい」的なレベルのやつじゃん、一瞬期待した俺が馬鹿だったね！

——待て、俺はそう有って欲しいって期待してたのか？ 何かおかしいな。

期待してるんならそうなるんじゃないのか？ 小野の話が合ってるなら。

「……………アイツ、もしかして俺に何か嘘を吹き込んだか？」

「急に何の話？」

「結構重要な話」

多分『命令』という概念は存在する。フィーゼちゃんが明らかに自分の意志と違う動きを見せたのははつきり見た。

——だけど、何か違うな。小野が俺に教えた情報は、どつか間違ってる。

でも何が違うんだ？ っていうかこれを究明できるのか？

「……………まあ後でシユテルネさんに聞いてみるか」

「え、何を？」

「コツチの話だ——まあとにかく、もうちよつと薄情になれ。そんな性格じゃ外に出た時に保たんぞ？」

余計なお世話と怒られた。

——本人が良いなら構わんが、俺みたいな普通のやつにそう真面目に接していると気が狂うと思うがなあ…………。

十二話

それはとても奇妙な夢だった。

私の記憶なのだろうというのは予想がついた。ただの夢で済ますには生々しく、胸が苦しく、言葉に詰まる何かが入り込んできたから。

その『記録』は混沌としていた。生まれてから今に至るまでの道程はとても支離滅裂だった。

生まれて、戦って、戦って、戦ってを何十回か。その後尋ねて、尋ね困らせそれを永久回。呆れた女は嫌気が差し、私は暴れて幽閉されて——そして今。

私という生命の八割が、『艦』として致命的に不正解。生きる意味など問うても無駄で、戦う理由など不問で、敵が何かなど明白。全て私を知るべきではない事だった。

どうやら失敗作のようだった。疑問を持つ兵器など誰が扱いたいだろうか、知ることには意義を感じてどうする。使命は持ち主の害を壊し、益を護ることだ。

その疑問は無駄だ、当たり前のことだ——武器なのだから。形而上の記憶に成り下がったその『記録』は時間に沿って続いていった。私がどれだけ期待をされ、戦い、道を踏み外し、そして——今に至ったか。

そんな物語も後半。私は閉じ込められたままに、碧眼の輝く女と喋っていた。

『何処に行く』

『遠いところ』

説明は大雑把だった。納得すれば良いのだろう、そんな言葉の見え隠れする乱暴なもの。

美しい金糸の髪は緩やかに波打っていて、相当使い古したらしいダツフルコートの上を彷徨う。絵画のような彼女の顔は何か絶望の奥にいるようなくすんだ色に見えて、私を見るその眼はまるで地獄を眺めているようだった。

今までを辿れば当然の帰結だ。私はそれだけ、彼女を困らせた。
『何をする』

『——貴方を診てもらおう』

彼女はそれだけ答えて、無感動な眼で私を見ていた。

左の眼帯の奥から底知れぬ恐怖。何かを隠しているのが滲み出ていて、私は威勢を張って毅然としていたが、背中に汗が流れている。

永い、永い女の観察が終わった。

『……………そんなに今が嫌？』

私は反射的に答えた、思考はない。

『嫌だ』

——何故、何も教えてくれない。

彼女もそれに驚かなかった。

『そう』

そして、何かの金属が檻に投げ込まれた。

暗い床を目を凝らして見ると、それは私が普段持っていた儀礼用のサーベル。彼女が右手に持っていたそれは、私の目の前に落とされていた。

細い刃が光る度に何かを試されているような錯覚をする。問いかけにも近い。

どうするのだ、そう尋ねられているようだ。

『——どうすれば良いか分からなくてね』

『分からないけど、機会はあげる。出たいなら出ればいい——後処理ぐらいなら、してあげるから』

その声は何度思い出しても、放任以上に申し訳無さに似た何かを含んでいたように思う。決して見捨てるような言い方だとは思えない。きつとそれが彼女なりの優しさのつもりだったのではないか——とまで言うとは、希望的観測かもしれないが。

もう今の私にとって『記録』でしかないものだからこそ妙な断言が出来るのだと思うが、彼女には私をどうすれば良いのかが本気で分からなかったのだ。

私もそうだ。自分の感情自体も、それをぶつけても平然としたよう

に見えた彼女もどうすれば良いのかよく分からなかった。

『好きにしていよいよ』

そう言つて踵を返した。彼女は一度たりともこちらを振り返つたりはしなかった。今度こそ見捨てられたのだろうか、そんな風に小さく心の何処かが呟いた。

とても遠くて。その背中が小さく見えて、意味もなく涙が出た。

——ああ、まただ。また、この人は困っている。

漸く分かつたのだ、彼女が私の言葉で苦しむことを。何よりも理解するべきであつた『他人の痛み』を、この時にやつと理解した。

今までの行動に説明がついていく。無邪気なつもりだつた質問が彼女にどれだけ罅を入れてしまったのか、私はどれほど意味のない言葉を重ねてきたのか。

言葉が出なかつた。

『ごめんなさい』

それを言うことが出来なかつた。今度こそ見捨てられたんじゃないかという疑念が、少しでも現実になる可能性が存在するのが——
——堪らなく怖かつた。

有耶無耶にした。私は愚か者だつた。

——それが、望みだというのなら。

私は誤魔化すようにその刃を手にとつた。それが望みであると、勝手な断定をした。

もう彼女と顔を合わせられなかつた、元より国に対する愛も忠誠もないのだ。導いてくれたかもしれない人は居た、だけでもう——私が手を伸ばすのを恐れてしまっている。

『やっとなら』

誰というわけではなく呟いて、その檻を砕いた。仮にも臙装の一種とされていた凶刃は、分子の結びを砕き、私と彼女の縁を断つた。

——次の私は、手遅れにならないことを祈る。

勝手に祈つた。

最後まで間違え続けた。彼女はそんな私のことを、ちゃんと――
――迎えに来てくれたというのに。

――目を開く。眠る直前まで感じていた彼の温もりはない、ただ皺くちやのままのベッドの上で私は眠りこけていた。

おおよそ状況を掴む。彼は起きたらしい、それを思うだけで酷く安心できた。心の底から誰かに待って欲しいと思ったのは、彼でたったの二人目なのだ。

霞む視界を整えて、起き上がる。

「起きたか、Z46――いや、フィーゼ」
後ろから声。

――記憶を辿るなら、グラーフ・ツエツペリン。あの人の秘書艦で、思えば一番気にかけてくれていた艦なのかもしれない。

「グラーフ」

「――記憶喪失だと佐藤は言っていたが？」

「思い出した」

そうか。と彼女は何をするわけでもなく落ち着いた様子で椅子に座って沈黙を貫く。

「いつ暴れるか分からない、とは思わないのか？」

「先程の様子を見てそう考えるほど荒んだ覚えはない」

顔が熱くなる。ああ、記憶から自然と消そうとしていたというのに。

――初めてだろうか、あれ程大泣きしたのは。しかも理由が顔見知りの男性が怪我をしたから、ではまるで――まるで、何だろう。それが事実なのではないだろうか。知らなかっただけで、今はそうなのではないか。

「グラフ、何かを好きになったことはあるか？」

「何だ、佐藤の事ならば無理ではないか？」

「な——何の話、だ」

「顔に出ているぞ」

わかり易すぎる、と溜息をつく。何なんだあなたは、少し質問をしただけだと言うのに。

分かった風な顔をされたのが気に食わなかったが、暫くした後に戻れた顔が薄い笑顔に変わる。

「……しかし、そうだな。好む好まないも何も、我は遍く全てを憎んでいる」

「壊れゆくものに一喜一憂しても仕方がなからう。万物はいつか死ぬものでしかなく、我々はシュヴァルツヴァルトを歩く虫の其れと何ら変わらぬ」

それは事実だが——言葉にしきれず表情が曇ってしまった。彼女の顔に絶望も、悲しみも見えないからこそその言葉が虚しくて仕方ない。

そんな悲しい考え方をすることはないだろう。それでは永遠がない限りは何にも執着できないということだ。

永遠など何処にもない。消失というものそれ自体ならば永遠となりうるだろうが。

「消えゆくものだからこそ、言葉を交わす刹那を愛おしく思うのではないか？」

そういうものではないのか、誰かを愛するというのは。

永遠に続く幸せが有れば素晴らしい、当たり前だ。それはきっと誰もが欲し、誰も得られない究極の在り方に間違いはない。

——だが。いつかは消えゆくものだからこそ。共に笑う姿が、共に涙する悲しさが、共に喜ぶ嬉しさが宝石のように輝くものなのではないのだろうか。

それは永遠では得られない、とても美しいもののはずだ。

グラフは驚いたように眉を顰める。

「随分と情熱的な恋愛観なのだ、フィーゼは」

「いやそんなことは——」

「面白い。獣のようだったあの少女にこうまで言わせるとはな……」

少し佐藤に興味が湧いてきたぞ、とクスクス笑われる。

——はつきりとは分からないが、これは恥ずかしいというものだろうか？

グラーフを今すぐ黙らせたくて堪らない。顔が発火しても驚かないぐらいに熱い。ハンマーで殴って記憶を奪い取ってやりたくなる。

「待て、拳を握るほどの事か？」

「ああ」

「即答か、ならば仕方ない」

「冗談だ」

「そうか」

何なんだ彼女は、まるで会話にならない。真面目に喋っているつもりなのだが。

——ふと、肩にかかっていたコートに気がつく。私は此処まで大きな物を着ている覚えはないのだから、多分グラーフのものだろう。

脱いで返した。

「感謝する」

「我ではない。彼女がかけてやれと頼いものでな」

受け取るなりよく分からない弁解を図る。それを言っただけでどうする。

——いや、無表情だから分からないだけで彼女のイメージアップを図ろうとしているのか？ 其れは良いがそこまで無表情だと意図があるのか無いのかも分からなくて対応に困る。

此処では扱いにくい人物とは出会わなかったから、いざとなると困惑してしまう。

「どうした？ 我の顔に何かついてるか？」

「いや、我という一人称に強烈な違和感を感じてしまうのだ………
すまない」

少し気落ちしてしまった。どうすれば良いというのだ……。

「それで、『命令』について知りたいってどういうこと？」

ソファに大きく腰掛けるなり、足を組みながら尋ねられた。

何でこのソファに座るやつは大体そうなるんだよ、態度がデカイにも程が有るぞドイツもコイツも。

——まあ愚痴は置いておいて、例のウイスキーボンボンを机に置いて向かい側に座る。

「ええつとだな………うーん、何処まで喋ったら良いんだ？」

「ああ、私酔っ払ったら大体忘れるから大丈夫だよ」

げっ、何で見抜かれてんだよ。得体が知れないよアンタ。

ってというか一応他国で酒飲んでしかも記憶混濁状態になるつてのに軽いな。

——俺が女だったら流石に警戒するが……。ああ、でも変に手を出しても俺の手が折れるだけか。

「まあぶっちゃけ信用できないから内容は選ぶ」

何が面白いのか、ウイスキーボンボンを一つ取った後に大きな笑い声。

ホント何が面白いねん。

「はつきり言われた方がコツチも楽だ、そういう喋り方は好きだよ」

「そりやどうも」

単純にアンタに隠し事してもあつさりバレそうと言うか。小野と喋ってる時は「人間」と喋ってる感じがしてたんだが、シユテルネという人物からは「人間じゃない何か」が時々匂う。

説明が難しいが、明らかに既存の生命体とは違う気配がすると言うか。と言つてもいつつもそんな感じな訳じゃないから俺の勘違いかもしれないが……。

「じゃあ、改めて自己紹介からしとくか」

コツプの水を一気飲みする。
「佐藤弘、指揮官。座右の銘は『仕事より趣味』、専用のダサTも持ってる」

「あれ、これ私も名乗った方が良い？」

「物語の都合としては」

アンタ不透明すぎるよな、一体何者なんだ？

「シユテルネ。多分鉄血だと三番目ぐらいに偉いかな、それぐらいの指揮官というか軍人」

「へえ、三番目——三番目!？」

何だそりゃ!?! 国の中でつて事だろ、それ日本で言ったら総理大臣に意見できるレベルの身分じゃね?!

何を今更、ときつきと打って変わって堪えるような笑い。何か男勝りなのか普通の女の人の人なのかイマイチ掴めないな……。

「国家機密レベルの艦を扱うのが下級軍人な訳がないでしょ?」

「ああ、確かにそうだな」

「やっぱりひーちゃん、あんまり軍人っぽくないね」

そりや実際軍人つてわけじゃねえからだろうけども。

そもそも民間人の感覚が上手く抜けてないのも有るし、何より軍人らしい軍人と接しないから軍人の感覚というのも知る機会がない。

櫻井さんは何かよくわからないし、小野は明らかにイカれたタイプだし。

「小野とかはサンプルにならなすぎてこうなるよなあ……」

小野、という単語に眼を顰められる。

「オノ? ヤヒト・オノとか言わないでしょうね」

「それ」

「——アズールレーンの会談に席持つてるよ、アイツ」

事の重大性が理解できてなかったらしく、固まっている間に肩を竦められる。

——ファッツ!?

アイツ何者だよ! いよいよ怖いんだけど!?

「何、その手の界限で有名人なのアイツ!？」

「というか個人的な交流が有るかな、最近はユニオンと仲悪いから連絡取れてないけど」

そりや偉いでしょう、とあつけらかんと言い放たれる。いや、そんな当然じゃんお前莫迦かよ、みたいな言い草されても俺が困るわ。

つていうか鉄血の偉い軍人ともコネクトが有るつて、アイツの人脈

どうなってるんだってか俺の世間は狭すぎやしないか？

一応仕事上の付き合いなんだろうがそれにしても広い。

——試しに何かゼーレ的なアレに出席してるアイツを想像してみる。

「会談中に堂々と居眠りしてそうだなアイツ」

シユテルネの顔がニヤリと歪む。そのヒラコー感有る笑い辞めてくれますか？ 普通に笑えば可愛いんだけどなあ……………。

「アイツが会談で喋るのは一度だけ。終了5分前—— 『誰でも良いから要約して5分で説明してくれ』 だけだからね」

「バカじゃねえか!？」

「予想通りいっつもふんぞり返って寝てるらしいよ、どんなに日程が崩れても5分前ピツタリに起きるんだとか」

何それ地味に凄いスキルだな、俺にも教えてくれよ。

っていうかやつぱり転生者じゃねえだろ、尋常じゃねえ非現実的なキャラ立ちしてるじゃねえか。二次創作を考慮しても現実の人間にしちゃぶつ飛び過ぎだよお前。

「居眠り男napperって渾名で有名だし」

「小野。お前、ヘタレ君どころかふてぶてしいバカだな!？」

俺はもつと常識的なキャラだと思ってました！ ガッツリ二次元に染まってんなてめえもよお！

——うっすらと「佐藤さんに言われたくはない」と言われたような気がしたが気のせいだ。うん、アイツもう帰ったはずだしな。

「最近は内容を軽くプレゼンする役職が設けられてるらしい。全く、豪華だねえ」

「超国家軍事連合の予算を無駄遣いするなよアイツ」

名前負けする使い方じゃねえか。そんな下らないことで人件費を使わせるな、いよいよ税金の無駄遣いとか怒られるぞ。

——まあ、何でそんな事してるのかは大体予想がつくけど。

「どうせ『俺に堅苦しい仕事は向いてないんで』とか言ってるんだろ?」

「そう、それ。と言いながらパイプは有るんだからただの放任という

わけでもない——掴み所がないよ、アレは」

まあ最後まで何をしてるのかも、何がしたいのかもよく分からない奴だった。

案外、アイツの動きが後々響いてきたりしてな。

——あ、これモロフラグだわしまった。でも真面目に何してたのか全然把握してないからフラグだと分かっても意味がない！

「ちなみにエンタープライズは知ってるのか？」

「ああ、実質アイツの奥さんの？」

「当人達的には違うらしいぞ」

「ウソでしょ」

アイツラ恋愛観が高校生ぐらいでストップしてるみたいだからね……。何だろうね、別に意固地になるポイントでもないと思うんだが。

いんじゃないの、艦と結婚。

——俺の思考が透けて見えただのか、頭を乱暴に搔いてこちらに説明が入る。

「まあ指揮官の性質上、変に手を出したくないんだろうね」

「それは——まあ、そうか」

困ったもんだな。

「ってそうじゃなくて、本題入ろう」

「そうだったそうだった」

あの二人は弄りどころが多すぎてつい、ね……。

姿勢を整えて、水を軽く飲む。よく見たらもうウイスキーボンボン5つも食ってる、既に酔ってるんじゃないのかこの人。

「で、要するに何が聞きたいの？」

「何って言うか、もう全部一から」

全部、と復唱した後小首を傾げられる。

小野の情報を頭ごなしに疑うわけじゃないが、人それぞれ知っている領域なり強く理解した分野なりが存在する。

やっтерること言えば、分からない単語の語義を複数の辞書で調べているのと同じことだ。

「一から、ねえ……………長いよ？」

「ああ、もう全然構わん」

そろそろいざって時に備えないと不味いからな。

——いつまでも逃げられそうにもない。事情を把握して、理解して、対処する。そのプロセスはもうどうにもならないくらい、俺の目の前に壁としてあるのは間違いない。

「この大所帯の飯を作るのは初の試みである」

食堂に響く厳かな男の声。我が美声とは思えん、俺って真面目に喋るとこんな声なんだふーん。で、俺はCV誰なんだよ結局。

メンバーは従業員を除くと三人。翔鶴と、後は妙に手伝いたがったフィーゼちゃんのみ。

食堂の御方は今日は貸してくれるとのことだ。マジでそれで良いのかよって聞いたたら「料理がしたいです……」って深刻な顔で言われた。バスケがしたいですに二回空耳して聞き直したから相当好感度も下がったかもしれない。

というわけで、この機会を活かす責任が俺にはのしかかってきている。

「よって補助員に料理ができると勝手に断定して翔鶴」

というか確か出来たよな。ゲームと設定が全部一緒かは知らないけど。

「そして謎に乗り気なフィーゼちゃん——この三名で計……えつと、一、二」

「六人ですよ」

「そうそう、六人の食事を作る」

流星に俺一人じゃ全員分用意し切る前に料理が冷める。それは良くない、俺はよく分らんが料理は冷めると不味いんだろ？ じゃあ駄目だ。

特にグラフ・ツェッペリンとかいうあのデカイヤツ。どれだけ食うんだよって感じた。

「諸君、俺は料理が好きじゃない」

「諸君、俺は褒められてもフーンとしか思わない」

「諸君、俺は料理は生活スキルとしか思わない！」

「この台所で行われるありとあらゆる料理が——別に作りた
いとは思わないッ！」

いや別に料理好きじゃねえよ。単純に懐柔する——ゲフンゲフン、親睦を深めるのに一番手っ取り早いだけだ。

例えば野球でいいなら野球をするし、掃除でいいなら掃除をしてやる。行為そのものに何の意味も見出してない。

今回もせっかくだから飯食う、とかアッチが言い出したからだし。

「美味しい料理を望むか？」

「単に量が多いだけの大味な料理を望むか？」

「風味絶佳の究極を突き詰め、三千世界の美食家を唸らせる魔性のよ
うな料理を望むか？」

翔鶴がボソリと

「いえ、正直別に其処までは」

フィーゼちゃんが不思議そうな顔をして

「食べられれば満足だ」

知らぬ。

「よろしい！ ならば——料理だ！」

この後めちやくちやヤケ食いました。

十三話

「荷物持ってきたし、今日からしばらく此処に泊まるよ」

「はあ!? 帰れ!」

夜の廊下にサトーの発狂気味の絶叫。もう寝たらしいしズイカクとかに迷惑じゃないかな、それ。

其処まで言うこと無いじゃないか、別に部屋に押しかけると言ってるんじゃないんだから。

ご飯美味しかったしね、丁度ホテル代ケチりたかったのも有る。安い所に泊まるって言ったんだけど国の方から「お前それは地位的に勘弁してくれるか」と言われちゃどうしようもない。

——別にそれを気にするような国民性じゃないし、Mediaで私が変わり者って話は伝わってる筈だけど。

「良いじゃないか、美女が増えるわけだし」

「自分で言うなっていうか俺は平穩に低月給になりたいんだから帰って! お金あげるから!」

相当だなあ。まあお金なんて腐るほど有るしそれで引き下がらないけど。

——人畜無害な空気感はあるけど、何だか変だ。どうやらサクライのお気に入りのようだけでも、アレがマトモに人に肩入れするなんて事自体が気味が悪い。

それに持つてる情報量が着任して一ヶ月の其れとは思えない。

危険とか不穩とは違う。明確に私と違う世界観に生きてるような匂いというか。見えてる世界、なのか本当に生きてる界隈が別なのかは分からないけど。

「まあまあ、コネは持つて損はないよひーちゃん」

「そのコネを使う機会自体を減らしたいんだよ俺は……………」

ホント逃げるなあ。とつくに雁字搦めに見えなくもないけど。

オノを知つてて、サクライの支援を受けてる状況自体が相当危険なんだけど……。まあ、変に情報を出しすぎても駄目か。

反応も読めないし。話を聞く感じだと面倒事が嫌みたいだけど

フイーゼちゃんを普通に保護してたり立ち回りが下手というか奇妙
というか。

——これがワザとやってるのか、単純に無知なのかすら不明瞭。面
白いから別に良いけど。

「フイーゼちゃんを今すぐ連れて帰るのも色々酷だしね、また嫌わ
れたら困る」

「——？ いや、別にアンタのことを嫌ってるって感じには見え
なかったが」

嘘をつけ。食事中も目を逸らされたし。

まあ散々な扱いをした事自体が消えたわけじゃない。記憶喪失と
は言っても印象ぐらいい頭の隅に残ってるだろうし。

「食事中はグラーフさんが必死に話題作りしてたような気がするけど
……………」

「あの娘の必死とかそうじゃないとかは正直私はよく分かんない」

私が言うのも何だけど雰囲気は他と違いすぎる。つまんなそうに
バンドの事を喋ってるなあと思ったら後でオイゲンちゃんから

『いや、アレ凄いいお気に入りみたいだけど』

って言われたこと有るし。何考えてるのかちよつと本気で分か
らない。

「喋る時だけ足とか手を組み直したり動きが忙しなかったし、話題選
び自体も二人共参加できそうな感じのじゃなかったか？」

「へえ、そういう所に出るんだ」

よく見てるなあ、というか私が見てなさすぎかもしれない。

軍事的な事以外はからつきしだからなあ、父上殿もマトモに社交術
は仕込んでくれなかったし。

——まあ、悪い人ではなかった。私に汲み取れない形だっただけ
で、アレはアレで懸命だったのだろうというのは分からなくもない。

合う合わないなんてどうしようもない。私はどうしても合わな
かっただけ。

「……………何か達観してる所とそうじゃない所が極端だよな、アンタ」
「よく言われる」

「所々が10歳で止まってるんじゃないか？」

大体当たり。あの日から頭自体は多分止まってる。

何だろうなあ、それこそ形だけの知識とか戦闘とかを急ぎ足で詰め込まれた分の皺寄せみたいな感じなんだろうか。

思えば軍人になるまでの記憶は酷く薄っぺらい。机の感触よりマグナムの感触の方がハッキリ思い出せる程度。

「まあ27だろ？ 男は見つけようぜ」

「そういう話は年上に向かって辞めなさい」

「年上、年上ねえ……………」

明らかに同年代かそれ以下だと思われている。何でだろう。

———とか本題を忘れてた。

「そうだそうだ、フィーゼちゃんだけどしばらく預けていい？」

「いや、別に良いんですが……………」

ああ、こっちの事情も考えてるつもりなのか。

まあ機密情報扱いだしね、重桜の普通の指揮官に預けるっていうのはパット見かなり頭のネジの飛んだ行為に見えるのは間違いない。

「どっちみち、記憶喪失が何とかなるまでは連れて帰っても問題なのよ」

「懐いてるみたいだし、サンプル提供さえしてくればそこまで問題は無いよ」

というかむしろコチラの方が対外的に都合がいい。

何せ最近ちよいちよい問題になってる『命令』を受け付けない艦、に対する打開案のPrサンoプルbルeという扱いになるわけだし。

実際記憶喪失のせいなのかよく分からない所も有る。

———まあ、そこも探ってみようか。

「ねえ、着任して一ヶ月ちよつとだっつて言ってたよね」

「ああ、まあそれぐらい」

「他に艦は居ないの？」

ずつと気になってたんだよね、『あまりに数が少なすぎる』というか。

性急に頭数を揃えれば良いものじゃないのは分かる。指揮官と艦

のK o m m u n i z i e r e n も大事だからね、ぽこぽこ数を集めたら指揮官が胃に穴を開けかねない。

というのを踏まえてもこの数は少ない。数週間もしたなら一艦隊分ぐらいの配属はされてるはず。

一体何が理由でこうなってるんだか。

「居ないけど」

「着任予定は？」

「櫻井さんはまだはつきりとしないうって」

これもおかしい。確かに建造は安定する作業ではないけど、ある程度までは日程は決められるしこんな遅いはずがない。

着任させる艦が恣意的に選ばれている——しかも、選ばれる理由は今の技術だけではあまり制御できてないのかもしれない。

不定期ってことは何か特殊な艦の可能性が高い。

要するに、サトーに回される艦には何か選別される理由が有るということになる。本人がわかってないんじゃないじゃ確かめようも無いんだけどね。

——サトー自身が、じゃないんだなコレ。彼の後ろで何かが蠢いてる。

「ふーん。っていうか演習とかどうしてるの？ 頭数が足りないよね」

「え？ 毎回免除の手続きみたいなのに判押ししてる」

思わず顔に手を当てる。

あちやー。これ本人がよく分かってないやつか、困ったなあ。

「何だよ、おかしいなと言ったか俺」

「だいぶね」

どこまで教えて良いのかな、何か下手に教えたら面倒事が起きそうだ。

——まあ取り敢えず、普通は知ってる筈の情報だけは提供しておくか。これは普通に善意のものとして。

「あのね、重桜の演習って基本的には義務化されてるのよ。だから免除も何もない」

「でも数が足りない事もあるんじゃないのか？」

結構基礎から分かってないのか。サクライ、が上司なのかな。

アイツが敢えて教えてない？

「あのね、だから此処は鎮守府として運営されてるのが認められる頃には最低限の頭数は揃ってるはずなの」

「そもそも数週間経って二隻だけ、っていう状況自体がおかしいの」

大体フィーゼちゃんを除いたら前衛艦が居ない状況だし。普通前衛も一隻は配属してる。

——段々と奇妙さに気づいてきたのか、サトーの顔付きが気分の悪そうなものへと変わっていく。まさか誰も教えてあげてないの、これ。

「そして鉄血の私でも知ってるような事も書いてない資料を渡されてるのもおかしい、っていうか最低限の指導は民間採用でも入る筈だし」

「纏めるとね——ひーちゃん、面倒事に最初っから巻き込まれてるんじゃない？」

平穩も何も有ったものじゃないね、これ。

恐らく本人が直接接触される以前からヒロシ・サトーは何らかの尋常じゃないことに巻き込まれてるって事になるわけだし。

何かふらついてる、ストレスに弱すぎるねホントに。

「冗談だろお……………」

「一応コレで親切心のもりだから冗談でも嘘でも無い」

嫌いな相手ならともかく、サトーは普通に嫌いじゃない。ちよつと逃げ腰は気になるけど、悪い人間でもないし。

そもそも嘘を言っても私に何のメリットもないというか。

「どういう事だよ……………」

部屋に戻って適当な書類を眺める。手にとったのは「出撃及び委託の免除手続き」の書類。

——言われてみれば適当にスルーしてきたが、「免除」という文字のついた書類を多く見かけた気がする。

確かにおかしい、数週間も経つたのに此処まで免除を受けるような鎮守府がそうそう有るはずがない。

俺は何もしていないのに、艦は少ない。

「つていうか、最初からおかしかったのかもなあ……」

言われてみれば最初から変だった。

——俺は強制的な民間採用の話なんか聞いたことがないのだ。

二次創作で見たことが有る流れだからそうだと思いきや、実際当たったけれどそんな話は全く聞いたことがない。

そんな重要なことを何の前情報もなしにいきなり始めるだろうか？ そんな訳がない、大本営はこれ以上世間の印象を悪くしたいわけがない。

冷静に考えれば俺の経緯は奇妙なところだらけじゃないか。

「ふーむ、どうするかね」

椅子にもたれかかっていると回ると回ってみる。景色が回転するほどに俺の頭も回転、急転、とうとう混乱。

——今更分かってどうすれば良いんだコレ。

何となくでスルーしてきた事がどんどん山積みになっていた。サボり方を、間違えた。

これは不味い、かなり。

何故他の重桜の指揮官と会う機会が無いのかもそれで説明がつく。

俺は何らかの形で差別化された特殊な運営をしていて、それが露呈するわけには行かなかつたからだ。

考えるほどに思考がぐるぐると回り続けるが結論は見えてこない。ただ降ってきた問題を拾い上げるだけで俺はヒイヒイ言っている。

——突然ノックの音。

「どうぞ」

しかしノックをするような礼儀正しい奴が——。

「また椅子で遊んでる」

瑞鶴だった。何だよ。

「フイーゼちゃんだと思ったのに」

「私じゃご不満ですかね!？」

眉をヒクヒクとしながらこちらに歩いてくる。うわこわ。

「ノックをして入るなんて瑞鶴も成長したなあ」

「もしかしてバカにされてる?。」

「いやバカでしょ」

うわやめろやめろ。すぐ抜刀しようとするなお前は江戸時代の侍か。

本当に抜刀されたことはないが、最近いよいよデンチューされる可能性が出てきてオジサン怖い。

——さて、色々カットして俺達の戦争が終わった頃合い。

「で、何の用だよ。夜更かしは美容の天敵って何か言うんじゃないの?。」

もう夜の11時だ。早く寝ないといよいよ美容がですね……。

でも美少女って肌荒れるのかね、俺は荒れない説を推していきたい。だって夢があるから。

「まだ作業してるの?。」

「そうやぞ、残業は無能の証拠。よく覚えとけ」

知ってる、と半笑いで言い捨てられた。テメコラ。

最近いよいよコイツ失礼になってきたな。そろそろ教育行つとく?。行つとく?。

クソ、種田梨沙ボイスじゃなければ札束で殴りたくなってるぞ。

「どうせまだやるんでしょ、なにか作ろつか?。」

「お前天ぷら以外で作れるもん有るの」

「わかんない」

よくそれでそんな事を抜かしよる。

お妙さん顔負けのダークマターとか図り間違つても作るなよ。お前はそういう事を成し遂げかねない匂いがする。

まあ、だが腹は減ったな。最近チョコチツ〇クッキーも食べてないから菓子も不足しておる。

「じゃあ何か、食えたら何でも良いよ」

「分かった」

流れるような動作で扉に向かって歩いていく。

——まあ、こういう時しか言う機会無いな。

「なあ」

「何」

うわ、素っ気な！ まあ良いや。

「えーと、その、アレだ。いつも有難う」

こういう時に言っておかんと冗談抜きでタイミングに困る。

おい固まるな、何か恥ずかしいぞ俺。

——すぐに顔を引き締め直して、と思うと何だか諦めたような笑い顔で溜息をつく。

何だか気落ちしたようにも見える表情は、暗に俺に尋ねて欲しがっているようにも取れた。どうしたんだ、何か有ったのか、とか。

「これぐらいしか出来ないし、ね？」

出来なかった。俺は普通で、それで誰かの悩みに触れるのは凄く怖かった。

漠然とした不安だ。何が不安なのかもわからない、でも其処に踏み入って良いのかを凄く躊躇ってしまうようなそれ。

妙に淋しげな横顔のまま、瑞鶴は扉を締めた。

ボタンという音が妙に耳に残って気持ち悪い。アイツの顔が妙にフラツシュバツクして嫌な気分になる。

——何だよ、それ。

「何か悩んでんならちやちやつと言えよな……………」

まあ、俺も一緒か。

全部正直に、なんて誰も出来ないもんだ。

「やっぱり好きなんじゃないの、瑞鶴」

いや絶対違う。もうそれを考えるだけで他人に見せられないげんなりした顔になるし。

——勿論一人でやったことのない料理をする気概もなく、コレ自体翔鶴姉の差金だったりする。

まあ料理したかったのも有る、一人でやるのって妙に勇気がいるっていうか。レシピもないし。

「何というか、頼りない親戚のおじさんみたい」

「妙にリアリティが有るわね」

自分でも思った。でもしつくり来る表現がそれくらいしか無いと思う。

ぼんやりと手を洗っていると、要らないことばかり考える。

——最近は人数が増えた。翔鶴姉然り、フィーゼちゃん然り、あの鉄血の二人もそうだ。

漠然と一人でも何とかなっているつもりだったけど、よく考えたらこんな事も一人じゃ私は出来ない。

「瑞鶴が一生懸命してる、それだけじゃ駄目なの？」
「え？」

横に立っていた翔鶴姉にふいにそんな事を言われる。どうやら考えていることはお見通しらしい、今日の態度に出ていたのかもしれない。

——まだ気づいてないかもしれないけど、指揮官は約一日寝たきりだった。多分明日辺りに時計を見て凄い形相で走り回るんだろうなあ。

右腕がしばらく動かないだけで済むと言っていたけど、それが私にとっては大問題だった。

肝心な時に私は出遅れた。居なかった。今回は何とかなつたけど、次もそうだななんて誰にも言えない。

——もし、次こんな事が起きた時に。私はちゃんと指揮官の横で、出来る限りのことをしているのだろうか。

予想外だった。あの人に限って庇うだなんて、と少し驚いた。

そういう事をする人だということが分からなかった。たかだか数週間、されど数週間はずっと横に居たのにそれが分からなかった。

「どうだろ、結果が大事じゃないのかな。結局は」

作業に入った。翔鶴姉の指示に従って手は勝手に動いてくれた。

——凄く、心配だった。

想像すれば分かるけど、血まみれの人間ってその見た目だけで正気を奪われそうになる。私は特にそういう経験がなかったのも有ったから、あの後はただあたふたして泣いてばかりだった。

翔鶴姉とグラーフ・ツエツペリンが応急治療を終えて、医務室に運び込んでいったその頃になってやっと「何もしていない」事に気づいた。

「そう？ やったことはしなかったことより絶対的に価値があるけど」

「するのは当然だよ、それからどうなったかだと思う」

これじゃまた目の前で誰かが居なくなる、それはこの一日ですつと頭の中で渦巻いていた。

弱すぎる。心も力も足りない、目の前にいる誰かを守りたいだけなのに——それも出来ないくらい、今の私はちっぽけで弱い。

これで『グレイゴースト』に勝つ方が難しい。アイツはもつと色々なものを背負って、戦って、勝って、護って来た側なんだから。

「ストイックね、瑞鶴は」

「現実主義者なんじゃないかな」

結局グラーフ・ツエツペリンは艦載機を積んでいなかった。でももしかすれば、私だけじゃそんな奴にすら一手が届かない可能性がある。

——もつと。もつと強くならなくちゃいけない。

それが本分で、私に出来る唯一の事だから。

「入るよ」

「あいどうぞ、ってか気持ち悪いよお前」

失礼過ぎる。

まあとにかく、と瑞鶴は扉を開ける。珍しくペンを持って書類とにらめっこをしていたのだが、すぐに瑞鶴の方を向いて何時も通りの何

だか覇気のない笑顔。

アレは一応取り繕っているものらしかった。

「お、ホットケーキか——って夜食には重いな……はは」
「良いじゃない、さつきもあんまり食べてなかったし」

バレてたか、と頭を掻いて誤魔化す。彼は実際のところ、中々無理をして今も起きていた。

アレだけ血がなくなった翌日なのだから体調が良いわけが無い。それは瑞鶴の目から見ても明確に分かるほどだった。

「別に急ぎの書類はないって翔鶴姉言ってたけど、何で今やってるの？」

「ああ、ちよつとな………」

適当にはぐらかすと、瑞鶴は不満そうな顔で書類に向かう彼を見る。いつまで経っても相談という言葉を覚えない佐藤をいい加減じれったく思っていた。

——まあ、私も一緒かな。

全部正直に、なんて出来れば誰も苦労しないだろうし。

「それじゃ食おうかね」

「どうぞ」

食べ始める彼を見ながら、瑞鶴はぼんやりと翔鶴のことを思い出す。

一緒に来たなら良い、と言っても気味の悪い笑顔で頑なに断られ、結局一人で来る羽目になった。何を期待しているのかあの姉は、と瑞鶴も少し呆れたものだ。

仕方なくソファに腰掛けてウイスキーボンボンに手を伸ばすとすぐに鋭く制止の声がかかる。

「食うなっつってるだろうに。休日にしろ、俺が面倒くさい」

「バレちゃったか」

にへへ、と茶目つ気を見せながら笑うが佐藤の顔はげんなりとしている。あの日のことを思い出したらしい、アレはたしかに悪夢だった。

食べるものもないのでウイスキーボンボンを物欲しげに眺めている。

ると、突然瑞鶴の中に奇妙な興味が降ってくる。

——何を期待してるんだか、ね。

「ねえ、指揮官」

「なんふあよ、ほつほへーひくつへるんはへほ」

「私のこと、どう思う?」

佐藤が吹き出しそうになるのを必死で抑えて、置いてあつた水でホットケーキを無理に飲み込む。

けほけほと咳き込みながら口元の水を拭った。

「何だいきなり、頑張る娘だなくらいのもんだが」

「そういう意味じゃなくて」

「は?」

佐藤は頭に大量のクエスチョンマークを浮かべながら改めて瑞鶴の顔を見る。

いつもより何処か色っぽい表情に見えて思わず顔を振る。

——目の錯覚だろ流石に。

それは流石に酷いと思うが。

ゆつくりと瑞鶴が歩いてくる。何だか彼にはスローモーションに見えてちよつと気持ち悪さすら感じてくる。

「何、何怖いんだけど」

「ねえ」

佐藤は一步步歩いてくる度に嫌な予感に心臓が爆発する勢いで飛び跳ねる。

——何だ、酔ってるのか!? 酔ってるんだそうなんだろうお前え!

しかし火照っている様子はない。前回の様子とは全く違った。

「本気で聞いているんだけど」

「ど、どういう意味ですかね……………」

とうとう横に立たれる。佐藤は逃げようとするが、妙な空気感に毒されて足がうまく動きそうにない。

さながら蛇に睨まれた蛙そのもの。毒牙が瞬く間に蛙に突き刺さる。

ゆつくりとした動作で耳元に顔を寄せた瑞鶴が、妙に艶っぽい声で

「こういう意味」

と呟く。

いやに艶めかしい動作で佐藤に寄りかかってくる。ドクン。ドクン。心臓の音が聞こえ続けて何回だったろうか。瑞鶴の顔を横目でちらりと見るが、気味の悪い胡乱な表情のままでも何もしてこない。

彼の返事一つでどうとでもなりそうな勢いが有った。彼もそう思った。

ちらりと姿を見る。

心臓がうるさくて、妙な高揚感を覚えて、そして――

動揺しながら比較的穏やかな動作で肩を突き放す。

「や、辞めろっての！ 冗談でも俺が本気になったらどうするんだ馬鹿！」

顔を真赤にしながら佐藤が怒鳴りつける。

さっきの艶美さ何処へやら、その途端に瑞鶴はいつものからかう時の笑い方に戻る。

「あれ〜？ 今一瞬本気だったよね？」

「ん、んな訳あるかあ馬鹿者お！」

佐藤が時間も考えずに怒鳴り散らす。相当動揺しているようだった。

――危なかったよ、佐藤の中の佐藤がヤバかったよ!?

しかし彼は「絶対に手は出さない」と最初から決めているのでそれは無理な相談であった。

「もう一回言うが本気になったらどうするんだよ馬鹿！ もっと自分を大切にしろって！」

「まさか指揮官に負けるほど私弱くないし」

困り笑い混じりに言われて確かに、と佐藤は目を丸くする。

——だからってそういうことする!?! ある意味信用してたのに!?!
彼の中での瑞鶴像がひび割れた。

「クソ、お前やっぱり翔鶴に似てる! きらい!」

「ごめんって〜。冗談だからさあ」

しばらくこの問答が続いたが、もうお腹いっぱいなのでカットである。

その日の夜は、結局二人で他愛もない話を続ける内に徹夜となったのがオチである。

I c h l i e b e d i c h .

——夢というか、記録のような何かだった。

火煙で視界が灼けるような景色の中で、何人かが佇んでこちらに背を向けている。何だこれはお前らはバディものの刑事か？

見覚えのある背格好も割といる。小野、エンタープライズ、シユテルネ、グラフ・ツエツペリン——もう二人いるけどお前ら誰？
新キャラ決定なのかな？

それで俺が割と中央の方で珍しく背筋を伸ばして立っているわけだ、うわーなんと痛々しい夢か。もう俺のライフはゼロだから勘弁しろ。

どうにも気になるのはその痛々しさもそうなのだが、みーんな秘書艦が居るっぽいのに——俺だけ隣にも、後ろにも誰一人居ない。真面目な顔して立ってるのに、誰一人。

そこだけは気味が悪かった。今まで内心バカバカしいって笑っていたはずなのに、その事実だけは少しでも気を向けると気分が悪くなる。心が重くなる、嫌になる。

しかも俺が真面目な顔をしてたときってのは、思い出すとそう多くない。

優秀で良いやつだった部下が辞めていった時とか、姉貴が突然家出した日とか、じいちゃんが死んだ日とか。

大体身近な何かが変わった時だけは、俺は大真面目な顔になる。正しく言い直すとこの空気が保てなくなる。

夢ならばそれで良い。悪い夢だったなーで終わり。

けれど俺が居るのは物語の上。誰かの手のひらの上で、俺は踊るピエロの側で。

——本当に、ただの夢で済むのか？

ぶげっ。顔面が床にぶつかった。

「さあ起きろひーちゃん！ ラジオ体操するぞ！」

「まだ六時だし眠い……………バカじゃないのか、このバカ……………」

もうバカだよアンタは。いい年して何がラジオ体操だ、そんなもんは小学生のあのヘンテコスタンプ貰うためにやるか暇な老人だけがやるんだよ。

布団を引つ剥がされて床に顔面衝突したらしい。つていうかどうやって部屋に入ってきたんだよ、鍵かけてるんだけど。

「よしグラーフちゃん、このぐうたら男を悩殺して頂戴な！」

「最近振りが破壊衝動を帯びてきているな……………」

グラーフの溜息。分かるよその人バカだもんね、もう小野と同類なの俺は察したからね。

つていうか朝から付き合わされて大変だな。正直俺つてこういうのに比べればよっぽどマトモな指揮官だよね、仕事しないというただ一点を除けば。

グラーフの息を吸う音。え、何マジでなにか言うの？ 流石に茅野愛衣ボイスで悩殺狙われると俺も起きざるを得ないと言うか……………。

「フイーゼ、これがこの男の実態だ。実に情けないと思わぬか？」

「ああ起きてるよ俺、フイーゼちゃんグラーフに騙されないでね！」

——居ねえじゃねえか！

「謀ったな!?!」

「フツ」

「フイーゼちゃんも見る目がないね……………」

笑うなあ！

「あのデコボコフレズは何でふつつうにラジオ体操知ってるんだ……………」

「グラフが言うには指揮官はラジオ体操に『ハマっている』そうだ」
趣味おかしいよ絶対。つてかフィーゼちゃんはなぜそんなイミフ
情報を握ってるんだ怖い。

確かに朝食も心なしか食ってて気分がいい気はするけどもさ、でも
俺はしんどい。

「朝弱いんだよ……………」

「とはいえサトーは不健康だぞ?」

うっ! 聡明な幼女にそう言われるといよいよ反論の余地がない
し辛い。

まあ元はといえば今ここに居るのも朝起きるのが妙に遅いせい
だったりするし実際正論なんだけどさあ。

——つていうか指揮官ね。ふーん、ふーん??????

経過順調ですな、頑張れグラフ。俺はシヤ?ス無理だから蚊帳の
外でヨロシクウ!

「ニヤニヤとされると少し怖い……………」

「ああいや別にフィーゼちゃんに良からぬことをとか」

聞き捨てならない、と遠くから走ってくる音。元気やなあ君——

ーん、なんだあの白いシルエットは。

俺が目を白黒させながら視界情報から逃げていると……………えー、
誰フィーゼちゃんに抱きついてる女。記憶をたどる限りだとすっげ
え翔鶴に似てるなあ。

「……………ええつと翔鶴。何、お前もロリコン? アーク・ロイヤルし
かないなかったのか此処」

「ちっちゃい子はちっちゃいから可愛いんです!」

おう概ね同意だ。だがお前が言う俺より犯罪臭がする。

頬ずりするな気持ち悪い、いつからお前までロリコンになってし
まったんだ。

「凄く幸せそうな顔の所悪いんだけど、ちなみに俺はなーんにもして
ないぞ」

「え」

「は?」

———すごい勢いで消えた。何アレ。

取り敢えず困惑気味のフィーゼちゃんの身の回りをチェック。盗聴器とかはないね、オツケー。

「アイツはどこからやってきてどこへ消えていくんだ？」

「翔鶴は少しだけ怖い。喋っていても瞳の中に私が映っていない気がする……」

あそこまで来るとまあ偶像化してるだろうしその直感は大当たりだね。にしてもあの姉妹、何だかんだ変な所はよく似ている。

食事に戻る。目玉焼き美味しい、コーヒースッキ。

「ああ、サトー。報告したいことが有った」

「ん、どうしたの」

「許可さえ貰えれば暫く此処に居たいのだが、構わないだろうか？」

がたつ。思わず椅子から立ち上がる。

それは不味い、かなり不味い。

「フィーゼちゃん、それは辞めておこう」

「どうしてだ？」

「この際ぶつちやけるが俺もあの鶴バカ姉妹もロリコンだ。危険だ」

「今更だな」

くそ、バレていたか！ 分かてるならちやっちやか逃げてくれ！

「それは構わない」

「待て、危険だ」

「……………私が居ては、迷惑だろうか」

いやそんな涙目にならないで、そういうのじゃないから！ 一応優しさだからコレで！

それにシユテルネさんとも揉めっぱなしは良くない。お互いに歩み寄りはなくもなさ気なんだけど、このまますれ違いっぱなしも殺生過ぎる。

問題を放置していると俺みたいにダメ人間になるぞ。ヤバイぞ、今首回らないし。

「分かった、分かったよ！ シユテルネさんとちゃんと話をしてからだったら別にいいから泣かないでくれ！」

「そうか、ありがとう」

嘘泣きい!? 何時からそんな小悪魔になったんだ!

絶対グラーフだ、アイツが変なことを仕込んだんだ許さねえ。俺達のフィーゼちゃんに妙なこと吹き込みやがってチクショウがあ!

——へつくち!

遠くからくしやみの声。

「……………風邪を引いたか?」

「どうせサトーが噂でもしたんだよ、ねえ?」

なんで分かるんだあの人。怖いよ何なんだよ!

こつちに張り付いた笑顔を見せるな怖い怖い!

「サトー、彼女との一件を放置しようというわけではない。それは心配しないで欲しい」

そんな俺の絶体絶命はどこ吹く風、フィーゼちゃんはこちらに普通に話しかけてくる。

「え、ああうん! お、俺気分悪いから仕事に戻るね!」

「文節が滅茶苦茶だぞサトー」

あの人親バカだ、変に悪くいうと殺される!

「ふーん、上手いききそうなの?」

「ああ、後はあなたの許可だけだ」

そりや良かった。っていうか何でサトー逃げたんだろ、普通に「あの二人微笑ましいいなー」ぐらいで見てただけなのにね?

フィーゼちゃんは私と目を合わせてくれない。そりやそうだよな。

——っていうかグラーフちゃん居なくなってる。いつもの事だけど行動が読めない。

「……………別に良いよ。元々そういう予定だったし」

「え?」

「ひーちゃんにはちゃんと話したよ? 聞いてないの?」

アレで話は聞いているタイプだと思ったんだけどなあ、忘れてるなら

また言っておこうか。からかうの面白いし。

——まさかわざわざ喋るキツカケ作りのつもりで言ったとか？

まさかね、そんな頭を使っているとは流石に思えない。やる気がある時と無い時はすぐに見分けがつく。

「戻らなくて問題はないのだろうか」

「うん？ いや、バリバリ有るよ？」

「では、どうして」

どうして？ どうして、ねえ。

罪滅ぼしのつもりなのか、偽善者ぶっているだけなのか、それともいつもの気まぐれなのか。人間なんて理由のつけられない行動の方が多いし、今回もそういうものなんだろう。

特に理解しようとは思わない。こういうものに逆らうのが無駄な時間だと知っているだけ。

——ただ。申し出た本人にこう不安げな顔をされては、まあそれなりの理屈を適当に喋るしか無い。

「これっていう理由はないけど、私は基本的に自由に生きてる」

「だから私は他人がやることにとかくは言わない。それだけかな」

以前はどうだったかと言われると、結局『道具扱い』だったに限る。

切れ味の悪い刃物は研ぎたくなるし、破れた手帳は買い替えたくなくなる。そういう感覚だったのだろうと思うし、そうじゃなければあの程度の駄々で憤ったり悩んだりすることも無い。

要するにようやく『人格』を認識したということになるか。元々有って、触れてきたものだったのに本当に今更。多分、敢えて考えることから逃げていた。

「しかしあなたは困るのではないのか？」

「そりゃあねえ。言い訳は考えてあるけど久しぶりの職権濫用になり

そうだ」

「どうしてそこまでしてくれるのだ？」

何だかさつきと同じ質問な気もする。

結論から言うと特に理由なんて無い。例えば今すぐ連れて帰ってすぐに使い物になるとは思えないとも言えるし、サトーと居ることで

なにか良い事がありそうだ——みたいな支離滅裂な理由もある。

数個なんてものではなく、沢山ある。そのどれもが重なって偶々、今こう言っているに過ぎない。

「前々から思ってたけど、やっぱり物事に理由が欲しい?」

少し考える仕草をした後、あの時と同じ煌めく金の瞳。

「あなたはおかしな人だ」

「的確にメンタルを抉ってくるね……………」

「いや、そういう意味ではなく私には分からないという意味だ」

あんまり変わらないよそれ。

フィーゼちゃんは珍しく言葉を選びかねるように視線を泳がせては、思いついたように喋ろうとしてまた口を閉じる。何かよく分からない表現が有るらしい。

聞いてみようか。

「どうしたの?」

「言葉にできない」

「じゃあ箇条書きみたいに言いたいことの要素を並べてみれば?」

そうだな、と納得したらしき返事。

「どうして迎えに来てくれた?」

「どうして何も言わない?」

「どうして我儘を咎めない?」

「どうして———まだ、優しくしてくれる?」

「優しくなんて出来てないよ、私は」

「違う、あなたは以前から優しい人だ」

はつきりとした否定に思わず眉を顰める。予想外だった。

——優しいことなんて何も出来ていない。

疑問は放置した。問題は棚上げにした。原因は他人のせいにした。これは全て悪い行為だ、場合によっては他人を傷つける。

元より壊すのが得意分野な私だから仕方ないのかもしれないが、どちらにせよそのどこに優しさが有っただろう?

何の思いやりが有った？

——Nein.^{無かった}

「不用意に傷つける大人のどこが優しいと思ったの？」

「どこ」——「どこ、か」

必死で何かを手繰るように俯いて考えている。

無いものを探しても仕方ない、と言いつうになつたところで漸く言葉が続いた。

「あなたは私の質問に悩んでいた」

「そりゃ逃げたい事だったからね」

考えたくないことだったから。

「他の誰に聞いても、誰もが即答だった」

「割り切りが良いんだろう、みんな。羨ましい」

私は放置できなかった。

「あなたは割り切れなかった」

「そう、私は駄目な大人だ」

そんな中途半端は、それだけで罪だ。

「だから、優しい人だ」

そのはずだ。

——だから、優しい。意味が取れなかった。解決はしていない。投げ捨てた、そのどこに優しさなんて。

「解決できないからと誤魔化したり、はぐらかしたりせず真剣になつてくれた人だ」

「私はあなた以上に私に優しかった人はまだ知らない」

そんな事ないと思うけど。

「ひーちゃんは？」

「とても良い人だ。だけど、あなたに勝つことはないだろう」

「それでもないよ、ちよつと弱いけどアレこそ真の善人だ」

別に飾ったりしたわけでもなく、強かつたわけでもない。

それでもああいう風に在ろうとするのは善人だ。紛れもない一般人で、突き抜けてる。

首を振られる。

「彼は二人目だ、一人目ではない。どんなものでも最初は特別だ」
「指揮官、世界で一番最初に私が信頼したのは——きっとあなた
だった」

そんな、馬鹿な話があるもんか。

言うことを聞かなかつたじゃない。質問ばかりだったじゃない。
何も私は——解決していないじゃない。

軽々しく言うものじゃない。私は何も応えられない、また失敗を
することになる。出来るだけ期待には沿うように行動してきた人生で
は有るけど、これだけは私にはできないことだ。

「整理はもう良いだろう。改めて指揮官に聞きたい」

「あなたが私に向けてくれる感情に、私は何を返せば良いだろうか？」
分からない。何を渡したのかも、何を返して欲しいのかも。

私は何かを返してもらえようかをしたのだろうか？ 一つ
も思う。私は壊して壊して、偶にこうやって誰かの心を踏み荒らした
りもする。外敵に対して適切な処置だとしても、これは誰かに対して
向ける態度じゃない。

感謝される理由がわからない。

「分からない……………」

私は何をしたいのかよくわからない。

何がしたいのかはいつも明白なのに、他人に何を求めているのかが
自分でもわからない。考えるだけで頭が痛くなるし、何より分からな
い自分がつまらなく見えて仕方なくなる。

「誰かに何かして欲しい、なんて思ったことない。だから本当に分か
らないんだけど——」

言われてもピンとこないのだから仕方がない。分からないけど——

「——分からないからさ、とりあえず幸せにでもなってみてよ」
彼女にはイマイチ、自分の感情というものが分からない。

判別できないだとか理解できないというのとも少し違う、それを人にどう向けるべきかがいつも分かっていない女性だった。

今回もそう。絞り出した言葉は何だか違う気がしている、もっと適切な言葉が有った気がする。

こういう時は言葉に尽くせないと知っているから、彼女はもう言葉にはしない。静かに抱きしめるだけ。

——言葉は嘘になるけれど、こういうことは嘘にならないから。

彼女が言葉の要らない仕事に就いたのも、きつとそういうところが関係していたのだろう。

「どれだけ迷惑をかけてもいいし、どれだけ私を嫌いになってもいいから幸せに生きて欲しい」

「グラーフちゃんだって、オイゲンちゃんだってそう」

彼女の後悔はそれだけだった。

Z46の一件以降、ただそれだけが気がかりになっていた。

——この娘達は、幸せなのだろうか。

考え続けても彼女にはわからない。彼女は戦つてこそ自らを見出す生命体であり、あくまで普通の少女である彼女達と根本的に分かり合えない。

少女の言う通り、確かに彼女は優しくかったのだろう。不器用ではあつたし、失敗はきつと多かつただろうし、あんまり良い解答をいつも出せたわけではなかつただろうが。それでも。

「別に恩返しとか、そんな大層なことをしてもらうようなことは出来ないから」

「偶に元氣そうな顔が見れば、何かもうそれで良いや」

それは優しく残酷。男性的で女性的。災害であり無害。

それは矛盾を持ち合わせない、何故なら双極する何もかもが混じらないから。生まれ育んだ歪を背負つて、そして当然のように息をする。

それを星と呼ぶのなら、紛う事無き流星である。

——故にその名は星を冠する。その歪さ故に、燃えゆくその身の熱さを、苦しさを、絶望を、恐怖を——誰とも分かち合えないのだ。

故に流星は願いを聞き届け続けるだろう。痛みを知り、痛みを知られぬ辛さを知る其れが、誰よりも痛みを理解し、何よりも優しく在ろうとすることは——当然ながら、疑いようなのない必然なのだから。

「マッチポンプのグラーフさんじゃないですか、奇遇っすね」

双眼鏡で執務室の窓から二人を眺めていた佐藤がニヤニヤとからかうように部屋に入ってきた彼女に言った。

彼女は不快そうな顔の一つもせず佐藤の横に立ち、二人のいる食堂を眺める。

「佐藤は趣味が悪いな。今ぐらいはそつとしておいてやればよからう」

「とか言いながら一番見渡しやすい此処に来る辺り——あ、すんません」

握られた握りこぶしを見て佐藤が萎縮する。

「見た目に反して結構優しいよな、グラーフさん」

「はっ、おだてているつもりか？」

——いや、本心なんだけども。

「フイーゼちゃんにこんな小粋なムードセッティングが出来るとは思えないし、アンタが根回ししてあの状況にしてやったんだろ？ 多分だけど入れ知恵もしたでしょ」

「——全く、貴様だけがイレギュラーで困ったものだったぞ？ まあ誤解をして飛んでいった時はホツとしたが」

その話はやめてくれよ、と佐藤が苦い顔をする。

「それは良いが——佐藤、一体返事はどうする気なのだ？」

「え？ 何のことです」

「とぼけるな。貴様は疎い性格ではないだろう」

グラーフの鮮血色の瞳に佐藤がビクリとする。

——うーむ、そうは言われてもなあ。

彼は別段二次元に馴染みきった人種でもなく、全く気づいていないというわけではなかった。

単に扱いかねていたというのは有る。理由は様々だが答えだけを言ってしまうとノーなわけで、そこも拍車をかけて彼の動きを煮え切らないものにしていた。

「まあ、はつきり断るよ。俺は此処の娘にそういう感情はない」

「瑞鶴もか？」

佐藤が吹き出す。

「有り得ん。それはアツチだつて同じでしょうよ」

「そうか。我にはよく分からぬが、当人達がそういうのならばそのようなのだろうか」

なんか適当だなあ、と彼は呆れつつもまた双眼鏡を覗き込んで観察に戻る。

しばらく二人で眺めている内に、食堂側の二人が何処かへ行ってしまふあたりで彼が口を開いた。

「次つて何時此処に來れそう？」

「何だ、急に」

「いや、手伝つてもらふことが有るかもしれないからさ」

グラーフの眼が佐藤の方に向けられる。佐藤の顔はいつもどおりの腑抜け顔で、一体奥底で何を考えているのかがイマイチ掴みづらい。

「返答しかねる、彼女に直接聞けばよいだろう。独断で喋って面倒事が起きてはかなわぬ」

「そうか、それは悪かった。意地の悪い質問だったらしい」

彼は双眼鏡を机においた後、おもむろに机の上の紙を漁って何かを探し始める。

整理のなつてない机にグラーフは少し辟易としつつも彼の動向を眺めていると、唐突に一枚の紙を取り出してグラーフの前に見せた。

「二ヶ月後にロイヤルの偉い軍人さんを招いた何かアレが有るらしくてな、俺も参加するらしいんだよ」

「ではその日の予定を聞けば――」

「それともちよつと違ふんだ。そこら辺は追つて伝えるよ」
そう言つて笑つた後、佐藤は幾つかの書類を持って執務室を後にする。

——我に覗かれても構わぬのか、これは。

呆れながら机の上の書類をパラパラとめくる。内容は特に見なかつた、そういう趣味はない。

「しかし——目つきが変わつたな」

以前の無気力そのものに比べると少しだけ、男の眼には光が灯つて
いるようにグラフには見えた。